
エンダ

日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンダ

【Nコード】

N8274X

【作者名】

日葵

【あらすじ】

この世界の規模はほぼ地球と同格。しかし異なる生態系を形成し、古の歴史に依存し独自の文化を形成している。異世界から来た民「エンダ」は、この世界を「Another World」と呼んだ。

真実を

突き詰めるまでは絶対に死ねない……強い意志を持って異世界への扉を開いたハルが、助けてくれた元と共に「エンダ」として生きて

行くファンタジー。

（己の道を突き進む（見た目）可憐なハルに、振り回される元の物語と置き換える事も可能デス）

Prologue

水が轟音をとどろかせながら滝壺に吸い込まれていく。下から見上げる滝は、落差が百メートルもあるうかという巨大なもので、吐き出される水量に、押し潰されそうな錯覚を受ける。

『この滝壺に足を踏み外そうものなら、死体すら上がってこないのではないか……』

滝壺から五メートル程離れた岩場に立ち、ハルはそんな事を考えていた。巨大な滝からの飛沫のせいで、岩肌は大きく抉られ地面はぬかるみ、数十メートル先の視界もはつきりしない。ハルが立つ場所であっても、ハルのバトルドレスは滝の飛沫で、水を被ったようにぐっしょりと濡れていた。

ハルはピクリと眉を上げると、どこまでも深い森に目を向けてボソリと呟いた。

「……元達を突破したか」

ガアアアアア

突然鬱蒼とした木々を振り切って、体長十メートル級の獣が眼前に飛び出してきた。剥き出しの牙、ギラリと縦に入った瞳孔、ごつごつとした毛のない身体、そして額に深い黄色を讃えた宝玉……、

『ティラノ系だな』

見て余る獰猛さを一瞥すると、一度バランスを崩した獣の動作に、ハルの視線がその腕に移った。

『元か』

獣の右腕が切り落とされ、大量の血が滴り落ちている。左腕は木の根元程の大きさで、その先には鋭利な爪がギラリと光っていた。

『致命傷にはなっていない……しかし、かなりの消耗だ』

立ちはだかるハルの事など目に止まっていない。腕を斬り落とされた怒りから、我を忘れているのだらう。耳を塞ぎたくなるような雄

叫びを上げ、森を抜けた先にある集落を目指し突っ込んできた。

ガシュ！！！！ ドン！！ ドシャーアアン！！！！

獣が滝を通り過ぎた、一瞬の出来事だった。獣の行く手を阻む様に、輝く「光の盾」が荘厳な音と共に出現した。光の盾は獣を悠に超える大きさで、壁と見間違わんばかりだ。この世のものとは思えない創造物は、正面から突っ込んだ獣の巨体を、滝壺に弾き飛ばした。

「ここまでだ」

盾の背後に、腕を上げるハルの姿があった。足元には、光の盾に刻まれた同じ文字の魔法陣が浮き上がっている。ハルがスツと腕を下げた瞬間、光の盾はその形を消した。

『ここを突破されたら、この先の点在する集落が壊滅する。何としてもここで阻止する』

ギアアアアギアエエアアアアッアギギアアア

獣は、滝から吐き出される水量によって押し潰され、滝壺の中から浮き上がって来られずに居る。

「ふむ、やはりこの程度の滝では駄目か……」

獣の怒濤が空気を揺らし、宝玉が滝壺で鈍く光ったその時だった。

獣はその滝壺に立ち上がり、一步一步ハルに向かって歩みを進めた。巨体に弾かれた大量の水が、嵐の如くハルに襲い掛かる。ハルが水を払う仕草をした瞬間、光の盾が出現し全ての水を弾き返した。

『しかし……』

情報を遥かに上回る成長具合に、軽い溜息を吐く。

『成長が早い。恐らくリストに上がった後に、いくつかの狩りを経験したのだろう。全く厄介な生き物だ』

この「光の盾」は闇に属する生き物であれば触れただけで、多少のダメージを与える事が出来る代物だ。しかし目の前の獣は、受けたダメージを感じさせる事なく滝壺から這い上がって来る。

ギ……

獣はその時初めて、眼前の小さき生き物の存在に目を止めた。黄色の瞳に黒く縦に入った瞳孔を妖しく一度光らせる。

「用心深い奴だ。宝玉も深い色彩になるわけか」

この世界の最高位に居ながらにして、その用心深さに失笑が浮かぶ。こちらの動向を窺うように、上半身を左右に動かし、ゆっくり一歩ずつ近づいてくる。

「ここで阻止する……か」

滝の轟音で掻き消される事を見越して、ハルはボソリと呟いた。

「この世界、Another world」の扉を開けて……もう四年だ」

ガキン！

鈍い金属音が、感情ない声を耳触りと言わんばかりに響き渡った。

ガギン！ ガギーン！！

片腕を失ってもなお失われない破壊力で、盾を壊さんと執拗に打ちつけて来る。無表情で片手を上げて光の盾を形成しているハルは、獣の姿に視線を上げた。

「この私が、こんな化物と対峙する事になろうとは……な」

獣が大きく腕を振り上げた刹那、光の盾がその存在を消した。殺戮という名の快楽に目覚めた獣が、この瞬間を逃す筈もない。ニヤリと口角を引き上げると、牙をむき出して襲い掛かってきた。

「……届け 世界の叡智」

いくつもの眩い位の魔法陣が、ハルの掌から溢れ出す。そのまま腕を上げると、獣に向かって大小の魔法陣がなだれ込んだ。

グギャ……？

獣が身体に触れる魔法陣に気付いた時には、時すでに遅い。

ギギギイイイギギイ

見えない力に四肢が縛り上げられ、一切の自由を奪われたのだ。それだけではない。抵抗する体から、急激に体力が失われ、その脱力感に獣が低い唸り声を上げる。

「元」

大木の枝の上で体格のいい男が、背丈程の長い剣を肩に携え、獣を

上から見下ろしていた。体つきを見ても、前線で戦う戦士だと見て取れる。

「遅いぞ」

ハルから、ジツと睨み付けられた元は、頭をボリボリと掻いた。

「わりい、腕一本持つていく代償でこっちもかなりヤバくてさ。爺さんに回復の魔法で治してもらってたら、遅れを取っちまった」

そうニカツと笑うと、背丈程ある剣を難なく振り落とす。

「終わらせよう」

ハルの感情なく呟く声に、元は真剣な表情を浮かべフツと視線を落とす。一瞬元の憂いな表情に、ハルは目を細める。

しかし次の瞬間には、獣を見据えガツと枝を蹴り上げた。

「おうよー!!」

そう叫ぶと、剣を大きく振り被った。

第1章 Usual spot - 1

「フフーン」

コンビ二袋をぶら下げた一人の女性が、マンションの前にスツと立ち止まると、

「フッフッフ」

そう含み笑いを浮かべる。偶々周囲に誰も居なかったから良かったものの、見る人が見たら怪しさこの上ない。

目の前にそびえ立つマンションは、高層とは言えない上、築二十年の中古マンションだ。老朽化が進んでいるのは、否定出来ない。しかし、女は中々の風貌にうっとりとした表情を浮かべている。窓から漏れる灯りの一つ一つに、物語が紡がれている様な気がして、女は更にニンマリと笑った。

『はあ……何度見ても素敵なマンション……このマンションが売りに出された時は運命を感じたもん。ちょっと本当に素敵……ほら、ほら！ あの部屋……角部屋、東南向き、もつと言えば駅近、スーパー五分圏内……この歳でマンション購入なんて、あゝ最高！！』
「グッフウフ」

偶々会社帰りのサラリーマンが後ろを通り掛かって、ビクリとのけ反ると、女を怪訝そうに見ている。通報した方がいいだろうか……そんな事を考えていそうな表情に、女は慌ててマンションの扉を開いた。

「ただいまー！」

勢いよく玄関を開けると、ドアの隙間から外から見た灯りが漏れている。廊下の先のドアが開かれると、娘の帰りを待っていた母親がパタパタと廊下を駆けてきた。

「おかえり、ハル」

「ただいま、お母さん！！ あゝもう、お腹空いたっ！！ あ、で

も、でも、ねえ今日寒かったよね？　もう体が心底冷えた……どうしよう、先にお風呂にしようかな……いやいや、めちゃお腹が空いてるしなあ」

矢継ぎ早に会話を続ける娘に向かって、母親は呆れるように笑う。

「もう、次から次へと。どうするの？　食事？　お風呂？　あ、もうハルったら、またコンビニでお菓子買って！！　勿体ないから止めなさいって言っているでしょう？　欲しかったら、スーパーで買ってくるのに」

ハルから渡されたコンビニ二袋を見ながら、眉間に皺を寄せる。

「いいじゃん、今日食べたかったんだもん。だってほら明日給料日だし、ちよつと位の贅沢は、頑張っているご褒美、ご褒美。ほら、お母さんの好きなプーノだよ。後で分けて食べよ」

アイスを指差しながら、弾けるような娘の笑顔に、母親は愛しいと言わんばかりに微笑んだ。

『いくつになっても子供だと、思われているんだろうな……』

母の頬笑みを思い出し、ハルはお風呂の湯船に肩まで体を沈めた。食欲が体の冷えに負けた結果だ。温かい湯船に体を浸すと、色んな事が溶けて無くなる様で、ホオツと安堵の息を吐く。唇を湯船に沈めると、

「だってさあ、あんな会社で働いているとストレスも堪るっーの！！」

吐き出す愚痴が、水泡となって消える。

『心配症のお母さんには、絶対に愚痴を言いたくない』

ハルはこの家で愚痴が言いたくなる瞬間は、こうして発散する事に行っている。

「溜め込むよりいいという事で」

そう呟き湯の中に頭まで沈むと、今日の出来事を思い返していた。

「だからあ！！　何度言えば分かってくれるのかなあ??？」

ハルは、朝出勤したら机の上に置かれていた書類の件で、延々と直属の上司である課長から怒鳴られ続けていた。課長は三十後半なのだが、既に頭が薄っすらと薄い。粘着質な性格は、社内では有名だった。

ハルの朝は早い。自席に無造作に置かれた書類に目を向けると、小さな溜息を吐いた。時計の針は八時半を指している。

『九時始業にも係らず、九時五分に用意して持って来いって』
書類を手にすると、更に大きな溜息を吐く。ポストイットにはこんな殴り書きの文字が走っていた。

【九時五分までに、二百部。揃えて持ってこい】

今から取りかかれば、問題無い。体を翻しコピー室に向かう最中、ふと歩みを止める。ハルは指示を出した上司の机に目を向けるが、勿論未だ出勤をしていない。恐らく昨日置いて帰った書類であろう。『昨日定時で帰っていたよね？ 全くやる事が小賢しいというか……。どうする？』

コピーをするか、上司が出勤して来るのを待つか……迷い兼ねている所に、

「おはよう」

恰幅の良い体型をした部長が、ドアを開けて入ってきた。

『よし』

ハルは、部長が席に着くのを見計らい、書類を抱え声を掛けた。

「おはようございます。部長、あの一点お聞きしたいのですが、宜しいでしょうか？」

「何だね？」

「はい、課長からコピーを指示されたのですが、両面でコピーをするべきか迷いまして。今日の会議で使われるのだと思うのですが、二百部を九時五分までにという指示ですので、課長が出勤されてからだと……」

ハルは何とか、「間に合わない」その言葉を飲み込むと、じっと部

長の指示を待った。部長は書類を受け取り、顎を手で撫でながら、フーンと頷いている。

『課長から受けた仕事を部長に確認するなんて、かなりのルール違反だね。でも、九時五分がタイムリミットだもん』

ハルの焦る気持ちとは裏腹に、部長はゆったりとした言葉を繋ぐ。

「おかしいね。お昼からの会議で使う書類の筈だよ。しかも、二百部は必要無い筈だが？ 蒲田君に確認したまえ」

ハルは部長の指示に、頭を下げ自席に戻るとパソコンの影で溜息を吐く。これからの展開が、手に取る様に想像出来たからだ。

「全く、僕が九時五分って言ったら、用意出来てなきゃおかしいよねえ？ ホント、こんな仕事も満足に出来ないのかねえ、田中君」

課長 蒲田がバサリと書類を机に投げ捨てた。九時十分に出勤してきた課長は、席に着くなり声を荒立たせた。頭を下げるハルに、自席で肩肘を付き下から舐めるように叱責を飛ばす。

「申し訳ございません。両面か迷いまして……。二百部も失敗するわけにはいかないと思ひまして」

「君イ、何年OLやってんのかなあ！？ それ位常識で分かるデシヨ？ 会議で使う正式書類なんだからさあ、両面で何よ？ 意味分からないんだけど？ って言うかさあ、間に合わないよ！？ どうしてくれんの？？」

『……前はエコで片面って何よって言っていたじゃない』

「あの……今すぐに片面でコピーを……」

「もう遅いよ！！」

飛び交う怒号に、広いオフィスの空気が淀んでいく。ある者は、眉間に皺を寄せているし、ある者は溜息を吐きながら席を立つ。興味本位で視線を向けている人もいる。

『いい加減……長いな』

十分以上続く怒涛に、思わず視線を落とした瞬間、

「へえ！？ 上司から注意されているのに、よそ見かね！ 僕の気

持ち、全く伝わっていないようだねえ!？」

「い、いえ……よそ見なんて……」

「言い訳なんかするな!!!」

更に激しい叱責が飛び、ハルが更なるターンを覚悟した時、課長の席の内線が鳴った。

「ち、誰だ?こんな時に!!……あつ、部長! はい、はい、は? はあ……はい……分かりました」

課長が力チャリと受話器を置くと、先程までの怒濤が嘘みたいに、声を潜めハルを下から睨みつけている。ハルは最悪な状況に陥った事を認識した。

「君、席に戻っていいよ。……僕の仕事を部長に相談するなんて、いい根性しているじゃないか……!」

ギリリと歯を食いしばる音が聞こえそうな程、睨みつける様にゾツと背筋が凍る。

「そんなつもりじゃ……!」

「いいから、席に戻れ!!」

そんな怒濤の後に、再度課長の内線が鳴った。課長がワタワタと受話器を取り、二・三言言葉を発すると、舌打ちをしながら席を立つ。その後部長に注意を受けたらしく、受けた屈辱からか、席に戻ってからのいつものブツブツと何かを呟いてる。その様子に、オフィスには終日、どんよりと気まずい空気が立ち込めていた。

第1章 Usual spot - 2

「部長が朝の会議から戻ってきたのを気付かずに、怒鳴り散らしていたんでしょ？ 本当に自業自得。注意されて然るべき。流石管理部長、分かってる！！」

魚介類のパスタをパクリと頬張り口をモグモグさせながら、同じ会社で働く女性、沙織が声を発した。

営業の前線で戦う沙織は強くて明るく、会社で一目置かれている存在である。ハルは経理に所属しているが、システム化されている現在では、営業の彼女とは接点はほぼ皆無だ。会社の誰もが知っている有名人位の認識だった。しかし廊下ですれ違いざまに、

「ねえ、一度飲みに行かない？」

そう、彼女から声を掛けられのだ。端正な顔立ちの沙織からは、想像も出来ない程の毒舌は、飲んで五分足らずで全開だった。沙織の竹を割ったような性格に、ハルは何度も救われてきた。

【今日偶々お昼に帰って来れたから、一緒にランチに行こうよ。】

今日お弁当の日じゃないよね？】

今日も十一時に沙織からメールが送られてきたのだ。上から不当な扱いを受けた日は、どこからか聞き付け、声を掛けてくれる。ハルには、それが単純に嬉しかった。

『沙織が居なかったら、とっくの昔に会社辞めていたかも』

「良かったじゃない。横柄ぶりが部長の目に留まって」

沙織の気遣う発言に、ハルは複雑そうな表情を浮かべる。

「そんな事ないよ。これからは部長に隠れてやるに決まっているもん。上司である事には変わりしないからさ……失敗したなあ。部長に確認したのが間違いだっただかも」

中々テンションが上がらないハルに、沙織は励ますように言った。

「だってさあ、絶対両面でコピーしていても、片面だったって言うよ。二百部、会社の経費を何だと思っているんだ！ 非生産部門の

くせに、分かっているのか！？　ってね。絶対にハルを陥れようとしているんだもん。自分が一番非生産人間だっつーの。毎日仕事もせずに、パワハラしているような奴に言われたくないよね。労組に訴えなよ。あいつ、全員から嫌われているからさ、絶対失脚するって。だいたい何なの？　ハルにだけ雑用言いつけちゃって……アー
思い出しただけでも、あの禿げ、あの二キビ、ム力つく」
ハルは忌憚ない沙織の言葉に、プツと噴き出した。

「陥れか……そうだろうな。一年間、ずっとあんな感じだよ。でも、会社の対応は変わらないもの。私の上司である事は、今後変わらないよ。労組も駄目。会社に居られなくなったら困るもん」
ハルの言葉に、沙織は心配そうな表情を浮かべた。日に日に不条理な上司の行動は、会社でも噂される程エスカレートしている。

『何故会社が容認しているのか理解できない。はあ……何でよりによつてハルの部署にあんなのが。うちでは珍しく中途入社な上に、一年前に採用されて数カ月で課長だなんて。ハル……大丈夫かな』
「ハル、無理しちゃ駄目だよ。経理課だけじゃないから、最悪異動も有りだからね」

ハルは浴室の天井をジッと見据えた。髪から水滴がポトリと落ちる。
「駄目だよ……私はここを守るんだ。絶対に会社を辞める訳にはいかないの」

そう呟くと、またブクブクと水面に顔を沈めた。

お風呂を出たハルが、食卓に目を向けた。母親が温めた鍋から、煮魚をよそっている。テーブルには、所狭しと母親の手料理が並び、温かな湯気を立てていた。少ない生活費をやりくりしながらのクオリティの高さに、ハルは毎度唸り声を上げる。

「すっごくいい、超！　超！　美味しそう」。お母さん、超天才！
！」

そう言いながら、パクリと里芋の煮っころがしを頬張った。

「美味しいいい。私じゃ、こうはいかないもん。お母さんの子供で良かった」

頬に手を当てて、堪らんと言わんばかりの表情を浮かべる我が子に、母親は「大げさねえ」そう言いながら微笑んだ。仕事で遅くなるから先に食事を済ませる様に言っても、何時になろうと待っていてくれる母だった。

「ハルの料理の腕も、悪くないわよ。ねえ、そういえば仕事は大丈夫なの？」

母の言葉に、ハルは内心ドキリとしながらも、とぼけた表情を浮かべ、パクリと鳥の笹身の酢和えを口にする。

「へ？ 何、どうして？」

「だって、最近毎日遅いじゃないの。必ず九時以降なんだもの」

ハルは、母親の言葉にブツと噴き出した。

「何言ってるの。それ位、常識の範疇だって。全然、私なんて早い方なんだから。これで遅いつて言っていたら、ホント世の中の会社員に怒られちゃうよ。それに私は恵まれている方！ 家の事、全部お母さんがやってくれてるんだもん。一人暮らしの同僚なんてホントに羨ましがってるよ」

そうなの？ そんな表情を浮かべる母親に、ハルは言葉を繋げる。

「昔のお母さんに比べたら、全然だよ。朝何時だった？ 五時前には、弁当屋と新聞配達だったじゃん。んで、会社で事務勤めして、夜は居酒屋でバイト。夜の十一時に帰宅でしょう？ もういつ寝たのって感じだったじゃん」

昔を思い出す様に、ハルはニツコリと笑った。ハルの母親は、世間で言う【働かない駄目な夫】を地で行く男の為に、苦労を重ねて来た人だった。ハルの幼い記憶の母は、一日中働いている記憶しかない。しかし、絶え間なく注がれる愛情を受け、ハルは父の事だけが悩みの種で済んでいた。飲んでは暴力を振るう父親から、いつも守ってくれた母の姿に、

『無償の愛……母から受けたこの愛で、私はこの世界で生きる事が

出来ている』

そう思うと、母には感謝してもしきれないのだ。

「私の事もいいけどさ、お母さんの人生なんだからね。お金はあんまりないけど、やりたい事してよね」

そう言う娘の言葉に、

「今までも自分の為に生きてきたわよ」

そつとそう笑った。

「それにせつかく家も買ったんだもん！　今が頑張り時じゃん！」

ハルは、グルリと自分達の城を見渡し弾けるような声を発した。ローン二五年、ボーナス時期には倍返済、固定資産税も結構な額に上る。正直な所、残業代が付く会社で有り難い。

「本当に無理していない？　こんな立派な家に住めるのは嬉しいけど……」

「全々然。それに、家賃を払い続ける事を考えたら、絶対持家が得だつて。私今二六じゃん？　返済が終わるのが五〇歳、マジ今が買いだよ。金利も安いし」

「でも貴方、結婚する時困るでしょう？　モテナイわよ、家持ちの女なんて」

母親の口から「モテナイ」などという言葉を聞くとは思っていなかったハルは、ブツと口に含まんだお茶を噴き出した。家を買う時からハルの結婚の足枷になるのではないかと、事あるごとに心配する母親に何度も説得を重ねる。

「だ〜か〜ら、言っているでしょう？　絶対入り婿だつて。何の為に、三LDKのマンションを買ったって思ってるの？　それ以外考えてないもん。お母さんと一緒に私をもらってくれる人じゃないと願ひ下げ！！　それ絶対だから」

結婚が女の幸せだと言えないが、娘には幸せになってほしい母親は、小さな溜息を吐く。

「お母さんの事は大丈夫だから。年金もあるし、少しだけパート収入もあるもの」

「その年金も収入もあいつのせいで、全て借金で消えてんじゃん」
ボソリと呟くハルを戒める様に、ジツと母親は視線を投げかける。
その視線を受けて、ハルは口を尖らせたが、

「ごめん。死んだ人の悪口は言わない約束だったね」

そう謝罪の言葉を口にする、スツと頭を下げた。ハルは心配症の
母親に安心させるように言葉を繋ぐ。

「お母さん、大丈夫。心配しないで。結婚もちゃんと考えているか
ら。仕事も大丈夫、あんな大手企業に働けるなんて、私凄く運がい
いの。マンションのローンだって、あの会社だから組めたんだし。
人間関係もこの上なく良好よ。帰宅が遅いのも期待されて仕事を任
されている証拠！」

ハルの言葉に、母親はやつと安堵の表情を浮かべると、ハルにジツ
と優しい眼差しを向ける。ハルはその気持ちに答える様に、につこ
りと微笑んだ。

第1章 Usual spot - 3

【だからいい加減、……？ あんたに……るの、……わ。この世界での……だったら、その……無くせば……？】

直接耳元に呟かれた様な気がして、ハルはベッドから飛び起きた。高鳴る心音を体に感じながら、静寂が広がる空間に息を潜める。携帯の液晶に映し出された時間は三時を示している。携帯の光が、周囲を照らすとハルはホッと安堵の息を吐いた。携帯を力チリと閉じると、顔を両掌で包み込む。

一年前からずっと夢見が悪く、ハルの悩みの一つだった。夢の内容はおぼろげでほとんど覚えて居なくても、夢から覚めると体中に嫌な汗を掻いている。初めの方はたかが夢だと軽く考えていたのだが、ほぼ毎夜見ているであろう夢に、ハルは溜息を吐いた。モゾモゾと布団に身を沈めると、暗闇を見据えて、

『これってストレスかなあ。……やばいよねえ。これ以上酷くなる様だったら、マジで病院も考えなきゃ。仕事出来なくなったら困るって』

ゴロリと横を向くと、フツと目を閉じた。

翌日、ハルは母の台所に立つ音で目覚めた。それはもう毎日の習慣と化していて、目覚しが無くても浮き上がる様にスツと目が覚める。ハルはこの音が大好きだった。

【ホント、ハルってば、マザコンだよな】

いつの日か、沙織に言われた言葉を思い出す。

『確かにそうだな』

ハルはベッドから起き上がると、カーテンをザッと引いた。東側の大きな窓から、朝日が燦々と降り注がれる。

「おはよう」

スーツに身を包んだハルが、母親に声を掛けた。

「あ、おはよう。今日も早いわね。起しちゃった？」

「ううん。早めに仕事に行こうかって。朝の方が仕事、はかどるもん」

笑うハルに、母親が朝食の準備に取り掛かった。ご飯をお茶碗に盛りつける母親に、

「それ位するよ」

声を掛けるハルに向かって、母親は頷く。その表情に一瞬曇りが見えた様な気がして、ハルは何故か心がざわついた。

「……どうしたの？ 調子悪い？」

心配そうに覗き込むハルに、母親は次の瞬間には表情を笑顔に変えた。

「ん？ 何が？ 勿論元気よ。ハルも大きくなったなあって思っただけ」

母親の突然の言葉に、ハルはブツと噴き出した。成人もとつくの昔に迎えている娘に向かって、「大きくなったなあ」はないだろう。

「いやいやいや、もうとつくに大人ですから！ ご飯よそうって位でそう言われてもなあ」

ハルの言葉に、二人が声を上げて笑う。こんな他愛のない一時を守るためだったら、何でも出来る……母の笑顔を見て、そう力強く思うハルだった。

「じゃー行ってきます……うっ、寒い」

最近すっかりと冷え込んできた外気に、身が震える。その時、

「ハル、ちよつと待って。お弁当忘れてるわよ」

母親が廊下をお弁当を抱えながら、パタパタと掛けて来る。今日は週二回のお弁当の日だ。会社の人との付き合いも大事だと、週二回だけお弁当を用意してくれる。

「あーありがとう。いつもごめんね。ね、今日の中身何？」

「ミニハンバーグとから揚げ」

「やった、昼の楽しみが増えたよ。ありがとうね」

ハルの笑顔に、母親は一瞬何か言いかけて口を開いた。

「ん？」

首を傾げるハルに向かって、何もなかったかの様に笑顔を浮かべると「いつてらっしゃい」そう手を振った。

ハルはキーボードにデータを打ち込みながら、呼び出す内線にふと手を止める。液晶画面に映し出される名前に、小さい溜息を吐きながら、受話器を取り上げた。

「お茶」

「かしこまりました」

課長の指示に、ガタリと席を立つと給湯室に体を翻す。斜め後ろに座る上司が、ニヤリと口元を引き上げている姿が目映った。

『……わざわざ内線って、何の意味があるのよ』

ハルも社会人になって数年経つ。お茶汲み程度に「女性蔑視」だという声を上げる程、青臭くもない。しかし、ほぼ真後ろに位置付ける上司の指示に、毎回ゲンナリする事も事実だ。お茶つぱを急須に入れながら、深い溜息を吐いた。

『ここで雑巾の搾り汁なんて入れたら、すつきりするのかな』

ハルはブンブンと頭を振った。勿論そんな陰湿な事はしないが、酷い時には三十分おきに内線がなる現状に、そんな考えも過って仕方がない。そのお茶も、後ろの観葉植物に捨てている事など百も承知で、お陰でレンタルの植物は、半年も持たなく枯れてしまう。

上司の湯飲みにお茶を注ぐと、速足でオフィスに向かった。

『今日こそ定時で帰らなきゃ、ホントにお母さんに心配掛けちゃうよ。もう、心配症なんだから』

オフィスに入る為に、セキュリティにカードを翳しドアを開けた時、同じ部署の先輩が血相を抱えて、ハルの名を呼んだ。その緊迫した声に、オフィス内が一瞬シインと静まり返る。

「た、田中さん！！ 急いで電話に出て！ 貴方のお母さんが！！」
何が起こったのか理解出来ないまま、ハルはガシャンと湯飲みを落とすと、電話機に向かって駆けていた。

「事故が自殺が分らないんですよ」

警察の言葉に、ハルは血相を浮かべて怒号を上げた。

「じ……自殺の筈ないじゃない、失礼な事言わないでよ！！母は自殺をする様な人じゃない！！今日の朝だって、何も変わった様子なかったもの。ほら、ほら見てよ！！母の荷物、ほらこのアイス！私の為に買ってくれたものだわ！！昨日そんな話をしたの！！そんな人がじ……自殺なんてする訳ないじゃん！！」

困惑の表情を浮かべる警察官に向かって、ハルは涙でグシャグシャになった顔を向けながら、ギツと睨みつけた。

「でもねえ、横断歩道も無い場所で、フラフラ道路に飛び出したっていう証言があるんだよ。お母さん、仕事先にも行っていないらしいし……」

警官の言葉は、今のハルには耐え難いものがある。恐らく事実なのだろう、正しく検証しなければならないのだろう……しかし、ハルは置かれたテーブルに両手をバンと叩きつけると、

「違う！！絶対違う！！お母さんは……お母さんは！！私を置いて死ぬような人じゃない！！！」

そう言っていると、力無く崩れ落ちた。

第2章 The selection-1

P
I
P
I
P
I
P
I
P
I
P
I
P
I
P
I

—

.....

└

P
I
P
I
P
I
P
I

P
I
P
I
P
I
P
I
P
I
P
I
P
I

「あゝもう！！ 煩い！！」

ハルはうつぶせのまま、目覚ましに手を伸ばし叩く様に止めた。時間は七時半をとくに過ぎている。早く身支度を整えないと、遅刻してしまふギリギリの時間だ。

「はあ……夢見が悪いなら悪いで、覚えて居ればいいのに。……お陰で今日もテンションが上がらない」

ハルは、のそのそとスーツを着込むと、カーテンに手を掛ける事もせず部屋のドアを開けた。

「あゝ今日ゴミの日か……」

コンビニ弁当が沢山詰め込まれたゴミ袋と、ビニール袋一杯のビールの空き缶に目を落とすと、面倒だと言わんばかりに溜息を吐いた。ジャケットを椅子に掛けると、洗面台に向かう。未だ凍るような冷たい流水に手を差し込み、顔を洗った。水が滴る顔を一度だけ、鏡に向けると不摂生が祟っているのか、目の下に黒いクマがくつきりと浮き出ている。

『コンシーラーで隠さなきゃ……』

タオルに顔をうずめても、次の行動が中々起せずにいるハルは、携帯の音楽でリビングに向かった。リビングのテーブルは、母親が生きていた頃には考えられない程の散らかり様だ。化粧品や本やお菓子などが所狭しと置かれている。ハルは携帯を取り上げると、カチヤリとカバーを上げた。

【おはよう。起きているかな。今日は金曜日だよ。頑張ってる仕事】

終わらせチャオ」

沙織だった。母親が亡くなって気落ちをするハルに、二ヶ月間毎日メールを送ってくれているのだ。短い沙織らしい気遣いに触れて、何とか気力を奮い立たせた。ハルはテーブルに広がる化粧品をかき集める様に、朝の身支度に取り掛かる。

「おはようございます」

挨拶をするハルに、先輩社員が顔を上げた。

「おはよう。まだ寒いわね」

「そうですね。今日は三度位しか上がらないらしいですよ。朝のテレビで言っていました」

そう言うとニコリと笑った。勿論朝のニュースなど見る時間など無い。携帯で知り得た情報だ。母の死後、周りの優しい人達の気遣いに、何とか心配させまいとするハルだった。

笑顔で頷く先輩が、ハツとその表情を変えた。その表情が、ハルに注意を促す。

「もう始業時間は始まっているんだがね。給料泥棒かね」

ハルの予想通り、課長が痛烈な嫌味を投げてきた。振り返りざま、

「おはようございます」

そう声を掛ける。ハルの言葉を無視し「フン」そう声を発すると、課長は自席に向かってドタドタ歩いて行く。先輩が小さく肩を上げると、小さい声で「気にしないで」そう声を掛けてくれた。ハルは苦笑いを浮かべると、サイドに積み上がった書類に手を掛け、パソコンの電源を入れる。

ハルは、コンビニのビニール袋を片手に、自分のマンションの前に立っていた。寒風が吹き付ける中、ずっとマンションの灯りを見上げている。

『数か月前と何ら変わっていない筈なのに、何かが足りないよね…』

…』

家に帰り着いたハルは、ふと見上げたマンションに向かってそんな事を考えていた。

『……あ……、窓の灯り』

母が生きていた頃は、帰宅すると必ず窓に灯りが灯っていた。どんなに遅くても、不変の様に温かい灯りがそこにはあった。それなのに今は黒抜きされた様な窓に、ハルはビニール袋をグツと握り締めるのだ。

寒々しい部屋の灯りをつけて、エアコンのスイッチを入れる。

『一人の部屋ってこんなにも寒かったのか。知らなかった……こんな事、一人暮らしの友人に言ったら怒られるだろうな』

ハルはそう溜息を吐きながら、テレビのスイッチを入れる。テレビからは騒々しい笑いが繰り返されていた。芸人がいつもと変わらないネタを、視聴者が飽きるまで繰り返している。

「何がそんなに……」

耳障りな音に我慢出来なくなって、チャンネルを握りしめると、母親の笑い顔がフツと過った。

「そう言えば、この番組好きだったっけ」

金曜日は必ず二人でソファに掛けて、この番組を見ていた事を思い出す。ハルはあまりこの手の番組を好んで見ないのだが、母親の楽しそうな顔を見ると自分まで楽しくなってきた。何だかんだ言っている一緒に見ていたのだった。

「……」

ハルは、雑然としたテーブルやキッチンに目を向けると腰を上げた。散らかったテーブルのゴミを一つ一つ片付けていく。きれい好きの母の笑顔を思い出しボソリと呟く。

「こんな私を見たら、絶対お母さん心配するよね」

そう呟き一週間分の洗い物が堪ったシンクに目を移す。そしてスポンジを取り上げ、水洗の蛇口を捻った。

「田中君、いい加減な仕事をしてもらったら困るよお」

下から舐めまわす様に見上げる上司に、いい加減ウンザリしながらもハルは頭を下げた。

「すみません……」

上司の指示通りにデータを打ち込んだ結果、全く意味の無い情報だったと呼び出されたのだ。指示の不備を指摘しても状況が良くなる筈がない。上げ足を取られるだけだ。そう思うと、ハルはいつもの如く、心を固く閉ざす。耳障りな声をうんざりした表情を浮かべ、先輩がホワイトボードに目を向けて溜息を吐く。頼みの綱である部長の欄には、出張の文字が貼り付けられていた。課長はニヤリと口角を引き上げると、少し声を張り上げた。

「全く……母親が亡くなったからって、仕事はきちんとやってもらわないとねえ」

そんな言葉を投げ捨てた。途端にハルの表情が、受けた言葉でみると青ざめて行く。ハルだけではない。課長の言葉に、暴言に慣れている筈のオフィスがざわついた。

加えて声音を落とすと、

「ふう……同情心を煽ろうとしてさ」

そうも言った。ハルは、いつかこんな嫌味もあるだろうと覚悟はしていた筈だったが、実際面と向かって言われると、やはりシヨックは半端が無い。

『こいつ……!』

人道的とか常識とかそんな言葉で済ませたくなかった。周りの雑踏が、遠く聞こえている様な感覚に陥る。こんな人間の下で働く意味などあるのだろうか……そう思うと、今まで我慢してきた反動が大きな波となって襲ってくるようだ。

「母の事は……関係……ありません」

ハルは息をするのも苦しい位、憤る感情を抑え込む事が出来ない。何とかその一言だけ絞り出すと、ジワリとくる感情を抑えきれなくなってきた。

「あの……」

ニヤリと笑う上司を前にして、流石に我慢が出来なくなった時、課長の机の内線が鳴った。次の動向を見守るオフィス内は緊張が張りつめていたらしく、その音だけでビクリと体が震えた位だ。

部下に仕事をすべて任せている上司に、内線を掛ける人間はごく限られている。課長もそれを良く分かっているらしく、怪訝そうに受話器を取った。

「はあ、はあ……。はあ！？ そんな事で私に電話を掛けて来たのかね！？ 全く常識を疑うよ？ ああ、待ちたまえ、今担当に代わるから」

そう言うのと、保留と同時にガチャリと受話器を投げ置いた。

「全く……。あゝ経費の件で質問があるそうだ」

そう言うのと、机の引き出しから耳かきを取りだすと、耳を掃除し始めた。その行動や仕草に、不快感を隠すことなくハルは自席に向かって体を翻す。何とか平常心で受話器を取ろうと心掛けても、声のトーンは上がらない。

「お待たせしました。田中です」

「あ、ハル！？ 大丈夫？ このまま聞いて。今日は一緒にお昼食べようよ。場所は、ほらあの和食……。煮つけが美味しい「トクベエ」ね。じゃ、十二時にロビーね！！」

沙織からの電話だった事に驚き、ハルは中々受話器を置く事が出来ずにいた。何が何だか分からないまま、椅子に座ると、ポワンとデスクトップからメールが浮き上がってきた。思わずカチリとクリックすると、

【さつきはごめん。直ぐ切っちゃって。お昼楽しみ〜！ 皆、ハルの仲間だからね】

沙織だった。ハルは、沙織の優しさに胸が苦しくなる。恐らくこのオフィス内の誰かが、沙織に連絡を取ってくれたのだろう。そんな繋がりがある事に、嬉しさで顔が熱くなる。

『一人じゃない……。皆が助けてくれているよ』

第2章 The selection - 2

「何！？ あの禿げニキビ、そんな事言ったの！！؟؟ あゝもう、絶対に許せない。ハルがやらないんだったら、私がやるよ。労組に匿名で訴えてやる」

興奮する沙織を、何故だかハルが宥めている。

「いいのよ。そりゃ、ムカついたけど……沙織や皆が私の事心配してくれているって分かっているから。電話、助かったよ。思わず辞めますって言いそうになったもん」

最近は全く口にしなくなったお浸しや煮魚を突きながら、ハルは恥ずかしそうに顔を赤らめた。沙織がポカンとした表情を浮かべている。今までどんな事があっても、会社だけは辞めないと豪語していた親友の心境の変化に、動揺し声を上げた。

「やだ！ 辞めないで！！ ハルは仕事辞めちゃ駄目だよ。あの仕事好きなんですよ？ だから、頑張って仕事を続けていたんでしょ！？ 家の事だけじゃないよね。私がハルに声を掛けたのも、どんな仕事でも文句を言わず頑張っているハルを尊敬していたからだもん！」

今にも泣き出してしまつのではないだろうか……強気な沙織の別の一面を見て、ハルは逆に焦った声を上げた。

「だから、辞めないって。辞めるって言いそうになったただけだって」「それが危ないんじゃない。あんな男の下だったら何時か言っちゃうって事でしよう？ あゝもう、絶対に嫌！！ 女性人全員で嘆願書だそうかな……」

ハルは、本気で遣りかねない沙織を必死に宥める。

「その気持ちだけで十分だって。……沙織、ありがとう。長く心配かけてごめんね。私……自分だけが不幸だって、辛いつて思っている……沙織、ずっと心配してくれていたのにね」

ハルが頭を下げると、本気で沙織が涙を流した。

「馬鹿！！ あんた、そんな所は頑張んなくていいんだよ。悲しい、辛いつて当たり前だって。家族つて特別じゃないの。ウンと悲しんで、涙流して、それ位やつても立ち直れなかつたりするじゃん。いいんだよ、私の前でそんなに頑張んなくっても」

そう言うのとボロボロ涙を流している。平日の定食屋で、女性が涙を流す光景は、とても不思議だった。一応小さい座敷だったが、周りのおじさん達が不思議そうに覗き込んでいる。

「ちょっと……何で沙織が泣いちゃう……の……」

そう声を掛けるハルまで、沙織の温かい心に触れて、無意識に涙が溢れて来た。

「沙織が泣く……から、つられて私……まで涙が出て止まらなくなつたじゃない……。ハア……どうして……くれんのよ」

ハルと沙織はお互いの涙に濡れた顔を見てブツと笑った。笑った先から、笑いが込み上げると、もうどうにも止まらなくなってしまう。女二人が和食定食を食べながら、ボロボロ泣きながら大笑いをしていなのだ。最後には店員が気遣って声を掛けて来る程、笑って泣いた。その気遣いに、また泣いた。

ハルは昼食から戻ると、直ぐに化粧室に飛び込んだ。

「うわぁ……我ながら酷い顔」

目は真っ赤に腫れている上、鼻の頭は真っ赤になっていた。思い切り泣いた事など一目瞭然で、流石にこの姿でオフィスには戻れない。急いで化粧を直すと、ハルは隠れるように自席に戻った。

『やばいなあ、私は良いけど沙織は営業でしょう？ 大丈夫かな』
そんな心配をブツブツ言っていると、先輩がボード越しに声を掛けてきた。とても言い辛そうにする態度に、嫌な予感が過る。

「田中さん……課長が二〇四会議室に来るようにつて」

「え……」

いつもであれば、長々と自席でこれ見よがしに小言を言うタイプが、あえて会議室を指定してきた事に、ハルは更なる不安が過った。

第2章 The selection - 3

「……失礼します」

ハルが会議室のドアを開けると、課長は議長席に一人で座っていた。
「……という事は、私は……」

広い会議室に二人が向かい合って座ると、圧迫される空気に気持ちが淀むような気持ちに陥ってしまう。そんな空気すらも楽しむ様に、課長は長い前置きを置きながら言葉を繋いだ。

「それでね。君に、会社からお願いがあつてねえ」

ハルは、上司の猫なで声を聞いた瞬間、後頭部から背中にゾワツとした痛覚が流れた。もったいぶりながら、あのねえ、でねえと何度も繰り返している。

「庶務に欠員が出てねえ。ほら庶務って仕事は地味だけさあ、やる事いっぱいあるじゃない？ だって、社員が働きやすい状況を作るのが仕事でしょ？」

「……あの、それで……？」

この後の展開は、聞かずとも分かる。上司の言葉を待つまでも無く、ハルの脳裏には、様々な思いが駆け巡っては消えた。

「……庶務？ まさか？」

目の前の男は目を細めながら、ハルがショックで声を出せない事が嬉しいと言わんばかりに薄ら笑いを続けている。更にトドメを刺すかの様に、大きく身を乗り出してきた。

「分からないかねえ。だからねえ、長く経理で実績を積んでもらった君に、今度は庶務で活躍してほしいと思ってるのだよ」

……その経験を活かす仕事が庶務課にあるとは思えない。いや、庶務の仕事がどうと言う訳ではない。会社は無駄な仕事はない。会社に所属している以上、異動は当然視野に入れておくべきだろう。会社は組織なのだから……そう思っているのに、思考は拒絶を続ける。
(庶務課は、リストラ勧告をされる前に社員が所属する場所だと言

われている。噂だけではない。問題がある社員が実際に在籍する場所だ。考えを改めなければ、三ヶ月間の猶予を与えられて、実質首を宣告される場所だった）

「そうそう、餞別だと思って聞いて欲しいのだから？ 君い、少し立場をわきまえて発言したまえよ。この前だって、僕の仕事を部長に相談したりして、僕の立場ないじゃない？ まあったく！ 飛ばされても文句言えないよねえ。見ている人が居るっていつかさあ」ハルを飛ばす理由を、課長はずらずらと並べ捲くし立ててくる。ガランとした会議室に、上司だけの声が響き、頭の中で木霊すると気持ちが悪くなつて吐きそうになった。

「おっしやられてる意味が分かりません」

私の言葉がカンに障ったのか、フーフーと荒い息を吐きながら、課長が吐き捨てる様に言葉にした。

「ていうか、も、明日からうちの課に来なくていいから。荷物まとめて、とつとと庶務に行つてよ」

課長の言葉に、ハルは今まで我慢してきた感情が、一気に沸点まで到達し、そして弾けた。

『何なの？？ この状況は！』

「その言葉は、会社のご判断ですか？ 部長に確認させて頂いても宜しいのでしょうか！」

ハルの剣幕に、これが切り札と言わんばかりに、課長はニタリと笑う。

「ふう、当たり前だろ。会社からの辞令だよ。君に対するね。あくまで僕は、代弁者だけど？」

そう言い放った。

『え……？』

底の見えない地底へ、一気に突き落とされた……そう感じた。これが会社の判断だって？ 意も言われぬ、虚無感が襲う。

目の前に突き付けられた現実が、途端に色あせた。

『何だかもう、どうでもいいや。マンションだって売ればいい。一人であの家は広いじゃない。お母さんもいない。どうせ一人だもん、どうとでも生きていける』

窓から差す午後の暖かい日差しですら、ハルの気持ちの慰めにもならない。廊下から聞こえる雑踏が、別の世界の音のように聞こえて来る。

『仕事も、会社も、この上司も、怒りも、悲しみも、どうでもいい』ハルは、自暴自棄になる感情を抑えきれず、思わず……そう思わず「辞めます」と言い掛けた時だった。

【やだ！ 辞めないで！！ ハルは仕事辞めちゃ駄目だよ。あの仕事好きなんですよ？ だから、頑張って仕事を続けていたんですよ！？ 家の事だけじゃないよね。私がハルに声を掛けたのも、どんな仕事でも頑張っているハルを尊敬していたからだもん】フツと沙織の言葉が蘇った。

『私の為にあんなに一生懸命になってくれた沙織……ここで辞めるなんて、言っちゃ駄目……！！』

沙織の言葉と、その涙を思い出し、ハルはグツと拳を強く握り締めた。

その刹那、突如会議室内が光に包まれた。

「え」

その光は収縮し、直径一メートルの球体に姿を変えた。目の前で起こった事象に動けないハルは、思わず光の先に居る課長に目を向ける。しかし課長はこんな状態にも関わらず、にやにやと締らない顔をしている。

『え？ 何？ 私だけしか見えていないの？？』

ハルがもう一度目を落した時、上司の異変に気付いた。確かに笑いながら座っているのだが、明らかに人間のそれらしくない。人間はこんな風に、不自然に存在する事が出来るのだろうか。

一瞬、突然の光の出現に、驚いて動作が止まっているのかと思っ

たが、全てが一瞬にして画像として切り取られたようだった。半開きの口、そして今では焦点が定まっていない目。正に蠟人形そのものだ。

「な……何？ 何が起きているの！」

理解の範疇を超える状況に、ゴクリと息を飲んだ。

第2章 The selection 4

「はじめまして」

突如球体が声を発した。

「は？」

「この空間で話するのは初めてね」

『何が!?!』

「ちよつと、誰かふざけてんの!?! 何なのよ!?!」

混乱するハルに、救いの声はない。ハルの叫びに、光の球体はブツブツと言葉を繋ぐ。

「叫ばないでよ、煩いわね。私の事は散々夢で説明したでしょう? たく、たかだかこの世界を捨てて、あの世界に行くだけの話なのに、何でここまで駄々捏ねるのかしらね。何で自分じゃないと駄目なのよってさあ……」

光の玉はハルの存在など、どうでもいいというかのように、独り言のように捲くし立てている。

「子供過ぎても駄目、ゲーム感覚だと、中々いい結果を出すんだけどねえ。少し痛い思いしただけで、戦意喪失しちゃうし。自分の限界が図れなくて、力のコントロールにムラがあるし……。だから、簡単に生まれ変われる、元の世界に戻るなんて夢を見る。爺さん、婆さん過ぎても駄目。タイプによっては、命を綺麗なものだって変換しちゃうから。じゃ〜どうしようかなって考えた時、あんた達位の大人に目を付けたって訳〜。通常は成功者や人格者が選ばれるけど、あんたに限っては知らないわって何度言っても、あんた首を縦に振らないしさあ」

「夢？」

「え〜、あんたそれすら覚えていないの?? 全く低スキルの人格しか有していないとそんなものなのねえ。ふう〜ん。そうなの……。全く! 思った以上に時間が掛かったわ。どんなに最悪最低な状況

に追い込まれても、何かしら活路を見出したりして……本当に、冗談じゃないわよ。本当に厄介な人間ね、あんた。成功者は強い意志で扉を開くけど、ワタシあんたを絶望から「Another World」に導きたくて……」

光はここで堪らないと言わんばかりに、クツクツと含み笑いをする。

「ねえ、毎晩夢見が悪いって結構辛かった？」

面白くて仕方がないと、ギャーヒヤヒヤと品の無い声を上げて笑う。

「貴方が……？」

「中々究極の絶望感なんて、ならないもののねえ。ホント、時間がかかって仕方なかった」

ハルは何も覚えていない夢を思い返していた。夢の内容は覚えていなくても、いつも嫌な感覚に陥り朝を迎えていた。全て目の前のこれが元凶だったのか？……そう思うと、ぞくりと背筋が冷える。

『一年以上前から、何が起きているって？』

「究極の絶望って……」

次の瞬間には、光はハルの目の前だった。

「！！！！」

ハルは本能的に一步後ずさる。

「Another Worldの扉はね、強い意思か、若しくは強い絶望によってしか開かれないの。だから「エンダ」になるべく選ばれた人間を先導する者達は、強い意志を持って扉を開けさせる様に説得するのね。通常は、人格者や成功者だから、最終的には扉を開けるんだけどさあ、私が連れて来るように指示された人間はあんたでしょあ？」「Another World」でエンダとして民を助けたいって思う筈もないし。仕方ないから、誰も試さない「絶望から先導する」方法を試したって訳」

『全く意味が分からない！！』

途端に恐怖を覚え、ハルが後ずさりをした瞬間、光から鋭く何か伸びて手を掴んだ。

「いやっ！」

そのまま今まで味わった事が無い程の力で、グツと吊るし上げられる。余りにも強い力のせいで、掴まれた手首から血の気が引き、思わずハルは唸った。何とか振り解くべく、手を掴んでいるものに目を移した時、思わず目を疑った。

『私の手を掴んでいる手？ ……え、これは骨？』

「言っただでしょ。あんたが生きている現実を捨ててって。あははあゝはははははははははは！」

光の感情は今や沸点に達したかのように、甲高い高笑い繰り返す。

「現実を……捨てて……って」

光が発した二文字の言葉に、ハルは声を震わせた。この上ない異常な光景だが、そんな危機的状況だとは思っても居なかったのだ。

「あんた、本当に使えない人間ねえ。全然覚えていないじゃない。あゝ面倒臭い。だからあんた達みたいに使われた人間は、この世界で死んで、「Another World」でエンダとして生きて行くの！ ま、死にたくなつた訳ではないみたいだけど……でも、未練もないでしょ？」

「……そんな」

ハルが受け入れられずにいる中で、グイツと光に引き寄せられた。光だけで、他は何も見えない。見えない事が救いとすら思える。

「痛！！」

更に腕をねじ上げられ、骸骨の手は今や目の前まで迫っていた。然程ハルの存在など重要では無いと言わんばかりに、自分自身に言い聞かせるように言葉を繋げ始めた。

「もう、私は十分待ったわよね？ 手回しを重ねて、時間を掛けて色々やってあげたというのに……あんた、まだ頑張る気でいたでしょう？ いい加減、許せなくなつたわ。私、本当にあんたが嫌い。あの世界で、さっさと、のたれ死になさい」

掴まれた手に、更に力が籠る。悪意が籠る言葉と声に、ハルの体からは、汗がドツと噴出した。自分自身に何が起きているのも理解

出来ない。理解出来ないが、危険な状況である事は確かで、生まれて初めて「死」というものを、強く実感する状況に追い込まれている……それだけは理解出来た。

「さあ、最後に良い事を教えてあげる。扉を開ける為のとおきの情報をね！　ギャハハハ！！」

悦に入る光とは裏腹に、ハルは、高鳴る心臓が破裂しそうな感覚に陥る。こんな状況に陥っている中で、光が言った「とおきおきの情報」という言葉に動けずにいる。

『聞いてしまつたら……もう戻れなくなるような気がする』

「だからいい加減、あきらめてくれない？　あんたに付いている飽きちゃったわ。この世界での執着が母親だったら、その執着を無くせば……？　ギャハハハハッハハハハ。どう、聞き覚えある？」

さも愉快だと言わんばかりに、光が声を上げて笑う光景に、ハルは目を背ける事が出来ない。

「あんた……！！」

バン！！

その刹那、会議室のドアが、勢いよく開かれた。ハルが驚いて振り返ると、颯爽と入ってきたのは、誰でも無い、沙織だった。

「沙織！？」

知った顔に、思わず叫ぶ。いや、ここは会社だ。誰が会議室に入ってきて、おかしくはない。しかし、こんな不可解な状況に、知った人間が現れる事に驚いた。

「逃げて！」

ハルは、無我夢中で沙織に向かって叫んでいた。

『沙織をこんな狂った状況に、巻き込みたくない！　課長の様になつてしまつたら！』

「何だかおかしいの！　だから！」

ハルの訴えにも沙織は、何事もないかのように、ゆっくりと近づい

て……そう思った瞬間、ハルと骸骨の手を振りほどいていた。その行動はあまりにも速く、一瞬何が起こったのか、動く事が出来なかった位だ。一瞬沈黙が流れ、

「えっ？ は？ なに？ あんたなんなの？」

室内に動揺する声が響く。沙織に手を引かれるままに、今まさにハルがドアから抜けようとした時に、

「な！ てめえ！ 何者だぁー！！」

耳につく怒涛が、割れんばかりに響き渡った。その直後、空気を振らす衝撃が、二人の髪先を突き抜ける。揺れる髪に違和感を覚え、思わず振り返った先には……つい先程通り過ぎた場所が、音も無く挟られている光景が広がっていたのだ。それは正に一瞬にして、豆腐を押し潰したように、ただその空間だけがぼっかり壊れていた。

「はっ……？」

「走れ！」

沙織の声に反応して、無意識に足が前に進んだ。沙織がハルの手を引いて、中央のエレベーターを指し、廊下を駆け抜けていく。毎日沢山の人が行き来する通路も、誰一人として姿が見えない。扉の向こうに広がるはずのオフィスにも、人の気配を感じさせない事が余計に不気味だった。

『何故私と沙織が、こんな状態で、ここにいるんだろう』

「どこに行くの！？」

沙織は先にエレベーターに乗り込むと、一階のボタンを押し、続けて「閉」のボタンを押し続ける。ハルの叫びに答えず、目の前の廊下に向かって目を見開き、ボタンを押し続ける沙織の目線の先に、あの「手」が目前に迫ってきていた。骸骨の手だけが、ハルを捕まえんと骨だけの指を広げ、グングンとその距離を縮める。

「ちょ！ 止まれ！！ ふざけんなよ！！ てめえ！！」

伸ばされた手に、『捕まってしまう！』恐怖に思わず目を瞑った瞬間、エレベーターの扉が閉じた。体を感じる降下感。状況の変化に

ついていけず、息が上がる。

「あ……」

問いかけようとしたハルの言葉を遮り、沙織は言葉を繋ぐ。怖い位のまっすぐな目に、

「現実なの？」

姿かたちは沙織の筈なのだが、醸し出す雰囲気は、全く面影を感じさせない。押される様な威圧感に、恐怖を覚える位だ。

「契約は結ばれた。貴方は、もうこの世界に留まる事は出来ない。決めなければならない」

「沙織……？ ……貴方、誰？」

沙織はそこで一度、一息置き言った。

「Another Worldに行くのか……行かないのか」

ハルは思わず沙織の腕を握り締め……その自身の手を見て、今自分が大きく震えている事に気付いた。

「わ、私は何も契約なんて」

心臓は高鳴り、声が上手く出ない。沙織は強い視線を投げたきり、微動だにしない。

「そうだろう。しかしあいつは貴方の置かれた状況を巧みに操り、貴方をこの狭間の世界に引き込んだ。

もう時間が無い。手短に言おう。貴方の精神は肉体から引き離され、この狭間の世界のみ存在している。この場所も、もう幾分もしない内に消滅する。何としても、扉を開かなければならない。……貴方の強い意思だけが、扉を開ける事が出来る」

「死んだの？ 私……」

『元の世界に返して……そう言いたいのに……』

一切の拒絶を許さない物言いに、それだけが言葉として口から出た。『滴り落ちる涙は、こんなに熱いの』

「もう、この世界には戻って来られないの？」

「……その希望だけは捨てるのだ。もう貴方はこの世界の所有物で

はない」

二人の間に、沈黙が広がった。暫しの間二人は、エレベーターが降下する階数を目で追う。その間にも、十階のランプが付いた。ハルは、もう一度沙織を見たが、不動のまま何も言ってこない。ハルは、先程の光の話を思い返す。

「もう、私は十分待ったわよね？ 手回しを重ねて、時間を掛けて色々やってあげたというのに……あんた、まだ頑張る気でいたでしょう？ いい加減、許せなくなっただわ。私、本当にあんたが嫌い。あの世界で、さっさと、のたれ死になさい」

【だからいい加減、あきらめてくれない？ あんたに付いているの飽きちゃったわ。この世界での執着が母親だったら、その執着を無くせば……？ ギャハハハハッハハハハ。どう、聞き覚えある？】

「あの光……私を絶望に追い込むのに……手回を重ねたって言うていたわ……母の事もそう？」

口にする事すら胸が苦しくなる程の言葉に、ハルの心臓は激しく打ち付けている。

「可能性はゼロではない」

感情なく答える声に、ハルの心臓はドクンと跳ねた。

『どうやったのか分からないけど……だったら合点も行く』

母の最後の笑顔を思い出す。ハルは、再度言葉を重ねた。

「いつか、その真実に……私は辿りつける？」

「容易な事ではないだろう。しかし、何が起きてても生き延びる事が出来る位まで、強くなるのだ。そうすれば、自ずと道は開かれる」ハルの頬に、スウツと一筋の涙が流れ落ちた。そして、沙織を見据えると、力強く言葉を繋ぐ。

「行くわ、Another Worldに」

第3章 Another world - 1

この世界の規模はほぼ地球と同格。しかし異なる生態系を形成し、古の歴史に依存した独自の文化を形成している。異世界から来た民「エンダ」は、この世界を「Another World」と呼んだ。

吹き付ける強風がハルの体を揺らす。突然直面した外気の冷たさが、体に吹きつける風が、否応が無しに体の自由を奪っていく。

「な……え？」

「ついさっきまで、エレベーターの中にいた筈……なのに？」

ハルは、目の前に現れた光景に、混乱する思考を何とか整理しようと躍起になった。しかし現実味がない状況に、混乱し困惑し、思考回路が止まるのだ。もう一度、周りの風景に目を向ける。

「ここ……どこ？」

どこまでも続く広大な土地、うつそうと続く深い緑の森、遙か彼方には、巨大な山脈が連なっている。空には雲が立ち込め、灰色の世界がどこまでも続いていた。

「一体どこまでが現実なの？」

目の前の異質な光景よりも、何故自分が雲と同じ高さに浮いているのか理解出来ない。吹き付ける風で息苦しく、今やハルの体は、バサバサと風に振られる木の葉の様だ。たまらず隣の沙織の腕を掴んだ……筈であった。触れた感触に、激しい違和感を覚え体が固まる。想像していたそれとあまりに違っていたのだ。

受けた衝撃にハルはそれを直視し、それもハルを静かに見つめていた。

「……な、これは何？」

目の前の異質な何かは、明らかに人間ではない。しかし、地球のどれとも違う。身丈は三メートル位あるだろうか。人間の手に当たる

であろう部分は、足のつま先に当たるほど長い。首は飛びだし、顔の半分以上もあるつかという裂けた巨大な口。ギロリとした大きな目は金色に鈍く光り、獣の様に縦に黒い瞳孔が入っていた。それだけでも失神しそうな程の衝撃なのに、この生物は静かに、そして厳かに世界の序章を告げた。

「この世界に來たならば、これから起こるであろう事を全て受け入れることだ。貴方の常識はここでは通用しない。

しかし、受け入れなければ……そう、決して希望を失ってはならない。何を聞いたかは知らないが、貴方がこの世界に必要なことは確かなのだから。自分がやるべきことを探し出し、その為だけに生きていくのだ」

『しゃべる……ん、だ？』

「あ……貴方と一緒に？」

どこまで受け入れればいいのか分からないまま、ハルは生きて行く為に問うた。しかし一時置いた後に、

「……この世界に來たエンダに同行者はいない。基本、初めは一人だ。我々先導者がエンダと会う事は二度とない。」

この回答は、ハルを失望させるのに十分過ぎた。日本という安全な国で、何不自由なく生きてきたのだ。今、こんな世界に放り出されたら、真実に辿り着く前に死んでしまう……不安と恐怖から、ハルの心臓は大きく高鳴る。

「ちよっ！ 待つて。私何も聞いていないの。教えて、どうすれば……」

すがるような気持ちで問うハルに、緑の生き物は淡々と答えた。その一言に、全くの感情はなく、ハルは絶望に苛まれる。

「矛盾に感じるかもしれないが、エンダ個々に望む事は何もない。この世界で死なずに、生きる事だけだ……道は既に作られている」

「既につて……どの様に？ そもそも、何故私達がこの世界に連れて来られなければいけないの？」

何とか喰い下がるハルの言葉を、無情にも打ち砕く声が響く。

「今、全てを伝えることは出来ない。貴方が自分で気づかなければ、この世界に来た真の理由は解読出来ない。……何故今日という日が訪れたのか、分かる日が必ず来るだろう。今は、ただ生きることだけを考える事だ。そうでなければ、今日にでも貴方は死ぬ」

目の前の生き物は、ハルに質問の余地を与えない。しかし「死ぬ」その言葉だけが、脳裏に何度も木霊する。

『死ぬって……そんな世界だったなんて……？』

「時間がない。今から始まりの地に連れて行く。初期のエンダが、生きて行くのに最適な場所だ。そこから、状況を整えて……」

『だからエンダってなんなのよ』

何一つ納得する言葉を得られずに、話が矢継ぎ早に進んでいく事に、ハルはどうする事も出来ずにいた。しかし刹那、沙織の事を思い出したのだ。

「さ、沙織は？ 無事なんでしょうね！？ 沙織に何かしたら……

！」

『私……自分の事ばかりで……』

沙織を思うと、生きた心地がしない。ハルの言葉に、金色の瞳をジツと向けてその生き物は静かに答えた。

「問題は無い。我々は、直接あなた方の人間に危害を加える事は出来ない。時々あの人間を通じて、貴方の情報を収集させてもらっていた。あの人間を媒体に出来たのも、狭間の世界が開かれたあの瞬間だけだ。あの光に包まれた骸骨も、貴方があの世界に居なければ何の手出しも出来ない。勿論私が近づく事も不可能だ。

あの人間の貴方に対する慈しみが、私をあの場に導いた」

今この瞬間だけは、ハルは恐怖を忘れて目の前の生物にジツと目を向けた。全て信じた訳ではない。しかし自分を案じる沙織の優しさは、信じられる。そしてこの生き物にそう言わしめた沙織を思うと、目頭がグツと熱くなった。目の前の生き物の瞳の奥を読み取る

事など到底不可能だが、見た目の得体の知れなさとは裏腹に、自分を導いてくれた行動を思い返し、漠然と、本当に漠然と、
『信じてもいいのだろうか？』
そう思い始めていた。

第3章 Another world - 2

「探した」

その時、別の声がした。この声には聞き覚えがある。一番受け入れがたい声が響き、ハルの体がビクリと揺れた。

『夢なら覚めて!!』

恐る恐る声の方向を振り返ると、目の前には山と見間違っほどの巨体がそびえ立っていた。

「え……」

隣の生き物の比では無い。ハルの世界では存在しない生物に茫然と立ち竦む。そのハルの前に、スツと緑の生き物が立ちはだかり、体格の違いに怯むことなく飄々と言葉を繋ぐ。

「ほお……よくこの場所が探し出せたものだ」

巨体の生き物は、噴き出す怒りを何とか押さえ込み、

「……接点地点を血眼になって探したわよ。広い世界だからって、ゆっくり構えてんじゃないよ。こーの盗人があ!!」

感情が一気に沸点に到達する様に、語尾が大気を揺らす。手だけの骸骨は、今や身丈が一メートルもあるうかという巨体と化し、上半身が骸骨、下半身が馬の様な風貌に変わっていた。声を発している部分が顔なのだが、鋭利な牙……ここからの位置では、それしか見ることが出来ない。

『光の正体はこれだったの!?!』

手だけの骸骨の正体に、ガクリと膝が折れペタリと座り込んだ。目の前に立つ緑の生き物が、普通に見えてしまう程禍々しい姿だ。

「この女を連れてくるだけに、どれだけの時間を要したと思う?

それを横から? 冗談じゃないよ!」

ドン!!!

言葉が終わると同時に、一瞬にして爆音と業火が渦巻く様に襲いかかってきた。世界を全て飲み込みそうな炎に、ハルはギョツと目

を閉じる。

『死ぬんだ……私』

「目を開くのだ。これから先、如何なる苦難に立ち向かおうとも、見開いた目を閉じてはいけない。全てを見届けるのだ。己の進むべき道を見間違わない為に」

轟音に紛れて、緑の生き物の淡々とした声が切れ切れに聞こえてきた。その声に導かれる様に、目を見開いた時、一瞬心地よい風が吹いた。

「てめえ」

骸骨が黒煙を口からブスブス吐き、怒りにその身を震わせる。

緑の生き物とハルを守ったのは、光の壁と見間違わんばかりの巨大な盾だった。荘厳な音と共に光の盾が出現し、幻想的な光景が広がっていた。業火は盾にその行く手をはばかれ、散り散りに消えつつある。

『今の何……？ 炎？ 盾？ ……どうやって出したの？』

目の前で繰り広げられる現実を受け入れきれない。

「その攻撃……この者を殺す気か？」

「てめえ、何者だ……」

全てを燃やしつくしたと確信していたのだろう。予想を反した結果に緊張感が漂う。

「どれだけの時間を有したとしても、エンダは強い意志で扉を開けなければならぬ。絶望で扉を開けさせようなど、絶対に有ってはならない。お前は世界の秩序を侵したのだ」

何者にも屈しない強い尊厳を保ちながら、緑の生き物は淡々と答えた。

「チツジョー？ てめえ、覇騎王の関係者か？ 古いしきたりに縛られて、この世界を壊そうとした悪の権現。……ないな、全て滅んだはずだ。」

そもそも、やり方がなんだって？ 正義も悪もねえよ？ 行き着く

場所は一つだ。問題は、誰が連れてきたかだ。

ちなみに、こいつは駄目だ。絶対明日にでも死ぬね。こんなレベルの人間なんて、別に捨て置いてもいいけど、こいつ殺さなきゃ気が済まな、い！！」

骸骨は、発した言葉と同時に巨大な爪を振り落した。緑の生き物同様、ハルを捕らえた！！　そう骸骨が「ニヤリ」と笑った瞬間、二人の姿は一瞬にして消えた。

「クソが！！！」

ハルが体を掴まれたと認識した瞬間、体に強いGがかかった。体が押しつぶされる感覚に目がくらみ、今にも気を失いそうだった。受ける風圧で目を開ける事もままならない。

『あの骸骨から、逃げているの？』

ハルはギリリと歯を喰いしばった。握り締める拳に、ジンワリと血がにじむ。

『私が真実に辿りつくのは容易な事ではないって言っていた意味が分かった。あんな化け物……到底太刀打出来ないよ。そもそも太刀打って無理じゃない？　強くってどうやったら……』

圧倒的な残虐さを目の前にして、足元がぐらつく。ハルにとって現実的な強さとは「精神力」位しか思いつかない。その精神力も、

『あれ……本気で私を殺そうとしたよね？　あんなに躊躇なく』

人の命をいとも簡単に摘む事が出来る世界に、ハルは全身に嫌な汗を掻く。

その時だった。ハルの体に、今まで以上の強い衝撃が、体を揺さぶる。……そう感じた瞬間、ハルは緑の手から投げ出されていた。

ハルは見た。天地の様子。そして緑の生き物が、自分からずっと離れた場所から落下していくのを。

ハルの意識は、ここで途絶えた。

第3章 Another world - 3

「うう……」

ハルは、冷たい土の感触、そして直接肌に触れる外気の寒さに目が覚めた。

軋む体を何とか起こし、周りを見渡す。先程の二体の生物の気配はどこもなく、あるのは見渡す限り無残にひび割れた枯れた土地だけだ。

「頭……痛い……」

まとまらない意識を何とか集中しようとするのだが、脳が考える事を拒否している。加えて頭が割れそうな程、痛い。

『寒い……』

身を刺すような寒さだった。今まで体現した事の無い気候に、身も心も凍りつく。寒いはずだ。ハルが纏っている物と言えば、肌着と、薄い皮のワンピース。そして、薄い革靴。それだけだった。何故かハルは、これだけの装備で荒れ地に一人置き去りにされていたのだ。あれほどの高さから落下して、何故無事なのだろうか。混沌とする意識の中で、ハルは必死に何かを思い出そうとして足掻く。思い出そうとする端先から、記憶がこぼれ落ちていく感覚にガシガシと額を掻いた。

『思い出せ！ 思い出さなければ。大事な事が、忘れていけない事があつた筈。私は何故ここに……私がここにいる、理由。理由……？』

「お母さん……」

ハルが思わず唸る。自分が発した言葉に、頬を涙が伝い、

「お母さん……」

フラリと立ち上がり、どことなしに歩き始めた。ゴツゴツとした地面が、薄い足裏の皮に食い込む、

『痛い……寒い……』

この広い空の下、どこに進むべき道がどこなのか分からない。しかし自分の何かが警鐘を鳴らす。ここにいたら確実に死ぬぞと、死にたくなかったら歩くのだと。心の声に従い、重たい体を引きずる様に歩き続ける。冷たい外気と、鋭い風がハルの肌を突き刺していく。

「お母さん……お母さん……お母さん……」

思考はほぼ停止していた。意識して呟いている言葉では無い。しかしハルは、呟くのを諦めない。何があっても、この単語だけは忘れてはならない、零れ落ちる記憶の奥に刻み込まれている。

ズルズル……。ハルが歩き始めて、十日程が経過していた。勿論時間の感覚などはない。そして重く立ち込めた空が晴れる事は無かった。革靴は既に原形を留めない程ボロボロになり、靴底はかろうじて薄皮で繋がっているばかりだ。原形を留めていないのは何も服だけではない。そこには嘗て女性であった面影すらなく、あるのは痩せこけ全身が雨風や埃で真っ黒なハルの姿だけだ。

寒い、痛い、もうそんな痛覚すらハルにはない。状況は一向に良くならず、更に悪化するばかりだ。強風が吹き荒れば、一〇〇メートル進むだけでも一時間以上かかる事もあった（あくまで感覚だが……）。明確な意志や目的があった訳ではない。歩かなければ、生きなければ……生きて確認しなければならぬ。その意識だけが、ハルを歩かせていた。

ズルツ、ズルツ足を引きずり、その歩く音だけがひたすら耳に入ってくる。ズルツ、ズルツこのテンポを崩してはならない。少しでも歩く事を辞めたら、もう一步も歩くことは出来ない。一步一歩ずつ歩き続ける。

荒野には、更に冷たく厳しい大気が吹き荒れた。杖の代わりとして枯れ木を持つ手も、当の昔に無い。朦朧とする意識の中で、『歩かなければ、止まるな、足を前に、前に……』そう何度呟いたか分

からない位だ。

しかし、とうとうハルに限界が来た。動けない。もう何時間も後一歩が踏み出せずにいる。

『あと後一歩……あと一歩……あと一歩……後一歩……』

朦朧とする意識の中で、目の前に広がる荒れ地を見続けた。もう、涙も出ない、声すら出ない。見渡す限り、生き物の気配もない。

『お母さん……』

そこで、ハルの意識は途切れた。

第3章 Another world 4

ドドドドドドッオオ!

地響きを轟かせ、一頭の巨大な生き物が荒れ地を駆け抜けていた。これが獰猛な種類の生き物であることは一目瞭然で、興奮している口元からは止めどなく涎が滴り落ちている。また血走ったその深紅の眼は、どこを見ているのは計り知れない。毛が短く、剥き出しの黒々とした皮膚が、この生き物の獰猛さを否応が無しに際立たせていた。

この世界の獣は、人を襲った事があるか否かの二種類に分けられる。ひと度人間を襲えば、その額に宝玉が浮かび上がり、明確な意思を持ち人を襲う様になるのだ。この獣の額にも、その宝玉が怪しげな赤い光が爛々と湛えていた。

名を「ギヴソン」といい、身の丈が人間の三倍はあるつかという生き物である（ギヴソンという名は、人間達が付けた通り名だ）。勿論、人に慣れる生き物ではない。赤い目をギョロギョロさせながら、何もない荒れ地をひたすら駆けていた。

しかしそのギヴソンに跨っているのは人間であり、手綱を悠々と操りながら目的地へ誘導している。随分ガタイが良い男で、背中には自分と同じ身丈程の剣を携えていた。ごついゴーグルでその表情は読み取る事が出来ない。

「フフーン」

乗り心地は決して良い方ではないだろう。しかし、そんな事は感じさせない位、終始安定した走りだ。

この走りは勿論、ギヴソンの意志ではない。この獣は、隙あらばと、この憎たらしい人間を振り落とそうとしていたし、屈辱的行為を虐げる人間を、今すぐにでも喰らってやると息巻いていた。しかし、どうやっても自分の願いは敵わない。認めたくないが、自分の

力を遙かに上回っている。

「くん？」

その人間に肩にちょこんと腰掛けていた小動物が、少し鳴いた。毛は長く、少し長めの耳と、大きな目、そしてフサフサの尻尾。この男には似つかわしくない可愛い生き物だ。全身で風を受けながら、正面右の遙か地平線を見ている。大きな目には、荒れた地しか映っていないかと思われた。しかし、更に大きく見開かれた目に映ったものは……、

「くんつくつくく」

止まれと言わんばかりに、この小動物は男に向かって吠えた。しかし男は気付かない。小動物は、一生懸命頬を体で押した。頬に当たる柔らかい毛並みに、驚き男は問うた。

「えええー？ 何ですか」タロチャアアン」

めったに見せない可愛らしい行為に、男のテンションは一気に上がる。

「……」

ガブッ！！

「ギャ！ いつ痛っだー！ー！」

思いつきり耳を齧られ、あまりの痛さに思わず手綱を引く。砂埃を立てながら、ギヴソンはしぶしぶ従い、走りを止めた。

男は涙目で耳を擦りながら、

「タロ！ 何すんの！ いきなり噛むなって言っただろーが！

いや、噛むなっつての」

野太いでかい声で、タロと呼ばれた小動物を怒鳴った。しかしタロは、男の様子など気にも留めていないかの様に（実際、全く気にしていない）、ある方向に視線を移した。耳を押えながら、タロの視線に合わせた。

「なんだあ？ あらあ？」

枯れた灰色の世界に、薄ぼんやりとした光が見えた。こんな荒野に、

光り輝く光？ 場所は少し離れているようだが、ギヴソンを走らせれば一〇分位で着きそうな距離だ。一刻も早く一つ目の海を越えたかったが、

へへっ。面白そうじゃねーか！」

そう悪戯ばく笑うと、思いつきギヴソンの脇腹を蹴り上げた。その衝撃で狂ったように、ギヴソンは走り出す。

「んどこだ？」

その光は、少しずつ発光を弱め、か細くなり靄のようにしか見えない。この広い荒れ地だ。光が消えたら、まずその場所を見つける事は不可能だ。しかし左肩の小動物には、まだその光がはつきり見えているようだった。一点だけを見つめ、微動だにしない。……この世界の生き物にしか分からない何か……か？ そう男は感じた。

「お前が頼りだぜ！」

強く手綱を握りしめ、男は叫んだ。タロは小さく「くんっ」と小さく鳴いた。

ガゴン！

男はギヴソンの手綱を地中深く突き刺した。無駄な足掻きをするギヴソンを横目に、目の前の汚いぼろ雑巾に目を移す。

「たくよ」

男がその場所に到着した場所には、光の代わりにぼろ雑巾が打ち捨てられていた。正直こんなにしょぼい結果になるうとは、考えてもみなかった。この世界らしく、冒険の扉が開いているかと思ったのに。

「こらあなんだ？ 布？ ……服う？ ちえ、せっかく来たってのに、無駄足とはね」 あ？」

さてと……と、踵を返し立ち去ろうとした時、布の切れ間から、人間の掌と思しきものが見えた。

「あゝ人間か？ 何でこんな所に？」

ぼろ雑巾と見間違う程、肌も血色はなく枝の様だった。男は周りをグルリと見渡すが、仲間らしき人影はおるか、生き物の気配すらない。それもそうだろう。この荒地は果てしなく広く、旅人は敢えて遠回りをしてまで避ける場所だ。

この世界は広い……安住の地を持たずにさすらう人間達の中には、死に対する尊厳が薄い人間達も居る。

「あー死んで捨てられたか？ ……しょうがねえ。埋めてやるか」

一旦上げた視線を落とすと、タロがぼろ雑巾の頬らしき所をぺロぺロと舐めている。その可愛らしい仕草に、

「おーい、腹こわすぞ。つたく、何お前、そんな可愛い行為も出来んの？ 知らなかったんですけど？」

そう日頃の恨み節を聞かせながら、ひょいと持ち上げると、

「……え？」

微かだが、「ピクツ」と体が動いたのだ。意識はないが、微かに息を感じてる。その様子を見届け、タロがぴょんと肩に乗った。早く行けと言わんばかりに、グイグイと男の頬を押す。……決して、じゃれている訳ではない。そして、それは男も良く分かっていた。

「え、何？ 連れて行くの？ 何で？」

タロが早く行けと言わんばかりに催促をするが、あからさまに受け入れがたい表情を浮かべ、

「いや、あの、ホントに嫌なんですけど」

そう訴えてみる。この世界の人間を拾ってどうするのだ。仮に回復したとして、その後の対応に困る。ジリジリと後ずさる男に、痺れをきらしたタロが、大きく口を開けてガブリと耳を噛んだ。

「……うぎゃ！！ 痛ってー……あのなあ、お前拾うのと訳違うんだって！」

男は深い溜息をついたが、タロの催促に諦めたのかそのボ口を肩に乗せた。そして、怒りを剥き出しにするギヴソンに踵を返す。

「よっしゃっ！ 帰るか！」

グッと手綱を引き上げて、ギヴソンの背中に飛び乗った。

第3章 Another world - 5

『暖かい……』

『甘い……？』

ハルは深い意識の底から、浮き上がるように目を覚ました。

『ここ……どこ……』

全く思考回路が働かない中、自分の意識で動かせる目だけを、左右上下に移してみる。ふと視線の先に、シンプルな天井の木目が目に映った。

『部屋の……中？ 何故、こんな所に……』

荒野と打って変わった状況に困惑しながらも、自分が柔らかい布団に包まれている事に気づく。羽毛の様な軽さと温かさに、全身で幸せを噛みしめた（ただの綿の布団だったが、ハルにとっては至上の幸福だった）。

『お布団……何て……柔らかいの？』

体は鉛の様に重く、起き上がる事すら出来ずにいたが、何とか状況を掴もうと躍起になった。自分が何故ここに居るのか理解出来ないまま、荒野とは比べ物にならない位の安全な世界に、気持ちが焦って仕方がない。

「目え、覚めたか？」

突然、野太い声が左手方向から聞こえてきた。自分以外の存在に（こんな場所に居て何だか）、ビクリと心臓が跳ねる。それだけの衝撃で、グラスと目の前が歪んだ。何とか目だけ向けると、

「おらっ、食え。てか、舐めろ」

ハルの反応など微塵も期待していない物言いで、強引にスプーンが口に押しつけられる。

『誰？』

随分と大きな男だ。虚ろな目に飛び込んできたのは、シャツの上か

らでも分かる鍛えられた筋肉。ゴツゴツとした手、武骨に生えた髭……陽に焼けた肌。

「にんげん……」

ハルは虚ろに呟いた。

押しつけられたスプーンから、トロツとした甘い液体が口の中に流れ込む。何日も食物を入れていない胃に、ゆっくりと染み込む優しい甘さ。深い眠りに落ちそうな虚ろな意識が、突然クリアになった。

「お前エンダだったんだな。だったらこれは、地球でいう蜂蜜みたいなもんだ。体力を回復する効果がある。食えるだけ、今は食っつけよ」

「蜂蜜か……そうだな。この味はそうだ。あれ？ はちみつってなんだっけ？」

懐かしい様な、そんな物は知らない様な……頭と心がちぐはぐな感覚に陥る。そんなハルの様子を、じっと見ていた男が問うた。

「お前え、名前は？」

「なまえ……なまえ……？」

初めは名前という単語すら認識出来ずに、ハルはキョトンと男を見た。何日も声を発していなかったからか、上手く言葉を発する事が出来ない。喉で声が詰まり、ゴホツとむせてしまう。

「ナマエ……なまえは……」

「思い出せない。記憶がシャッフルされているみたいに、上手く組み立てられない。何で私、ここにいるのだろう。この人は誰？ そもそも、私は何？」

思わず片手で額を押さえる。なまえすら思い出せない自分に、混乱してしまう。

「あれ？ なまえって何だっけ？ こんなこと、今まで一度も体験した事がない……ない？ そうなの？ それすらも分からない」

その時、ハルの目の前を大きな影が横切った。
バチン！

その瞬間、ハルの体に衝撃が走った。初めて会った筈の男から、両頬を掌で弾かれたのだ。痛みはない。痛みはないが、ハツとした。男は掌をハルの頬に乗せたまま、真剣な眼差しでハルに問うた。その声は決して荒くはなく、ただただ真剣だった。

「おゝいつ！　すっかりしろ。名前だよ！　なーまーえー。お前は誰だ？

いいか！？　ここで忘れたら、一生思い出せなくなんぞ。思い出せ！　俺らにとつては、あの世界から来たって事は絶対に忘れちゃなんねえ。自分のルーツだけは、忘れちゃいけないよ。いいか？　荒野からゆつくり遡るんだ。

何で、一人であんな所に倒れていたんだ？　何で、一人で荒野に居たんだ？」

そこまで言うと、ジツとハルに視線を向けた。男の迫力に押される様に、必死に記憶を辿り、そして、一番近くにある記憶を掴み取った。

「なぜ……荒野に？　……そうだ、もう一步も歩けなかった。そこで、記憶途切れて。そう、ひたすら歩いてきたから。……何日も、枯れた土ばかりの広大な土地を、行けども歩いた。途中、砂嵐に巻き込まれたり、豪雨に降られたり……時には、水たまりの水すら飲んだ。その水たまりも直ぐに日上がってしまったけど。……考えてみたら、あの雨が無かったら私死んでいたかもしれない……」

混沌とする意識の中で、止めどない記憶が口から溢れてくる。そんな様子を、男は何も言わず見つめていた。

「そうだ……目が覚めたらあの荒野にいたんだ。だって私、空から投げ出され……て」

そこまで辿った時、突如ハルの目から涙が溢れ出した。

『何故……忘れるなんて……』

大事な記憶を忘れかけていた事実には驚愕し、そして思い出せた事

に安堵の気持ちが溢れる。

『思い出した。何故自分が、この不思議な世界にいるのか？ 何故、荒野を彷徨っていたのか、歩き続ける理由は何だったか。何故、全てが受け入れられない事ばかりなのか』

言葉にならなかった。ハルの頬に涙が一通り流れ落ちた時、ごつい男の掌が両頬をグーと押した。そして豪快に白い歯を見せて、二力ツと笑った。

「んで、あんた名前は？」

この男は何なのだ。ハルは、涙と荒野を歩いた汚れでくしゃくしゃの顔になりながら、押されてタコのようになった顔で呟く。

「ハル……」

声が続かない。男は名前を聞くと、更に太陽みたいに笑った。コロコロと表情が変わる男だ。人間らしい……ハルはぼんやりと思った。

「そっか、ハル。俺はゲン、元だ。んで、こいつは、タロ」

いつの間にか元の肩に乗りながら、ハルの顔を覗き込む小動物を指して言った。タロと呼ばれた小動物は、元の腕を伝いハルの肩まで降りると、涙に濡れた頬をペロペロ舐めてくれた。

『慰めてくれているのかな？』

動物の温かな体温を感じるこの瞬間が、奇跡の様だ。頬を包む元の掌の大きく優しい掌が、荒み固まった心をゆっくりと溶かす。

その後、ハルの頬を押し続ける元の手の甲を、思いつきりタロが噛んだ……その様子に、ハルは薄く笑う。

この世界で、まだ死なずに生きている。この数日間、願う事すら罪だった感情と情景に、涙が溢れて止まらなかった。

第3章 Another world 6

ハルが元に助けられて、数日が経過した。外の日差しの暖かさと、柔らかい土の感触に人知れず感動を覚える。宿からは、エンダと呼ばれる人々の笑い声が響き、何とも平穏な日々が過ぎて行く。元が言うには、各地にこのような宿が沢山あり、基本エンダは宿を渡り歩きながら生活をするらしかった。

「エンダは一箇所に留まれねえからな」

『元の言葉は、どのような意味を持つのだろう……』

そう言う元の表情は、読み取れない感情を含んでいる。ハルの体調が万全ではない為、元は込み入った話を極力避けていて、真意は分からない。

「精神的なものも、回復に影響が出ちゃうからな」

ハルは体調が良くなると、宿の周りを散策するのが日課になっていた。落ちていた体力を何とか改善しようと考えての事だが、直ぐに疲れが出てしまい、寝込む事も多い。

宿の周辺は木々が切れる場所で、湖には暖かな日差しが降り注ぐ。何とも穏やかな場所だ。宿の周りには、所々に小さい花が咲き、鳥がさえずり、時々魚が水面を跳ねる音が聞こえてくる。

「灰色の世界かと思っていた……」

自分が数日前まで置かれていた現状を思えば、この世界の何と美しい事か。しかし、今のハルにとって、空も、空気もそして生き物ですら、何もかもが常識では図れない。

そう、まずこの空だ。強い日差しの太陽と、熱を感じさせない大きな星がいくつも空にあり（空の色が青い事は救いだった）、その大半は空の色に透けていた。

「……」

背後の只ならぬ殺気に、ハルはグルリと振り返る。

「これだけは、慣れそうもないな……」

宿から少し離れた、見晴らしの良い場所に繋がれている獣……名をギヴソンといった。四肢を鎖で繋がれてもなお、暴れているのだろう。獣の周りは、無残にも地表が露わになっている。元に近寄るなと言われている獣は、先程から静かにハルに全神経を集中させていた。大人しくしているように見えるが、滝のように流れている涎、奥底に怪しく赤く光る眼を見る限りでは、この獣が人間をどう思っているのか、手に取るように分かるのだった。

「でも、本当に異質なのは自分自身だろう？」

そう失笑を含みながら、自身の体に目を移す。目に映った枯れ木の様な体に、思わず笑いすら出てしまう。荒野を彷徨い続けたせいなのか、この世界に来たばかりの「低スキル者」だからなのか、いつ折れてもおかしくない程の骨と皮だけの体。ましてや、身長が二〇cm程縮んだように感じる。身長だけではない。痩せているという次元を超えて、日本風の顔が少し彫が深くなっているし、髪の毛も腰程の長さになり、太い黒髪が柔らかい少しシルバーが入った栗色を湛えているのだ。

『全くの別人だ。気持ち悪い……。これには、何の意味があるのだろうか』

外見が変わるのは、嫌だ。こんな異世界に来たとしても、私は私なのだから』

そうハルは棒きれのような手を見ながら、ハルはグツと掌を握り締めたその時、

「ちえ、あいつら煩くて寝てらんねえや。エンダになったばかりで、浮かれてやがる。……おいつ、あんま無理すんな？ 万全じゃないと疲れるからな。ここは」

元が宿の入口からノソツと出て来て、声を掛けてきた。元が現れた途端、獣が発する殺気が少しばかり小さくなった様に思う。

『あんな獣を従えるなんて、一体どれ位強いのだろう』

フツと可笑しくなった。「強い」が世界の基準になるなど、考えた事もなかったからだ。そんな事を思っていると、元の足元からハルの肩を目指してタロが走り寄ってきた。スルルと体を上がってくる、ハルの頬にスリスリと体を摺り寄せてくる。

「タロ」

タロの陽だまりのような匂いに、ハルは目を細めながらも声を押し殺して呟く。

「寝てばかりもいられない。早く体力をつけて……早く「始まりの地」に行かなければ」

ハルは、元に言った訳ではなかった。動かない自分自身に言ったのだ。この動かない体が、何とも歯がゆい。いつまで経っても回復しない体力に、辟易しながら瞳を閉じた。

『こんな場所で、のんびりしている場合じゃないのに……！』

目の前の頑固な女に、元は深い溜息を吐いた。何度も何度も、この女に言い聞かせてきた。この世界では、低スキルの人間にとって、体力の低下がどれ程の危険を伴うものなのか。この体にまとわりつく膜が、否応なしに体力を削げ、エンダを死に追いやるというのに……ま、いいけどね。俺もここではやることねえし。もう少し付き合ってやらあ。……タロの野郎も、お前に慣れてやがるしな（怒）

「申し訳ない……」

元の言葉に、ハルは本心から謝罪した。

『元には、本当に感謝している。行き倒れていた自分を助けてくれただけではない。体力が回復するまで面倒まで見てくれている。利用しているようで、本当に申し訳ないのだから、今はもう元だけが頼りなのだ』

「早く体力を回復して……出て行くから」

元は頭を掻きながら、んな事言ってんじゃねえよ。そう呟いた。居心地が悪い状況に、目を伏せると足で地面をガシガシと押し固める。チラリと見た目線の先には、じっと自分を見続けているタロの視線

が刺す様に見えた。

「ちっ、恨めしそうに見てんじゃねー。何だよ、俺正しいんだぜ？
何かあったら困んの自分なのにさ……たく、俺は間違った事、言
ってなくねえ??」

元は、夕口の視線から目線を外す様に、寂しそうに口を尖らせた。

第3章 Another world - 7

元が深い溜息を吐いた。

「だから……無理すんなって……」

その日の午後、二人と一匹は森の中に居た。忠告を聞き入れないハルの付き添いで、森の中を散策する羽目になったのだ。森は見た目以上に深く、奥に行けば行く程深い緑に覆われていく。

「付き合わせて……」

ハルの言葉に、怒ったように元は答える。

「悪いって思ってたんなら、大人しくしてくれよ。……てかさあ、迷惑や面倒だから言ってるじゃねえから。今さ、無理して長引いたらどうすんの？」

前に言っただけ、俺達エンダの使命は、獣の脅威から民を救う事だ。俺達はそれだけの為に、この世界に存在していると言っても過言じゃねえ。だからさ、獣と戦わずして、死ぬなんてエンダの恥だぜ。っていうか、まだあんたはエンダじゃないけどさ」

右も左も分らないこの世界で、エンダと言われても正直ピンと来ない。増してや、ここに連れて来られた真の目的が、獣を倒しこの世界の民を救う事だったとは。

『倒す……って、色んな意味で無理だと思うけど……』

もとの世界では、生きる為に得る食料も、見知らぬ誰かが殺生したものだ。甘いと言われれば、甘いのだろう。

『この手で、命を摘むなんて……出来るのか？』

ハルは、自分の宿命を受け入れきれない自分の甘さを恥じた。

『止まったら駄目だ。今は進むしかない……』

そうやって止まりそうになる思考に対し、そう何度も自分に言い聞かせて、無理やり前向きになろうと足掻いていた。

そんなハルの苦悩を横目で見ながら、元は言葉を更に繋げた。

「俺の話で申し訳ねーけど、俺がここに来たばっかの時に、自分のレベル以上の獣を狙ったんだよ。そりゃ、倒せばかなりのスキルアップが望める。この世界は、獣を倒せば倒す程、自力が上がるからな。」

皆、躍起さ（いやスキルアップの為に獣を倒している訳じゃないが……）誰も自分達が死ぬなんて思っっちゃいねえから、無理したんだな。命からがら逃げおおせたが、俺以外は回復出来なくて消えちまった。死ななきゃ大丈夫じゃ、ねえ。体力の限界が来たら、突然消えんだ。もとの世界に戻ったなんて言う奴らもいるが、そんな都合のいい話なんて信じられねえ。この世界に連れて来られる前に、散々言われたしな。」

こんな世界で、何も残せずに消滅するなんて俺は嫌だね。獣を狩るのが俺らの使命だとしても、もつと目的持つて生きたいじゃん。俺は五つの海を越えた場所にあると言われていて、獣が生まれる場所を潰したいんだ。それが出来れば、ここに来た意味もあるってものだろ？」

ここまで一気に話した元は、少し間を置いてこう言った。

「死んだら元も子もねえ。やりたい事も出来ずに消えてもいいのかよ」

「……」

元の言いたい事は良く分かる。少しずつ回復している体力が、少しずつ剥ぎ取られていく。

『この外気が一番のネックだ……』

そうハルは思う。この世界の気は、どこまでも澄んでいて、体の細胞一つ一つに酸素が行き渡る、そんな感覚を受ける。心地いい、心地いいはずなのに……皮膚が、内臓が、髪の毛一本までもこの世界を拒絶している。体を守る皮膚が一枚剥がされた様な、この居心地の悪さが、お前はここの世界の住人ではない事を忘れるな、と言われていたようなものだ。

この世界に来て、常に胃もたれと吐き気に苦しめられていた。体

調が良い日でも、少し無理をすると、症状が重くなり立つ事すら困難になる。

ハルは、元の言葉を噛みしめた。

『体力の回復が遅れたら、私はこの世界からも消えてしまう……。もとの世界に帰れる？』

骸骨を思い出し、自虐的に少し笑った。そうして、

『死ねない。私は、まだ死ねない』

そう拳を握り締める。

『でもこのままじゃ……。』

そんなハルを見ながら、元は頭をボリボリと掻き、首をゴキゴキと鳴らした。元は今後の事を考えあぐねていたのだ。

『こいつは……。もたないかもしれねえなあ。あまりにも体力が無さ過ぎる。もう少しスキルアップすれば、体力の回復が勝るんだがなあ。』

でもなあ、獣と戦っても絶対勝てねえし』

元は考えに集中するあまり、考えている事が口から零れ落ちていた。脳と口が直結しているかのように、大きな独り言をブツブツと呟いている。

「んー……。始まりの地に行けば、今よりずっと楽になるだろうが、ここからは随分距離があるし、如何せん交通手段があれじゃあ、着くまでにおっ死んじゃうし。それにあいつ、すげー獣くせーから、もう臭くてそれだけで死んじゃうっていうか。」

かと言って、行かなきゃ何も始まらねえし……。あーもう！ 何で、洗礼を受けてねえ奴が、あんな場所で行き倒れていたんだ？」

ハルは蓄積する疲労感を感じつつ、元の言葉に耳を傾けていた。

『いい奴だな』

本心からそう思う。タロと言えば、ハルの肩にちょこんと乗りながら、あまりにも大きな元の独り言に、少し呆れ気味に元を見ている。「グー……。！ もう少し体力が残っていたら、話は違っただが……」

元は頭をガシガシと掻いた。どうやってしても、ハルが始まりの地に足を踏み入れる事が出来る気がしないのだ。

「でも、自分の世界を捨ててこの世界に来たってんの……。エングダにも成れずに死ぬなんて、あんまりだよなあ。何とかしてやりてえんだけど」

どうにも出来ない状況に、元は思わず天を仰いだ。ハルは元の独り言を、ジッと噛みしめていた。

第3章 Another world - 8

「……疲れた」

ハルは、木の根元にペタンと座り込んで、一步も動けずにいた。森の半分まで行き、宿に引き返している途中だった。肩で息をするハルを見かねて、元が近くの泉まで湧水を汲みに行ったのだ。

「何やっているの？ 私」

ギリリツと拳を握り締め、力無く地面を叩き付けた。

『これでは本末転倒ではないか。元の忠告も聞かずに自分勝手に動き回って、動けなくなったら助けてもらって。親切に甘えて……最悪だ……。自己嫌悪で死にそうになる。分かっている、分かっているのに、どうすればいいのか分からない。ただ、体力を付けたいだけなのに』

ハルは溜息交じりに、タロの姿を追って木の上を見た。木の枝では、ハルの傍に残ったタロが、ちょこちょこ動き回っている。タロの無邪気な様子を見ると、心が少し安らぐような気持ちになりフツと微笑んだ。しかしその瞬間、

「あっ！」

タロの直ぐ背後に大きな影が写った。ゆっくりと大木に巻きつきながら、タロの背後から迫ってきている。この位置からは全貌が掴めない程、大きい……ハルの三倍以上あるうかという大蛇の姿だった

「タロ！ 危ない！ 逃げて！！」

グワッ！

ハルの声と同時に、大蛇はタロを目掛けて襲ってきた。ハルの声でタロは間一髪、別の枝に飛び移り難を逃れた。つい先程まで飛び跳ねていた場所は、大蛇の攻撃で、無残にも大きくえぐられている。

「タロッ！」

しかし飛び移った先の枝は、タロの体重を支えきれていない。そのままバランスを崩し、枝にしがみ付く体勢に、

「くうー……ん」

タロが、か細く鳴いた。その姿に大蛇は体を大きく揺らし、タイミングを図りながら飛びかからんばかりだ。

「タロから離れて！」

ハルは咄嗟に、歩行用の補助として渡されていたメイスを、大蛇目掛けて投げ付けた。こんな杖がタロの助けになるとは思わなかったが、

『何とか気を逸らせないと！』

その一心であつた。メイスが手を離れた瞬間、

「えっ？」

ハルの僅かな体力がゴソツともぎ取られ、強烈な脱力感に襲われる。

「た、タロ……」

闇雲に投げられたメイスは、一気に大蛇に向かって加速した。

ドスッ！

メイスがおびただしい何かを纏つて、明確な意志を持つかの様に大蛇の額に突き刺さった。

ドオオン！！

大蛇は体を傾倒させ、地響きと共に落下した。落下の衝撃で、落ち葉が巻き上がり宙に舞う。

同時に、ハルもその場に倒れこんだ。

「馬鹿野郎！！」

次にハルが目が覚めた時には、何故か宿のベッドの中だった。朦朧とする意識の中で、元と目が合った瞬間、間髪入れずに怒鳴られたのだ。

『もう、どこにも力が入らない』

「今はゆっくり休みんだ。動くなよ、辛うじて残っている体力まで無くなっちゃう」

元の声が遠い所から聞こえてくる。メイスを投げ付けた時からの記憶が途切れ、何故無事だったのか不思議でならない。ただただ重力

が何倍も負荷され、深い闇に体が沈んでいく様だ。

ハルが再度深い眠りに落ちかけた時、ポタポタと手の甲に水滴が落ちた。何とか視線を向けると、タロがポロポロと涙を落している。

「タ……」

無事で良かった……思わず動かない手を上げようとした時、

「動くんじゃないやねえってんだろ！ 死にてえのか！！」

元の怒涛が響く。

「寝ろっ！ 今は何も考えずに寝るんだ！」

その声に導かれる様に、ハルはまた眠りという深い底に落ちて行った。

第3章 Another world - 9

「いよっしゃー、この峠を越えたら始まりの地だ！！ 一気に越えつぞー！」

ドドドオドドオドドオオオツ

狂ったように駆けるキヴソンを操りながら、元は野太い声で叫んだ。ハルを左肩に乗せ、右手でキヴソンを扱う姿は、正に戦士そのもので一種の風格すら感じさせる。

「大丈夫か？ しんどかったら、休むぞ！？ 辛かったら後ろに移れよな」

ギヴソンを走らせ半日が経過しているが、元とギヴソンに疲労の色は全く見えない。

「……かまわない。このまま走り続けてくれ。元が休みたかったら休めばいい」

ハルの様に体力が低下した人間からしてみれば、力の限り駆け抜ける、キヴソンの乗り心地は決して良くない。しかし強い決意を持って、旅に臨むハルにとって、この程度の辛さに弱音など吐いていらなかった。元からエンダが始まりの地を踏まなければならない理由を聞いてから、居ても立ってもいられなくなったのだ。

『あの緑の生き物が、私を連れて行こうとしていた場所……か』

「ガハハ！ んじゃーこのまま一気に行くぜ！ 天気が良い内に、距離を稼ぎたいからなあ！」

元は、そう叫びながら、ガッツとキヴソンの脇腹を勢いよく蹴り上げた。キヴソンは狂ったように雄叫びを上げ、更に走りを加速させる。

元は手綱を握り締め、視線を遠くに飛ばした。進むべき方向を確認し、後は手綱を操るだけだ。峠は深く険しいが、ギヴソンの足であれば今日中に越える事が出来るだろう。方向が固まると、元はチラリと肩の上のハルを見た。ハルは長い髪を風になびかせながら、

遙か先をジツと見続けている。表情からは何を考えているのか、汲み取る事は出来ない。最近は何にも増して、感情を表に出さなくなっていた。

『しかし……何が起きたかと思っただけ』

あの時、ハルの叫び声で駆け付けてみれば、ハルが大蛇を前にして倒れていた。

「くっそ！！遅かったか！」

慌てて剣を抜いて駆け寄れば、大蛇は既に絶命していて、その体は尻尾から消え始めていた。長い胴体に隠れて見えなかったが、額にメイスが突き刺さっている。どう見ても致命傷は、この額のメイスしか考えられない。元は訳が分からないまま、すぐさまハルの首元に手を添えて脈を確かめた。

「極僅かだが……脈はある」

元は、そのままゆっくりとハルを抱え上げた。

くうくん……

「タ、タロ！！（この俺がタロの安否を忘れるなんて）」

枝にしがみ付いたままのタロの姿と、えぐられた大木を見て、元は眉間に皺を寄せた。

恐らくタロを助ける為に、大蛇にメイスを投げつけたのだろう。しかしあんな細い棒だ。ただ闇雲に投げただけでは、当然に仕留める事は出来ない。元はメイスに手を掛け、グイッと引き抜いた。元は戦士だ。当然に魔力はなく感じる事は不可能だが、このメイスは名手の作で魔力を増大させる効力がある。

「こいつの消耗を考えると、魔力を使ってメイスを武器にした……、と考えるのが妥当か？」

しかし、と元は思う。

『仮に魔力が使えたとして、あの蛇は低スキル者が倒せるレベルじゃねえ。しかもこいつはエンダじゃねえんだぞ？何なんだ、こいつは。』

……ま、獣を倒した事で、旅が出来る程度までスキルも上がったしな。結果オーライか』

思考が行き止まり、ジロリとハルを見た。正確には、ハルの肩に乗っているタロを見た。あの日以来、片時もハルの傍を離れようとなしな。何とも安心しきった顔で、ハルと同じ先を見ている。

時々、嬉しそうに擦り寄る姿を見ると、無性に胸の奥がムズムズするのだ。

『……もしもし。最初に獣から襲われていたお前を助けたの、俺なんですけど?』

かつてない喪失感に胸がざわつく。

『もしかして、もしかして……このままハルについて行っちゃうんじゃ?』

ハルはエンダになったとしても、俺と一緒に旅が出来るレベルじゃねえ。始まりの地まで送ったら、そこで別れる……その時タロはどうすんの?』

今までタロと過ごしてきた思い出が、走馬灯のように浮かんでは消えていく。(いつも噛まれたり、引っ掻かれたりして、ろくな思い出がないが)タロとの別れを想像するだけで、元の目頭がジンと熱くなった。

『タロ……』

元は思わず溢れる涙を、誰にも気づかれないようにそっと拭った。

第3章 Another world - 10

ハルは深い溜息を吐いた。

「いやいや、溜息吐いたって仕方無いからさ。　たく、疲れたんならそう言えっつーの！」

元達は、始まりの地に程近い町の宿に居た。　またもやハルはベッドの中だったし、元は相変わらずブツブツ文句を言っている。

予定では、とつくに始まりの地に到着している筈だった……そう思つと、ハルの心は落ち着かず、気持ちだけが逸つて仕方がない。

「肝が冷えたぜ」

道中始まり地を目前にして、ハルが元の肩から後ろに倒れ込んだのだ。　間一髪で元が体を支えたが、ギヴソンの体から振り落とされる一歩手前で、最後の渓谷に差し掛かった場所での出来事だった。

宿のベッドに寝かされたハルは、すぐ尽きる体力にうんざりしている様子で、真上の天井を見据えながら元に問う。

「あとどれ位で、始まりの地に着く？」

ハルの問いに「今は休む時だからな」そう言いながら、元は乱雑にブーツを脱ぎ捨てた。

「あー……。この町には以前立ち寄った事があるから……あの当時で四日位か。めっちゃ弱かったからなあ、あんな距離に四日って。ハハ。」

今回はギヴソンもいるし、本当に目前だよ。だからあんま焦るなつて」

当時の事を思い出し「くはは」と笑った。自分よりも小さい獣ですら、命からがら逃げ帰った事もある。それが今やギヴソンのクラスを従えるまでになったのだ。感慨深いものを感じる。

「あんなに弱くて、よく生き延びられたもんだよなあ。　って言うか、ここまで強くなれるもんなのかねえ。ゲームみたいに、戦えば戦う

ほど強くなるからさ。こう見えても俺、ちったー名の知れた戦士なんだぜ？ここら辺に来るとさ、昔を思い出すよ。あんなギリギリのラインでよく死なずにきたもんだ」

元は昔を懐かしみ、目を細めた。宿が用意したお茶に口を付け、フウと溜息を吐く。宿の窓から、太陽が沈むオレンジ色の光が優しく差し込んで眩しい。

「当時の俺は、弱いながらに強くなりたい一心でさ……、」

「……」

「あの……聞いてる？」

全く反応が無いハルに目を向けると、寝息を立てて寝入っていた。

最近無理せず寝てくれるのは、確かに有り難かったが、

「あつそ。……えっと、風呂入ろうつと」

軽い溜息を吐きながら、そっと眩いた。

翌日は眩い位の快晴で、気持ちの良い朝だった。

「この辺りは、気候も良くて低レベル者にとっては、生きやすい場所さ」

宿の窓を開きながら、太陽の光に目を細め、元がハルに言う。

「そうか、生きやすい場所か……」

そう元の言葉を復唱する。少し動けるようになったハルは、いつもの如く町に足を向けた。この世界が異世界で、民は獣に怯え暮らす日々を強いられるとはいえ、人の営みは自分達の世界と全く変わらない。

「あのな」

少し諦めが入りながらも、元は根気よくハルを戒める。

「昨日ゆっくり休んだから調子が良いんだ。そもそも町に出たくなかったら、宿に居ればよいだろう」

空気のように言い放つハルに、

「うわ、何その言い方。お前がやたらめったら倒れっから心配してやってんのに。大体、何が調子が良いって？ 嘘つくやつなの！！」

もう、知らんぞ！ ホントに知らんぞ！ 倒れても、面倒見きれんからな！」

「今日は調子が良い」

「って言いながら、お前すぐ倒れんじゃん」

そんな取り留めない会話を繰り返しながら（主にしゃべっているのは元だが）、二人と一匹は町の中央へと歩みを進めた。

ギヴソンは、町からずっと離れた場所に嚴重に繋がれている。この町には、ギヴソンレベルを扱える施設が無く、苦肉の策として、人が踏み入らない沼地に置いてきたのだ。戻った時のギヴソンの不機嫌さを思うと、元の気はドツと重くなるのだ。

『機嫌が悪いーと、あいつモロ走りに出るからなあ。食料を買って行って機嫌取らなきゃな』

元はゲンナリしながら、沼で暴れているだろうギヴソンを思い返す。「きつと全身泥だらけだ。体を洗う水も持っていこう……」等と、ブツブツ呟いている。

中央では、賑やかな市場が催されており、この世界の人々が大勢行き来していた。至る所に店が出ていて、荒野と一軒宿が世界の全てだったハルは、町の活気に内心驚く。中央から少し離れた場所にベンチを見つけ、元はハルを座らせた。

「飲み物買ってくるから」

そう言つて、元は市場の中に消えて行った。

「面倒見が良い男だ……」

人ごみに消えていく元を見ながら、タロに向かってそう呟いた。タロはいかにも興味がなさそうに、クハーと大きな欠伸を一つして、ハルの手の中で丸くなっている。自分を見つけてくれたタロや、始まりの地に送ってくれる元を思うと、この世界で得た奇跡に、感謝してもしきれない。

「ありがたいな……」

元と離れて随分の時間が経つが、一向に帰ってくる気配がない。探しに行くのも、この人ごみだ。行き違いになると、後々（元が）面倒くさいなので、動かず待つことにした。

ハルが目を閉じると、町の雑踏が音楽のように聞こえてくる。異国の町は、こんな感じなのだろうか。人々の声すら、流れる川のように留まる事を知らず、ハルを通り過ぎて行く。

心地よい雑踏の音の中、ウトウトとハルが仕掛けた時……市場からどよめきに似た歓声が上がった。集まった人々の輪の中心に目を向けると、見覚えがある大きな男が抜け出した。人々の羨望の眼差しを受けながら、元がこちらに歩いてくる。元は、ドカツとハルの隣に腰掛けると、綺麗な瓶に入った飲み物を渡した。

「いやゝすまん。待たせたな。実は、婆さんが物盗りにあつて困つていたから、犯人探しをする羽目になつちまつて。

掴まえたは良いけど、それが以前、ここで捕まえた奴でさ。こいつも懲りないなと思つていたら、何と物盗りにあつていた婆さんも同じ人でさ。全く！狙われているよ、ありやゝ」

そう一気に話し、グビリとジュースを飲み干した。元から手渡されたジュースを口に運ぶと、果汁の程良い酸味と甘みに体が癒されていく。

「やつぱ平和な町だよなあ。一つ目の海を越えたらこんなもんじゃねえから。……何だか、平和すぎて気が緩むよ。ほら、見てよこれ、婆さんから貰つちまつた。いらねえって言つただけどさ、今更ながらに、腰当て。ハハハ」

笑う元の言葉を、ハルは異国の言葉のように聞いていた。

第4章 From now on - 1

始まりの地と称される町は、俄かに騒然としていた。異質な物を見る様な人々の視線は、明らかに元達一向に向けられている。

「我々の何がそんなに珍しいんだ？」

注目されている事にすら気付いて居なかった元は、屋台の肉の塊に目を向けながら言った。

「ん〜？ 注目？ …… あゝ、こいつが珍しいんだろう？ こんな獣、こちら辺にはいないからなあ」

自分の倍以上もあるギヴソンの手綱を、難なく引きながら飄々と答える。いつもは町に持ち込む事などしないのだが、周辺に待機させる場所がない為の苦肉の策だった。

確かに元の言う通りで、この町には似つかわしくない獣だ。元に自由を奪われ大人しくしているが、獰猛な性質は隠しきれぬ筈も無く、全面に出る殺気に町の人々が警戒するのも無理もない。

『せめてその滴り落ちる涎だけでも、押さえる事が出来れば……』

そうは思いながらも、異質なものはギヴソンだけではない、とも思う。痩せて枝の様になったハルも、エンダとして相当の使い手であろう元も、平和なこの町には不釣り合いだった。町の雑踏に気を取られていたハルは、フウと息を吐いた。

『この町が、始まりの地。 …… やつと、やつとここまで来た。ここから、全てが始まる』

これから先の旅を思うと浮かれても居られないのだが、何とも穏やかで心が軽くなる町にハルは目を細めた。何処からともなく聞こえる笛の音、鈴の音、軽やかな音楽。本当に獣に苦しめられている世界なのだろうか？ ハルはこの世界の民に目を向けた。

『同じ姿形ではあるが……違和感だな。どこことなく生氣を感じない。生氣が薄い。楽しく走り回る子供達ですら、気持ちの高揚を感じ取る事が出来ない。エンダと言われる人々と一線を画していた。』

『当たり前か……異世界の民なのだ。しかし人型だとすると、あの生き物達は何だったのだ？ この場所で骸骨が待ち構えて居るかとも思ったが、今の処そんな気配は無い。……死んだと思っているのだろうか？』

殺されかけた事を思い出し、人知れず冷笑した。

「おい、着いたぞ！」

元の声に、ハルはハツとして顔を上げた。

「ここが「始まりの地」だ」

元達の周りに、一風の乾いた風が吹き抜け、ハルの髪を揺らす。眼前に現れたのは、白く巨大な建造物だった。どのように立てたのか理解出来ない程、建物の上の方は霞みがかっている。

「ここが？ 始まりの地とはこの町の事を差している訳ではないのか」

キョトンとするハルの言葉に、元は深い溜息を吐きながら言葉を繋いだ。

「おめえ、ホント何も聞いてないのな。始まりの地ってんのは、この宮殿そのものを差してんだ。町を訪れただけでは、エンダに成れねえ事は説明しているよな。

ここで洗礼を受けて、初めてエンダになれる。エンダにとっては、この宮殿から全てが始まった。ここが、「始まりの地」と呼ばれる由縁だよ」

のどかで小さなこの町に全く不似合いな上、建物自体が尊厳且つ厳格の象徴だと言わんばかりだ。訪れる者達を圧倒的に威圧していて、前に立つのも息苦しくなる。

ここが始まりの地だと言われるように、建物の周りには、ハルと同じ目的であろう人々が一際多く集まっていた。これから起こる事に集中しなければならぬのだが、様々な思いが脳裏を過り気が散漫になる。

『自分達の世界を捨てた事に、後悔している様子はない。何故あんなに意気揚々と……』

この思いは、非難や否定ではない。そう思えた方が、どんなに楽しろうか……心から思うのだ。正直聞きたい位だ。何故その人生を選ぶ事が出来たのかと。

『元が何故エンダと成ることを選んだのか、いつか聞く日が来るのだろうか……』

そんなエンダ達の間をすり抜け、先に進むハルに元が声を掛ける。
「おい、俺達はここで待っているから。戻ってきたらここに寄りな話したい事がある。あ、それと「協会」の奴らを怒らせんなよ。面倒な奴らだから」

そう言つて元は、入口の端にドカツと座り込んだ。手綱を引く強さで、ギヴソンの体が土に沈む。そしてハルの後に着いて行くタロをガシツと掴んで、諭す様に言った。

「俺達は留守番だ。本人しか行けねえんだ」

「キュー……ん」

不服そうに鳴くタロに目配せをして、ハルは入口に踵を返す。眼前に立ち塞がる宮殿に足を踏み込む瞬間、
ドン！

「あ、すみません！」

建物の入り口で小さな男の子が飛び出して来た。少年は、ペコリと頭を下げると、意気揚々と町に飛び出して行く。そうかと思えば、入口で美しい女性が頭をもたげて座り込んでいる。

「……」

そんな人々を横目に、ハルは宮殿に足を踏み入れた。

第4章 F o r m n o w o n 2

「こんにちは。始まりの地にようこそ」

ハルが扉を開いた時、全身を白装束で包んだ女性から声を掛けられた。抑揚のない声がやけに耳に残る。

「ここは始まりの地。エンダが世界から洗礼を受ける場所。

……どうぞこちらに」

女性に導かれるまま、迷路のように広い宮殿の中を着いて行く。ハルは無意識にゴクリと息を飲んだ。この場所の事、そしてこれから起きる事を、あらかた元から聞いていたからだ。この場所で洗礼を受けると、自分はエンダとなる。

ハルの訪問を事前から分かっていたかのように、説明も無く大広間に案内され、段取り良く進んでいく。太陽の光が燦々と降り注ぐ広間には、全身を白装束で纏った人物が六人、円をなぞる様に立っていた。着衣からそれ相当の人物だと見て取れが、どの人物も深くフード被りその表情を見る事は叶わない。

『協会の民か……』

「どうぞ、円の中にお立ち下さい」

女性の感情のない声が続く。

ハルは言われるままに、広間の中心に向かって歩みを進めた。目を凝らすと、その円は中心から外に向かって不思議な文字が彫られている。

ハルが円の中心に、立ち位置を決めた時、頭上から光り輝く気配を感じた。ふと目を上げると、女神と天使が描かれた壁画が、少しずつその形を変えていき、溢れんばかりの星が零れる夜空に変貌を遂げた。

『綺麗だな……』

こんな緊迫した状態なのに、暫し心を奪われる程、幻想的な光景だ。

星が降り落ちそうな光景に、この世界だったらその星ですら掴む事が出来るのではないか……そんな事を考えていた。

カツツ

その時、正面に位置付けている人物が、床に杖を突き立てた。

「この場所をお分かりか？」

「……」

反応を示さないハルに、その人物は重々しい低い声で答えた。

「……ふう、良からう。」

もう数百年以上前になるが、この世界は凶悪な獣が溢れだし、人々の生活を脅かすようになった。どこから派生したのかすら分からない上、更なる事実先人達を驚愕させた。その獣は、我々の攻撃が一切通じない生物だったのだ。我々にとて、戦う事に秀でた歴史がある、がしかし、どれだけの兵力を持っていたとしても、その獣には傷一つ付けることが出来なかった。

我々では成すすべも無く、いよいよ人類滅亡かと思われた時、多くの星が降る夜にその奇跡は起こった。

突如現れた異世界の民は、自らをエンダと名乗ったと言う。エンダは、獣を一太刀で倒し、既に風化していた魔法を使った。先人達は、正に困窮した世界に、救世主が現れたと歓喜した。

しかし、この世界でエンダが生き続ける事は容易い事ではない。お主にも気づいておるだろうが、水も太陽の光も、大気ですらエンダの生命を脅かす。

傷ついたエンダを救うべく、我々の祖先が回復の祈りを捧げた場所が、ここ「始まりの地」だ。先人達の祈りは天に届き、エンダがこの世界で生きていく奇跡を授かった。

天の奇跡、それはエンダとエンダの属していた世界の柵を断ち切り、この世界の危機を救うべくした能力を授かる事。能力は人それぞれ、それが洗礼だ。

天の奇跡によって、貴方はこの世界を救うエンダとなるのだ」

ハルは白装束の人物の話を、静かに聞き入っていた。

『天の奇跡ね……胡散くさい話した。しかし、昔話とはそんなものか。』

……エンダ……この世界を救う異世界の民か』

白装束に身を包んだ人物は、更に語尾を強めて、

「さあ、確認させて頂こう。お主はこの世界に蔓延る邪悪な根源を打ち破る為に、我々の民を救うべくこの地に降り立った。相違ないか？」

声を聞く限りでは、かなりの高齢のようだ。十分すぎる程の存在感に、この建物と同じ様な尊厳と威厳を感じる。

『断る人間などいないのだろうな……』

ハルは静かに息を吸い、

「そのつもりだ」

力強く、そう答えた。

ハルの返事を聞く否や、白装束を纏った六人は、手を胸で組み、呪文を詠唱し始めた。その呪文に反応するかのように、床の円が光り輝き、何重もの円が浮かび上がる。そして、そのまま光の系は呪文となり、ハルを包み込んでいく。ハルは折り重なる細い光の系を、微動だにせず見入っていた。

『本当に、不思議な世界だ……』

一片の隙間もなく、光の系がハルを包みこんだ時、厳格な声が言葉紡ぐ。

「古き時代より、この地はエンダを数多く導いてきた。それは、神のみぞ知る、エンダの在り方を指し示す。

武器を持つて戦うか、己の体を鍛錬して武器とするか、精霊との契約にて魔族になりて敵を滅ぼすか、聖者の加護を身に纏い救いの手を差し伸べるか……幾多ものエンダの在り方。その在り方を今指し示さん。

それ以上でもそれ以下でもない。それがエンダ」

取り巻く呪文がひととき大きくなった。あまりに何重にも重なり合うものだから、歌の様に聞こえてくる。

ハルはグツと拳に力を込めた。ハルにはここで起きる全ての事実を受け入れる覚悟がある。どのタイプのエンダになろうとも、これから先自分の思いを見失わない様に、今日の事を心に刻み込む。

光に包まれながら、白装束の言葉を思い返していた。

『エンダとエンダの属する世界の柵を断ち切り……か』

今やハルは、人の形を成した光の人型と化していた。

「やっと息が出来た」

この光に包まれた時から、今までの息苦しさから解放され、膨大な空気が体内に染み渡っていく。身体の細胞一つ一つに、自分を守る薄い膜が出来たかのようなのだ。

どれくらいの時間が経ったのだろう、白装束の人々の呪文の音が、次第に小さくなっていく。完全に聞こえなくなったその瞬間、身を覆う光の糸は消えてなくなり、それだけではない。協会の人々も、零れそうな星を湛えた天井も、床に描かれていた円も全てが消え失せていた。

あるのはガランとした大広間だけとなり、今や誰一人としての気配も感じられない。

「……」

ハルは自身の変化に目を移した。今まで着用していた服は、ズボンの丈が異様に長い（合うサイズが無かったのか元の趣味が悪いのかは不明）男の子が着る様な服だったのに、今は白い布のシンプルなワンピースになっていたし、皮の靴は皮のブーツに変化していた。

「何かには成ったらしいな」

そう呟いた時、ハルの体の奥底から、ある感情が噴き出した。

「……え？」

無意識に瞳から涙が溢れ出る。感動、不安、希望、恐怖、喜び、悲しみ、愛しみ、怒り……数多ものの感情に押し潰されそうだった。この感情をどう説明していいのかわからない。得も言われぬ感情が、涙となって溢れだすのだ。

そして全ての涙が流れ落ちた時、手に受けた涙を見ながら、ハルは目を細めた。

「そうか……これは、あの世界との決別の涙だ」

ハルは、この事実を受け入れた。自分でも驚くほど、心は静かで穏やかだった。涙は悲しくて流れた訳ではない。感情とは別の場所から、涙が零れ落ちたのだ。

一度天井を見上げ目を閉じ、濡れた頬を袖でグイッと拭くと、
「行くぞ」

誰に言う訳でもなく呟いた後、出口に向かって歩き始めた。

第4章 From now on - 3

扉を開けると、人々の雑踏が波の様に飛び込んできた。広間に案内された時には、誰一人として会わなかった通路に今は沢山の人々が行き来している。

「……………」

ハルが怪訝そうに周りを見渡していると、庭から感嘆に似た溜息が零れた。中央に配置された噴水に、人だかりが出来ている。溜息の中心に位置する男性は、金髪の長い髪を無造作に垂らし、派手な衣装を身に纏っている。何とも人目を引くほど美しい。

『吟遊詩人が……………』

男が、弦をポロンと奏でた。

「五つの海、貴方を慕いて越える海

荒れ狂う海の支配者よ

天駆ける神の化身よ

その歌声で僕の願いを叶えておくれ

僕の願いは、貴方と共に在る筈なのに

始めに交わされた約束は、貴方を苦しめるだけとなった

千の夜を越えて、繰り返される悲劇と喜劇

貴方の悲しみに終止符を

僕の苦悩に終止符を

世界の望みを探し出し、その手で叶えてくれないか

……さあ、五つの海を越えて、翡翠の涙を越えて、どうぞ僕の元に

毎夜貴方を慕いて夢を見る

僕の懺悔が海を越えて

貴方に届く夢を見る

どうか僕の願いを叶えておくれ……そして許して

貴方を慕って千の夜……」

ハルは、歩みを止めて吟遊詩人の歌に暫し聴き入っていた。

「ふむ……そろそろか」

外で待つ元は、胡坐に頼杖をつきながら、ハルが出てくるのを待っていた。ハルが建物に入って一時間が過ぎた頃だ。自分の時の事を思えば、じきに出てくるだろう。元は、落ち着かない個性的な同行者に目を向けた。

額に宝玉を持つ獣ギヴソンは、周囲の気配をくまなく窺っている。隙あらば、いつでも襲いかかるチャンスを狙っているのだろう（ま、そんなミスしねえけど）。タロはタロで、元の肩に乗ったり歩いて正面入り口まで行ったりと、ソワソワしている（この様子を見て、元はガツクリと肩を落とした）。そんな二匹の動向を目で追いながら、

『そうか……。俺、ここから旅立って、もう一年以上経ったのか』

そう懐かしい様な、それでいてこんな所で何やってんだという罪悪感が襲う。こんなのにのんびりしている間にも、沢山の命が危険に晒されているというのに……。その時、ギヴソンがピクリと体を硬直させた。

「ん？」

元がギヴソンの意識の先に目を向けると、白装束を着た人物がこちらに向かって歩いてくる。

「げっ」

元の気持ちに反応するように、ググルルルルッ！ ギヴソンは低く唸りながら、地面に鋭い爪を喰い込ませた。

「暴れんな……」

元はボソリと呟くと、ギヴソンの手綱をグッと握り締め、地面にめり込ませる。その人物は元の前に立ちはだかると、ギヴソンの殺気など気にも留めず淡々と言葉を繋いだ。

「貴方……困りますね。」

こんな場所に、一つ目の海を越えた世界の生き物を連れ込むとは。しかも、その獣の額……。人を襲った事がありますね？ 何故狩らないのか理解出来ませんよ。

貴方もそうだ。何故今更「始まりの地」に？ ここを出発されて一年以上お立ちのようですが。貴方がたの役割をお忘れですか？ エンダとは獣を狩る為だけに存在して居る事を、忘れてはいけませんよ。

そもそもどうやってこの地に？ 原則海を越えたら、戻って来られない筈ですが？」

表情はフードに隠れ見る事は叶わないが、元を侮蔑しているのは明らかだ。矢継ぎ早に質問を重ねる協会の人間に、元は姿勢を崩さず飄々と答えた。

「俺だって知らねえーよ。たく、せつかく一つ目の海を越えて、これからって時に、いきなりこの「始まりの地」に飛ばされたんだ。どうやって戻ってきたのかもよく分からねえ。洞窟の中で戦ってい

る時だ。こいつらと一緒にな。

それにこいつは、俺の足だ。移動手段として獣を従えるのは、エ نداが成せる技、自分よりも弱い獣だ。問題ないだろ？」

元の言葉に、ギヴソンがブルリと震えた。それが怒りからか恐れなのかは分からなかったが、今は構ってられない。狩りの対象にされたら困るのだ。

協会に属する白装束の男は、暫し考え込んでいたが、結論に到達したのか服の裾を翻し、建物方向へ歩き出した。しかし、再度振り返り、元に向かってこう言い放った。

「貴方……。多少強くなっただつてもりのようですが、そのレベルで満足されていては、ねえ。

こんな場所に舞い戻って、のんびりされてるようでは……貴方、いつか死にますよ？」

おや、これは失礼……。ご心配から言葉が過ぎましたか？」

そう言うのと、後は一度も振り返る事無く、建物の中に消えて行った。元はその姿を一瞥し、無表情なまま鼻を鳴らす。

「ち、いけすかねえ」

そう深い溜息を吐いた。協会とはあの白装束軍団の組織だ。表の世界には出てこない組織だが、この世界では絶大な影響力を持つ。名目上エ نداの支援を行う組織ではあるが、エ نداを駒以下程度にしか思っておらず、密かにエ ندا達からは、煙たがれている組織だった。

「全く……関わりたくねえってのに……」

そう毒づく元の肩から、タロが勢いよく飛び降りた。その向かった先には、

「おっ？」

白装束と入れ替わりで、ハルが入口から出て来たのだ。

変わった。

まずは服だ。不思議な現象だが、エ نداが戦闘や危険に晒されると

着衣がバトルドレスに変貌を遂げる。このバトルドレスが優秀で、エンダはこの服によって、数々の至難を乗り越える事が可能となるのだ。正にこれはエンダの証しだった。

「便利だぞ、それは」

元はニヤリと笑った。服だけでは無い。この世界に受け入れられた自然感は、別れる前とは劇的に違う。意図せずにレベルが上がり、多少の抵抗力は備わったが、相変わらず頬がこけ手脚は棒きれのようだった。それが今は、頬にほんのりピンク色の血色を湛え、全身に強い生気を発するまでに変わった。

「何かには成れたらしいな。戦士ではなさそうだが……」
そう言つて、元は白い歯を見せながらニカツと笑った。

第4章 From now on - 4

「ちょっと、目立ってきたな。一旦町から離れるぜ」

元の提案で、一行は休む間もなく町を出た。元の言う通り、ギヴソンに対する畏れからか、先程までの雑踏が嘘の様に、静まり返っている。獣を狩る事が生業である筈のエンダ達ですら、物影に隠れる始末だ。

一行は小高い丘に上り、どこもない世界を見ていた。

「息、出来るようになったか？」

元にそう言われて、

「ああ、私の身体を気付かつての事が……」

何故こんな場所にと、ハルは訝しがったが、エンダになった自分への気遣いだろうと解釈をした。ハルは全身に風を受けながら小さく頷く。

「つい先程まで、この受ける風すら苦痛でしかなかったのにな」

元は扉を開けて、直ぐこの場所を訪れたから（というか、連れて来られた）当時は多少辛かっただけで、ハルの苦しみは理解してあげられない。しかし、落ち着いた表情を見ると、エンダになれて本当に良かったと安堵するのだ。

元は一度目を閉じ、そしてハルの掌中のタロに目を移す。

「ここからスタートするには、この上ない状態の良さだ。まずレベルは問題ないだろう。能力に対する抵抗感もなさそうだし。そうすると……」

元はハルの掌で安心しきったように寛ぐタロに、優しい眼差しを向けた。

「お別れなんだな、タロ」

始まりの地で、ハルに駆け寄る相棒の姿を見て元は決意した。熱い思いが元の胸を締め付ける。目頭が熱くなるのを、グッと押えた。

『いや、お前が幸せならば、それでいい……。ハルだったら、安心してお前を預けられるってものだ』

この場所を選んだには訳がある。ハルにタロを託した後に、颯爽とギヴソンに乗り込み駆けて行けば、多少なりとも記憶に残る別れになるのではないか……。そんな僅かな期待があつての事だ。

『情けない……。俺』

「……頼みがある」

同時に二人が、同じ言葉を発した。何度も脳内でシミュレーションを繰り返していた元は、想定外の展開に動転してしどろもどろに答えた。

「え？　つと。あの、お先にどうぞ？」

そんな元とは対照的に、ハルが真剣な眼差しで言い放った。

「私を、元が行けるギリギリの土地まで、連れて行ってくれ」

「は？」

いつもは口数が少なく、ボソボソと話すハルが、やけにはつきりした口調で言葉を繋ぐ。タロを託す事しか想像して居なかった元は、ハルの言葉を瞬時に理解出来ず、

「連れて行け？」

そう聞き返した。そんな元の心中など気にしていないのか、ハルは言葉を繋げる。

「私は、恐らくヒーシャに成った。既に使用出来るであろう回復魔法の原則が、自分の体にある事が分かる。

しかし、所詮人を救うための能力だ。私が望んでいた力には程遠い……が、この力を最大限まで、しかも短期間で引き上げたい」

ポカンとハルの言葉を聞いていた元は、「ハッ」と我に返って怒鳴った。

「ば……馬鹿野郎……！」

エンダ様とか言われて調子に乗ってんのか！？　低スキルの回復魔

法位で、何に成れたってんだ？

まさか今日、明日で俺レベルにまでなれるとでも思ったか？舐めんな！

何か勘違いしているみてーだけど、俺達の使命は獣を狩りこの世界の民を救う事だぜ。自分の能力開発の為じゃ、絶対無い！！

そもそも絶対死ぬって！舐めてんの？この世界をさ。能力を高めんには、それなりの努力や経験が必要なんだよ！」

ハルは、大声を出しても無駄だと言わんばかりに、無表情で答えた。「舐めてなどおらん。勿論本気だ。進めば進むほど獣が強くなるのなら、先に進んだ方が民の為になる。一石二鳥だ」

自論を当然の様に押し付けてくるハルに、少し怯みながらも、

「はぁ……」。

だから……無理だって。生き抜く事が前提だから。それって、俺に守ってもらうのが目的だろ？？

低スキルのエンダは、この町から地道に戦っていくしかねえんだよ。そうやって皆それぞれの持ち場で戦っていけるようになるんだ。

そもそも俺がここに居るのは例外中の例外で、本来だったら自分の力で生きていくしかねえんだ。出来ねえからって、人を頼るなんて虫が良すぎるぜ！」

元の罵倒に怯むことなく、淡々とハルは答えた。そう表情すら変えずに。

「……昔はそう思っていた。何よりも大切なのは過程なのだと。辿り着くまでにどれだけの努力を行ってきたのかだと、……いや、今でもそう思っている。そうあるべきだとも。しかし、それでは私が望む結果は得られない。もう一秒も無駄にしたくない。これが一番近道なんだ。元が言う事もよく分かるが、今はそのルールに従う事は出来ない。」

……しかし私一人では、今直ぐに元の戦うレベルまで辿り着けない。正規のルートで行けば、恐らく元が辿ってきた倍以上の時間がかかるだろう。それでは、遅いのだ。

分かってくれ。私は強くなりたい」

何が分かってほしい、だ、元はギリリと歯を鳴らす。頼むから俺の話を聞いてくれ。

二人の間を優しい風が通り過ぎ、ハルの髪を揺らしている。その髪の間から垣間見るハルの強い決意が、元を突き刺し、元の心臓は、今やドクドクと大きく高鳴っていた。

「強くって……おめえヒーシャじゃん。ヒーシャが戦える筈ねえーだろ？癒してなんぼだろ？」

あのなあ、おめえが、前線で戦っても勝てるわきやねえじゃねえか。攻撃一つ出来やしねえよ。同じレベルの奴らと組めよ！癒しまくって強くなんじゃないの？ヒーシャって。知らねえけど。

戦士の俺だつて、弱い獣から戦って時間掛けて、少しずつ強くなつたんだよ。近道なんてねえんだよ……そうやって、俺はここまで来たんだ」

説く度に、元は少しずつ悲しくなっていく。短い期間だったが寝食を共にし、仲間として認めてきていたのに。俺が切々と言ってきた事の何一つ、こいつに届いていなかった……そう思うとやり切れない。

「元が今まで伝えてくれた事……本当に理解している。今のままで、明日にでも死ぬかもしれない。でも、死なないかもしれない。それに賭けたいのだ。

ムシがいいことも、分かっている。いざとなったら捨ててもらっても構わない。元が戦っている場所まで連れて行ってくれ」

ハルの言葉に、元は少し心が揺らぎ始めた。ハルの言葉の端先が、いちいち元の心に突き刺さるのだ。

「捨てるって……（そんな事、俺が出来ないって分かってて、こいつ！）何をそんなにあせってたんだ？俺がここにきて一年ちよつとだぜ。たった一年じゃねえか？んで、こんな獰猛な奴を使えるようになるんだよ。（そう言いながら、元はギヴソンを指差す）。

てか、ごめんだよ、用心棒みたいな事……！」

元の最も至極な言葉にも、ハルは諦める様子も見せず言葉を繋げる。元の怒涛と、ハルの淡々とした物言いは、実に対照的で温度差がある様に見える。しかし次の瞬間、ハルの表情に一片の必死さが垣間見れた。

「元、何度でも言う。私を元が戦う場所まで連れて行ってくれ。それから先は、別行動だ。この通りだ。頼む！」

これ程までに必死なハルを、今まで見た事が無かった。感情が高ぶる仕草を見せたのは、出会った時以来だ。それ以外は、何を考えているか分からない程、無表情、無関心を決め込んでいたのに。

『こいつ……ちょ、しつけえ！』

どれ程、怒鳴ってもなじつても諦めないハルに、元の中で諦めに似た感情が浮上する。

『受け入れなかったら、こいつは一人で絶対に無理をする』

そう思いながら、天を仰いだ。それは、自分の限界を理解していいながらの無謀……。そして、それを分かっているが故に、拒絶する事が出来ない自分も……。

元は最後の期待を込めて、ハルに叫ぶ。

「あーもう！！ お前！！ 超ム力つくんだよ！！ 一人で世界の苦悩を背負ってます、みたいな顔しやがって！ 何なんだ！！ 理由を言え、理由をよ！！」

皆、洗礼を受けたら使命感で意気揚々とするか、能力を受け入れられず体が拒絶して苦しむか、どっちかなんだ。何を抱えているんだ！ 聞かねえ限り、動けねえ。海を越える度に半端なく獣は強くなるんだ。あそこは俺でもギリギリ勝てるかどうか……。自分の身すら守れねーお前を連れていく事は、俺にとっては相当な賭けなんだ。そのリスクを負うだけの、理由があるんだろう？ 俺には聞く権利があるはずだ！」

互いが一方通行の主張を続け、全くの歩み寄りを見せない。そん

なエンダ達のやり取りには、全く興味がないギヴソンは、面倒くさそうに丘の上で横になっている。夕口は、両手に組まれたハルの掌に、ちょこんと乗って事の成り行きを見守っていた。

『もう、一か八かだ。くそつ、こんな真剣な奴を打ち捨てて行くなんて出来ねえ。でも、お荷物抱えて戦って、果たして生き延びる事が出来るか……。聞いて納得する内容だったら仕方ねえ。連れて行くしかねえ』

元はたとえ短い期間でも、一緒に戦う意義を見出したかった。ハルは一瞬言葉に詰まったが、体を固くしながらも言葉を繋げる。

「元、私は決して、己の不幸を嘆いている訳ではない。私は真実が知りたいのだ。何故私がこの世界に呼ばれたのか。私がここに来る為に犠牲にされた事、策略、全てが知りたい。答えになっていないと思うが、今はこれしか言えん。今どれ程重要な事を決めようとしているのか……。分かっている。しかしどのような結果が待っていたとしても、私は受け入れる。そして、絶対に現状を打破して見せる。……頼む。私に利用されてくれ」

「利用されてくれて……」

ハルの言葉に、元はがっくりと肩を落とした。

第5章 A n d t o a F i g h t - 1

元達は、相変わらず、二人と二匹で旅を続けていた。

一つ目の海はとつくの昔に越え、二つ目の海も、もう目前だ。それでも、一緒に旅を続けているのはパーティとして相性が良かったに他ならない。剛と柔。互いが不足している部分を、戦いの中で補う事が出来た。事実、この一年降りかかった数々の困難を乗り越えて、今この地に立っている。

元は今も獣を狩りに行く最中で、肩にハルを乗せて、豪雨の中グソンを走らせていた。装備しているゴーグルに否応が無しに、雨粒が打ち付ける中、元はハルにそつと目を移した。

『そついえば、ハルのバトルドレス……随分変わったな』

この雨の中、バトルドレスは、雨具仕様に变化して居る。灰色の世界に、一点の曇りすらないハルのバトルドレスは、ぽっかりと浮かび上がる淡い光のようだ。しかし当のハルの表情は、深いフードの中で、何を考えているのか垣間見る事は出来ない。

『一年前……エンダになったばかりの時は、薄い布地だったのに。今や立派な厚手の布地に成ってるし、白を基調にした複雑な模様が入っているところなんか、ヒーシャらしいな』

聖者の加護を受けているのか、多少の攻撃であれば、防御可能な強度性を兼ね備えている。これは、ハルのスキルが上がったことに他ならない。

不思議な仕組みだが、エンダとして経験を積みレベルが上がる度に、姿形も性能も変化する。バトルドレスを見れば、そのエンダの強さを測り知る事も可能だ。

『俺のバトルドレスは、地味でつまんねえもんな。ちょっと模様が変わる位だし』

元のドレスも同じ仕組みなのだが、戦士としての特性か、防具と

しての機能が重視されているらしく、レベルが上がっても差ほど変化を感じさせない。しかし「風を纏っている様だ」という元の言葉で、その性質の高さを伺い知ることが出来る。

移動距離が長いこんな日は、昔の話を思い出す。

『根負けしたんだよなあ。頑固って言うか……自己中って言うか。結局何を言っても、説得しても罵倒しても、連れていけの一点張りです……。俺も甘いな……（フッ）』

正確に言えば、こうだった。平行線を辿る二人の間に、痺れを切らしたタロが、元の肩に乗ってきて、頬に擦り寄ってきたのだ。共に過ごした長い旅路で、今まで一度も見せた事が無い行為に、元が再起不能になり終了……。根負けしたというよりも、タロの一本勝ちだった。

『しかし、何だかんだで、ホント強く成りやがった。それはすげえよ。って言うても、無茶して、死ぬ思いして、命削って、の結果だけだよ。よく死ななかったよ、こいつ。』

……全く痛々しいんだよ、ホント。

たく、一体何を抱えてんだか。ま、無理に聞かねえがな。ま、結果的には助かっている訳だけど』

元は「くはは」そう人知れず笑った。

遠くで雷の音が木霊する。天候は一向に良くならず、頬を打つ雨が痛い。獣が居る場所まで、先は長い。

元はふと自分を導いた光の事を思い出す。

『あの光から聞いていた事は、全て本当だ。この世界は危機に瀕しているし、エンダは世界を救う民だ。俺は戦士になって、今も戦いの中に身を置いている。』

……あの光は、強い意志がなければ扉は開かない。全てを捨てる覚悟があるか？ されば扉は開かれん……って話していた。

それこそ皆が人生の絶頂期に導かれ、己の意志で扉を開ける奴ら

ばかりだつて言つてたよな。なのに、こいつはどうだ。この世界に
来た意味や意義を全く分かつて居なかった。何にも分かんねえでこ
の世界に放り投げられて……それはちよつと、辛いよな』

元は結局、ハルを見捨てる事が出来なかった。それが一緒に旅
を続けている、もう一つの理由だ。

打ちつける雨は、未だ止みそうにない……その時、ハルが元の肩
を叩いた。元は手綱を引き、ギヴソンの走りを止める。元の耳元で
告げるハルの声を聞いた。

「右斜め三〇度方向。ここから三・二キロ以内。目的の獣がいる」
「見つけたか！ よつしゃ、行くぞ！」

ハルが指し示す方向に、ギヴソンを操る。ハルは、ジツとその方向
を見つめて全く動かない。これから先は、その視線の先に手綱を引
くだけだ。

「ひょー……でけえな」

ホンの数分走った先に、獣の姿を捉えた。徐々に目的の獣に近づ
きながら、唸る様に呟く。まだ数百メートル程の距離があるはずな
のに、障害物から垣間見えるそのサイズは、六メートル強。背中か
ら尻尾まで厚い甲羅で覆われているその姿は、狩りが困難を究める
事になりそうで、元に深い溜息を吐かせた。

獣は異常に興奮しているのか、そんな性質なのか……周りの木々
をなぎ倒しながら前に進んでいる。時折、闇雲に暴れては、鈍い雄
叫びを上げる始末だ。

今回の狩りは、この獣が一ヶ月の間に三ヶ所の町や村を襲い、壊
滅させてしまった事が発端だ。一度人間を襲った獣は、殺戮という
快楽に味をしめ、的確な意識の元、人間を襲う。大半の獣は獰猛な
性質な上、この世界の人間は獣を傷つける事が出来ない。その為、
懸賞金でエンダを雇い、獣退治を依頼するのだ。それは、村単位で
あったり、国単位だったりする。

エンダは、「依頼所カラー」で自分のレベルに沿った依頼を受け、契約を交わすのだ。どのカラーも、エンダでこった返し、酒場のよくな賑わいをみせていた。陽気且つ陰気、様々な思いが入り混じった異質な空間で、依頼を探す多種多様なエンダ達が行きかう場所……それが「依頼所カラー」だった。

第5章 And to a Fight - 2

膨大な依頼リストの中から、ハルが選んだ獣がこいつ「ザツツケルオン」だ。

「あ？ 無理だろ？ A' って無理じゃねえ？ しかも宝玉の色が深緑じゃねえか。こいつはあ、手ごわいぞ」

元はハルの手元のリストに目を落としながら、これからの展開に深い溜息を吐いた。宝玉の色は、深ければ深いほど獰猛な獣と見なされる。依頼書には様々な情報が収集されているが、その中でも宝玉の色は重要な判断材料とされた。

元はネビールと呼ばれる飲み物を飲み干しながら、忠告を続ける。「無理だつて、もう少し薄い宝玉を持った獣ですら、息絶え絶え倒したつてんのに……。ねえこつちにしない？ ほら、このB'。これだつたら俺らでも、楽に倒せ……。つて、ちよつと！ 聞いてる？」最近は何りの対象を決める度に、こんな攻防が繰り返される。行きつく結果は同じなのだが、元はパーティの存続の為に、何度も苦言を告げ続けてきた。

『今日こそは絶対に、阻止して見せる！』

ハルは、元が指差す獣に一瞥しただけで、ザツツケルオンの特徴を羅列し始めた。ボソボソと話す声は、カラーの雑踏に掻き消されそうな程、小さい。

「獣名は「ザツツケルオン」。

サイズは三メートルから七メートル。獰猛且つ類まれな体力と、防御に使われる長く太い尻尾、発達した嗅覚……。と。嗅覚は面倒か。少し厄介かもしれんな。接近戦は、要注意だ。

後は……。爪はどんな岩も砕ける威力を持ち、更に威力を増大させる長い腕。その為攻撃は、大きく腕を振り落す、か……。恐らく敵を一撃で仕留める方法に限られると思う。体格から予測すると、攻撃パターンも単純な筈だ。

しかも清い光に弱い。「癒しの光」で攻撃力及び体力を一五%前後減少させる事が出来る。まあ、二十分位の効果しかないが、その時間が勝負だ」

「ちよつと、ちよつと?」

元が間髪入れずに、苦情を告げた。

「何、受ける気満々で話進めてんだよ!!」

「それに……」

ハルは、リストを見ながら言葉を繋げる。

「ここから東二〇キロ地点に居るが、東南に向かって移動を続けている」

自分の額に指をかざし、乱雑に本を捲る様な仕草をした。その表情は真剣そのもので、元は「ググツ」そう言葉を飲み込んだ。

「こいつの目的は、恐らくその先にある町だ。一直線に進んでいる。恐らく後二日程度で、町に到着するだろう。千人近い人口の町だ。

襲われる様な事があれば、甚大な被害が出る」

ハルの言葉には、この依頼を無視出来ない緊迫感を纏っている。

『いやいやいや、このパーティを守るのは俺だ。死んだら元も子もねえんだからな!!』

「う……。時間はあまりない、か。で、でもよ、随分育っているみたいじゃねえか? 俺達の手には余るぜ。頑張ればどうにかなる、なんて世界じゃないんだからさ」

元の言葉を尻目に、ハルはリストに手を翳し「我は願う」そう呟くと、リストが青白く輝いた。これで契約締結だ。隣で、「ちよ、だから! 俺の意見も、ちったあ聞け!」元が不機嫌そうにブツブツ文句を言っているが、全く気にも留めず、リストから顔を上げようともしない。

その時、隣の席から楽しそうな声が響いてきた。

「ねえ、こつちにしようよ。このタイプだったらこの前、コッ掴んだしさ! 絶対行けるって!!」

「B、かあ……ちょっと不安。ほら見てよ、意外とスピードが速いじゃん？　僕ら、すばしっこいのちょっと苦手じゃない？」

元はチラリと隣のリストに目を移した。そのパーティが指差していたのは、正に自分が契約を狙っていた獣だ。元達にとっては、問題無く倒せるレベルの獣なのに、容易に片がつくのに……そう思うと、二人に向かつて自然と言葉が出た。

「大丈夫じゃねえ？　スピードがあるって言っても、広範囲で意識を広げるタイプじゃねえし。前からの攻撃だけ注意しておけば、行けんじゃねえ？」

元は頬杖をつきながら、あたかも知り合いの様な顔でパーティを見ている。元の言葉に、顔を上げた二人を見て、元は驚きの声を上げた。

「双子？」

知り合い同士でこの世界に訪れるエンダなんて、聞いた事がない。隣のテーブルには、双子と四十代前半位の男女が座っていた。ぱつと見、親子の様なパーティだ。獣の選別は双子に任せているのか、干し肉を肴に酒を飲んでいる。

「「双子じゃないよ」」

「「似てるけどね」」

息もぴつたりな上に、人懐こい笑顔もそっくりな二人だ。ここまで似ていて、兄弟じゃないなんて有り得るのだろうか？　十代半ばの風貌に、クリクリとした栗毛が良く似合っている。

「へえ、他人の空似か？　めっちゃ似てんなあ」

元の感心する様な言葉に、ハルがチラリと顔を上げて、暫し二人を見入っている。二人は互いに顔を見合わせ、ニツコリと笑った。

「「だよね。自分達でもそう思うよ」」

言い合わせた様に、同じ言葉を発する二人は、更に言葉を続ける。あまりにも息がぴつたりで、スピーカーから声が出ている様に聞こえる。

「「僕達、出会った瞬間に運命を感じたんだ。互いが欠けていた一

部なんだって、ビツと来たよ。ね!」

「へええゝ面白いなあ。何々? 職業も一緒なの?」

どこまではもれるものなのだろうか……興味本位を全面に押し出しながら、元は楽しそうに問うた。

「そんな訳ないでしょゝ四人のパーティで、二人も同じ職業なんていないよ」

酒に酔った紅い顔で、女性が話に入ってきた。社交的な元は、自然と他のエンダ達と会話を交わす事が多い(ハルとは全くと言っていい程正反対だった)。

「僕はマジッカーだよ」

「僕はブックマスターだ」

「へえ、ブックマスター? 珍しいな。マジッカーやヒーシャと違って、攻撃と癒しが使えるって本当? 獣を召喚するんだろ? 便利だよなあ」

「まあね、でもレベルが低い内は中々ね。足手纏いになる事もしばしば」

そう言うのと、ブックマスターは小さく肩を上げた。「マジッカー」とは魔法使いの事だ。精霊と契約を交わし、攻撃魔法を使用する事が出来る。戦士とマジッカー、そしてヒーシャはパーティに必ず居る職業だった。

反して「ブックマスター」は、かなり希少な職業といえる。魔法書から様々な能力を有する獣を召喚する事が出来が、レベルが低いうちは、召喚出来る獣も限られて居る上に、かなりの魔法力を消耗するらしい。ブックマスターが海を越えるのは、容易な事ではないと言われていた。

「なあゝに言ってるの? ロッテってば、自分の価値をホント分かってないんだから! 四八の召喚獣が使えるなんて凄いんだからね! 更にレベルが上がれば、凄い事になるよ。今は我慢さ。それまでは僕が君を守るよ!」

「ジョッシュ……ありがとう。君にはいつも助けてもらっていて…

…いつか君の役に立ちたいよ！」

「それは僕のセリフさ、君と一緒に狩りをする事が、僕の生きがいなんだ。君と居れば、僕はもっと強くなれる」

キラキラとした瞳で、互いを見つめる二人に、元は首を捻りながらも感動の声を発した。仲間意識が強い奴はごまんと居るが、ここまですぐ合っている奴らは珍しい。

「仲良いなあ」

「こいつらはねえ、自分大好き人間だからね。だからお互いの事が、命の次に大事なのだ」

親父が二人を指差し笑い、女性もケラケラと笑っている。「ははは、そっくりだって言ってもそんな馬鹿な……」そう笑う元の隣で、二人は同時に舌を出した。どうも冗談ではなさそうだ。

「じゃ、契約するよ！」

ジョッシュの言葉に、ロットテが頷くと青白い光が周囲を照らす。

「あゝあ、良いなあ……」

諦めきれない元の言葉に、双子を見ていたハルが手厳しくピシャリと言った。

「誰かがやらねばならんだ。それが我々というだけの話だ。こいつには、既に何組かのエンダ達がやられている。だからこんな危機的状況でも、野放しだ。時間が無い。選好みしている場合か。

そんな下級（元が選んだ獣を指差し）、そいつらに任せておけばいい」

【下級を狙う、そいつら】と呼ばれた二人は、苦笑いを浮かべている。姿形は幼いが大人の対応に、元は内心ホッと胸を撫で下ろした。ハルの無神経な物言いは、いつも元をハラハラさせた。気の強そうな親父と女性は、ハルの小さな声が聞こえなかったらしく、キョトンとしている。

「うゝ選好みじゃねえ！ 死んだら元も子もないっつの！！ 能力に合った獣を選択するのは、ここで生きてく上で死活問題だろ？」

そう訴えられた言葉に、ハルは真つ直ぐな視線を元に投げ、

「だったら自分達がその能力者になればいい事だ」

それだけ言つと、持ち込んだ本を広げ、目を落とした。

「~~~~~！　だから、その能力を得る前に死んだら意味ないじゃんか！！　既に何組かの、一組になったらどうすんの！？」

元の絶叫に、ロットとジョッシュがリストを覗き込み、驚きの声を上げた。

「ひゃゝ、ほぼS級じゃん。リストが上がって随分経つのに、未だ倒されていない獣だよ？　お兄さん達、そんなに強いのか？」

「いやお兄さんって、俺は元だ……　って、そこじゃなくて。弱くはねえけど、A'はもしもの時が……」

この世界の契約は、獣を仕留めて宝玉を持ち帰れば任務完了となる。

逆に、依頼カード（依頼を受けたら発行されるカードで、持つていると獣の情報が更新される）を破棄するか、受けたエンダが死ぬか、もしくは二十日以内に仕留めなければ自動的に破棄される。怖いのは、契約破棄を続けると契約出来る狩りが限定される様になる事だ。その為、エンダは慎重に成らざるを得ない。

「既に契約は結ばれた。今更文句を言うな」

当然の様に言い放つハルに、

「今更あゝ??　いやいやいやいや！！　契約する前に、散々反対しましたケド???」

ハルの有無を言わせぬ絶対的な物言いに、隣のパーティ全員が【御愁傷様……】そんな表情を浮かべている。皆の表情を横目に、元はギリギリと歯を鳴らした。それでも元は、効果の無い説教を言い続け、そして言いつくすとガックリと肩を落とした。この雑踏の中、ハルだけが隔離された世界に居るように、元はスルーされ続けた。

『今回も無駄に終わった……』

「元、終わった？　じゃあさ、この獣の対策を一緒に考えてよ！」

「元が頼りさ」

二人の陽気な声に、元は更にガクリと肩を落としたが、「ちよつと待ってて」そう言っていると元は席を立った。ネビールを注文するためにカウンターにドカドカと向かう。

夜が更けると、カラーは更に異色な空気をはらみ始める。興奮と安堵そして不安。様々な想いが交差する空気に、エ نداは飲み喰い笑い語り合うのだ。

「……行くのはいいんだよ。行くのはさ。獣は絶対に俺が倒すし。だって……おめえまた無茶するだろ？」

なみなみと注がれたジョッキを傾けながら、小さな声でボソリと呟く。そして一度ハルに目を向けると、フツと目を伏せた。

第5章 And to a Fight - 3

ハルが前髪に落ちた雫を払った。こんな小さな体のどこに、獣を前にしても怯む事の無い、強固な精神があるのだろうか……百戦錬磨の戦士でさえ、獣を前にすると一瞬恐怖に襲われるというのに。

ハルの能力は、他のエンダ達のそれとは全く違う。戦士とヒーシヤの根本的な違いだけではない。もっと根底の部分で大きな違いがあるのだ。ヒーシヤの事は全く分らないが、ハルの術者としての能力は、かなり高いのではないかと感じている。他のエンダと旅をしたのは初期の頃だけだが、魔法に時々鳥肌が立つ時があるのだ。何て言うのだろうか……戦士であれば、獣が切られた事に気づかず絶命する様な、一片の無駄がない美しさというのだろうか。正直、筋肉馬鹿の元には、回復魔法に優れているハルの能力は大変心強い。しかも、倒すべき獣の殆どが、闇に属する類いの為、ハルの補助魔法は有効に機能した。

『術の発動時間の短さ、ましてや術の影響力も相当……てか、センスがいいんだよな』

しかしこれは経験を積みばどうにでも成る話かもしれないので、特段珍しい事ではないのかもしれない。

他のエンダ達と絶対的に違うのは、獣を感知する能力を備えている事だ。三キロ地点では方向を、一キロ以内になると、その性質と大体のレベルまでを感じ取る事が出来るらしい。神出鬼没に出現する獣を感知するのだから、この広い世界において驚くべき能力といえる。

加えてその記憶力だ。村や町に立ち寄る度に、終日書物所に籠る。そうやって得た知識を、額の前で本をめくる仕種で、情報と呼び出す事が出来るらしい。胡散臭い話だが、光が浮き出るように文字が見えるのだと言う。そこに、自分の経験を上書きしていると言うの

だ。

しかし、そんな特殊な能力故か、はたまた強くなりたい一心からか、如何せん無理をし過ぎる。息も絶え絶え、町に駆け込む事も多く、何度死にかけたか分からない。それでも、獣を前に引く事を知らないハルを見捨てる事が出来ず、二人は何とか受けた依頼を片づけていった。

『いつになったら、心穏やかに暮らせるようになるんだろう』

元は目の前の獣を見据えながら、声に成らない嘆きを吐く。ハルと一緒に狩りを続けられ、いつか絶対に命を落とす……そう思うのに、気がついたら別の狩りに向かってギヴソンを走らせている。

「気付かれた」

ザツツケルオの異常な興奮を感じ取ったハルが、ボソリと呟いた。嗅覚が発達しているというのは伊達じゃないらしい。気付かれた……そんな状況でも、ハルは決して動じたりしない。死にかけていても、レベルが低い敵の前でも、ハルは何も変わらなかった。

「（ちったー、焦りやがれ！）チッ」

元はギヴソンから飛び降り、手綱を離した。縛り付けて、戦いに巻き込まれないようにする為だ。ギヴソンは毛色の違う獣から一目散に離れ、姿が見えなくなった。戦えない事もないだろうが、獣同士が戦う時は、喰うか食われるか、その時だけだ。人間の為に、そんな危険を冒す筈はない。

『こいつにも、これだけの危機回避能力があれば……』

元は嫌みと心配が入り乱れる感情で、ハルを見た。ハルはじつと胸に手を当ててタロのぬくもりを確かめている。服の隙間からタロが鼻だけを出している姿は、何とも力が抜ける様な可愛さがある。

「もう少し、我慢してね」

タロに向かって、優しくハルが呟いた。

クン……

ハルの気遣いに答えるように、タロは鼻を鳴らし地面に降り立ち、安全な場所を目指し駆けて行く。本当は一時も離れたくない筈なのに、ハルの足手纏いにならない様に場所を離れるのだ。タロの（元には見せない）聞き分けの良さと、ハルの（元には見せない）優しい言葉に、

「その優しさ、少し位は俺にも向けてくれよ」

言っても嘆いても無駄な言葉を、ブツブツと吐いてみたりする。

第5章 And to a Fight - 4

ゴアッ

その時、元達の直ぐ真横を、直径二メートルの大木が通り過ぎた。風圧で二人のバトルドレスが揺れる。二人がスッと目を向けると、ザツツケルオンが直ぐそこまで迫っていた。

「ふうん、熊だな」

元の言葉通り、姿形は二足歩行をする熊そのものだ。深緑の瞳は、執拗に元達を見下ろしている。大きく体を左右上下に揺らしながら、時々呟きに似た唸り声を上げた。村を襲った興奮が蘇ったのか、瞳孔を異様に開かせ、流れ落ちる涎と鼻息を荒くする様は、殺戮自体が快楽……今まで何度となく見てきた光景に、「はっ、楽しんでやる」元が苦々しく吐き捨てる。

犠牲になった民を思うと、いつもこの瞬間は堪らない気持ちに陥るのだ。

元は背中からスルリと剣を抜き、獣に向かって構えた。自分の身丈程ある剣が、豪雨の中鈍く光り輝く。長期戦は不利だというハルの言葉を思い返ししながら、ハルが仕掛けるタイミングをジッと待つ。ザツと一歩、獣が近づいたその時、周りに低い詠唱が響き渡った。

「エルザ スロウ 届け 清い光」

詠唱が終わるや否や、ハルの掌から呪文を携えた光の魔法陣が出現した。波打つ様な魔法陣の出現を導くがの如く、周囲に荘厳な歌が木霊する。空気が震えた……そう感じたのと同時に、魔法陣がハルを離れ、勢いよく上昇を始めた。魔法陣は大気を巻き込みながら、獣のサイズまで急激に広がったかと思うと、一気に振り落とされた。ザツツケルオンが光輝く魔法陣に包まれた瞬間、その巨体が大きく揺れる。

ギャガガガアア！

空気を揺らす雄叫びを上げ、両手を広げ天を仰ぐ。余程の苦痛なのか、目の焦点は定まっていない。しかし元来の闘争本能から、覚束ない足取りで攻撃を仕掛けてきた。清い光で動きが鈍いとはいえ、やはり攻撃力は半端がない。長い腕の遠心力で、鋭い爪を左右上下と振り落としてくる。逸れた攻撃は、大岩を真つ二つに打ち砕いた。しかしハルの言葉通り、単純攻撃で軌道が読みやすい。元は、間合いを取りながら、獣の太い肩を目掛けて大剣を振り落した。

ガチン！！

「固えー！！」

金属音が周囲に響き渡る。剣が鋼鉄の皮膚によって、弾き返された。腕全体に伝わる衝撃に、思わず剣を持ち替えて痺れた手を振った。

「力比べか……」そう呟きながら、元はスツと剣を構える。

ドン

次の瞬間、元は獣の目の前だった。降りしきる雨の中に、元の残像がぼんやりと残る。スピードと破壊力、元の一糸乱れぬ怒涛の攻撃が、ザツツケルオンを捉えた。

ガキン！ガキン！

しかし、固い皮膚に阻まれて致命傷を負わせる事が出来ない。その上、嗅覚が発達している為か、元の攻撃に対して絶妙な防御力を発揮してくる。

「くっ！」

元は気を練り込む為に、剣先に集中した瞬間、

「やべっ！」

元の右目に、ザツツケルオンの長くて太い尻尾が見えた。そう気が付いた時には、時既に遅く、鋭い衝撃が元の右脇を襲う。痛恨の一撃は、元をそのまま真横に弾き飛ばした。木々を数本なぎ倒し、大木に全身から打ち付けられると、衝撃で水滴が豪雨の様に降り注ぐ。

「がはあ……」

「！」

思わずハルは、元に視線を移した。一時の間の後、なぎ倒された木

々の間から、倒れたままの姿で、よろよと片手が上がった。血に染まった唾を吐きだしながら、横腹に食い込む激痛に、

「い、てえ。なんだよ……。尻尾、防御どころじゃなくねえ？ 何が単純な奴だつて？」

恨めしそくにハルが居る方向に目を向ける。そんな元の言葉など届く筈も無いが、

「ふむ、新しい情報だな。上書きしておこう」

ハルは、抑揚の無い声で呟くと、獣に視線を移した。

第5章 And to a Fight - 5

ギャギャギャア

ザツツケルオンは、目の前の小さい生き物に視線を落とした。コバエの様に纏わりつく生き物は、たった一撃で立ち上がれない程のダメージを受けている。どちらから先に片づけようかと迷いながら、ハルに視線を移した。

『これは小さすぎて面白くない。こいつは最後の楽しみにしよう。遊べる玩具がノコノコ出てきたんだ。恐怖に引き攣る顔が見たい。さっきの生き物は、動けない程のダメージだ。いたぶりながら、ゆっくりと遊んでやる』

そう判断すると、元が倒れている方向に体を翻した。

獣の判断を横目に、ハルはボソリと呪文を唱える。

「ル ペオ セイン 届け 癒しの泉」

ハルの足元より魔方阵が浮かび上がり、倒れている元の真上から光の泉が降り注いだ。光の線が水滴の様に、降り注ぐ様はいつ見ても幻想的な光景だ。光の泉を全身に受け、元は飛び跳ねるように立上がり、ハルに向かって声を掛けた。

「いよっしゃー！ 全回復！！ ハル！ サンキュウウ」

先程までの激痛が、嘘みたいに無くなっている。ヒーシャの魔法、癒しの効果は絶大だ。

元に向かって歩みを進めていたザツツケルオンは、一瞬目を見開いた。ダメージを与えたはずの生き物が、勢いよく立ち上がり、しかも負わせた傷の後遺症を微塵も感じさせないとは。

目の前の状況を怪しく光る眼で見届け、ハルに向けてグルリと体を反転させた。自分の動きを封じ込め、仲間を回復する何かが使える生き物は何度か見てきた。ハルを見据え、ギラリと深緑の眼が光る

と、ゆっくりと歩みを進める。

『攻撃力のある生き物を叩きのめしても、何度でも起き上がって来る。それは、この小さい生き物のせいだ。攻撃力が強い生き物は、こいつを殺してからゆっくり相手にすればいい』

ザツケルオンは、緑の目をギラギラさせながら、一步一步ハルに近づいていく。自分の力でどうにでもなる命が目の前に居る……獣は興奮に身を震わせた。

「ちょお、ちょ、ちよつと待て！ お前の相手は俺だ！！！」

ハルを攻撃対象に変えたザツケルオンに向かって、元は焦り叫びながら駆け出す。

「ふむ……こいつ魔法を理解している。頭が良いな」

今や眼前に立ちただかるザツケルオンを前にして、ハルは冷静に判断した。力だけではない、この感の良さに何組ものエンダが犠牲になったのだ。エンダと戦い生き残る度に、獣は強くなり手強くなる。契約を交わしたならば、自分達が狩りを成功させなければ、世界の脅威は増すばかりだ。

「それでいい」

ザツケルオンの判断に、ハルは嬉しそうに呟く。五メートル級の獣は、下から見上げると大木の様だ。こんな獣と対峙する事になるうとは、一年前は思いもよらなかった。

『……命を摘む事に、躊躇していた筈なのにな。一年か、早いものだ』

その刹那、

ギヤーガガッ

ザツケルオンが地の底から響くような雄叫びを上げた。ギラリとハルを見据えると、長く太い腕を一気に振り落した。自分にとって、ゴミ程度の生き物だ。この一撃で決まる……そう判断を下す。ハルの栗色の瞳に、ザツケルオンの鋭い爪がくつきりと映った。

「ハ、ハル―!!」

『仕留めた!!』

ザッシュ!!

太い爪が、地面に深く突き刺さる。地面をえぐる程の一撃に、土が激しく飛び散った。獣は打ち付ける雨の中、天を仰ぐ。深緑の瞳は瞳孔が大きく開き、その涎が滴る口元は、ニヤリと上に引き上げられていた。

第5章 And to a Fight - 6

ザツケルオンは、体の奥底から震える様な快樂に浸った。悦に入り、ブルリと体が震える。簡単に片付いて物足りない感拭えないうが、少し楽しめそうな奴は残っている。振り落した爪を地面から抜き上げ、小さき人間の最後を確認するべく目を落した。そう、まるで勝利の美酒に酔いしれるかのように。

バラバラと、爪に付いた土が地面に落ちた。

「！」

つい先程まで、快樂に酔いしれていた獣は、えぐれた地面を凝視し、一瞬の沈黙の後、「グルルルウ」そう低く唸った。先程までの高揚は、一瞬の間に萎びれ、全身を震わせる怒りに変わる。絶対的な自信で視線を落としたものの、当然あると確信した死体がない。寸で避けたのかと周りを見渡してみたが、その姿はどこにもない。……どこだ！ 間違いなく近くにいます。しかも生きています！ 気を付ける！ 自分の嗅覚がそう忠告する。

沸々と湧き出る怒りから目の前の木を掴んだ時、左目の端に違和感を感じた。現実にあつてはならない光景に、ザツケルオンの心臓がドクリと跳ねる。その時、目に飛び込んできたのは、腕を駆け上がるハルの姿だったのだ。

「ハル！ 無茶すんな！」

元はこの展開に、心臓が潰れる程、ハラハラしながら叫んだ。

『あーもう！ またあんな事して！』

通常ヒーシャのバトルドレスは、バトルに向かない形に変化する。それはエンダの戦う手法に応じて、バトルドレスが変化するからだ。元来ヒーシャは、後方に位置し仲間の援護を行う。癒しが存在価値であるヒーシャは、直接的には戦いに参戦しない。

これは、エンダの常識中の常識だ。

しかしハルは、後方で援護するだけに甘んじるようなタイプではない。ハルのバトルドレスがひざ丈程のスカートにスパッツ、そしてブーツなのは、ハルが自らの身を呈して、獣に攻撃を仕掛ける事に他ならない。

腕が振り落された瞬間、ハルは直前で攻撃を避け、そのままザツケルオンの腕にしがみ付いた。そして死角になる位置に掴まり、ジツと身を潜めていたのだ。基本、獣の弱点は額に輝く宝玉であり、勿論この獣も例外ではない。その場所を目指し、ハルは一気に腕を駆け上がる。

自分自身の弱点を知っているのだろうか？ ザツケルオンが、躍起になって腕を大きく振り回してくる。その瞬間ハルは、ザツケルオンの腕を蹴り上げ、獣の額に向かって高くジャンプをした。目線は宝玉に据えたまま、素早く呪文を詠唱する。

「セルメイ ザ オルガ 指せ 光の道標」

唱えた呪文が終わるや否や、ハルは渾身の力を込めてザツケルオンの額に両手を振り落とした。ハルの掌が獣の宝玉に触れた時、体が一瞬硬直しザツケルオンの全身に稲妻に似た衝撃が走った。こんな苦痛は嘗て受けた事がない。割れんばかりの絶叫を上げ、バランスを崩す獣から、ハルは側面一回転で体を翻し地面に着地した。

『何が起きたんだ！！』

全身を稲妻に貫かれて、ザツケルオンが地面に倒れ込んだ。痛みは正気で居られないのか、周りの木々を全てなぎ倒し、苦痛にその身をねじらせた。

ギヤギギギイギイイ！

「ハル！！ だから、無茶するなって……」

しかし無事に着地したハルもまた、片足について全身の苦痛に苛まれていた。勝機はハルにある筈で、一切傷など負っていないのに、

まるで相打ちのような状況下だ。ハルは、両足を地面に着きながら、声に成らない声で、苦々しく呟く。

「くっ……相変わらず、光の魔法は攻撃には向かない……」
何度も肩で息をした後、激しく咳き込んだ。

第5章 And to a Fight - 7

ハルが負っている苦痛は、ヒーシャの存在価値にある。

ヒーシャの存在価値は、救いだ。その救いの魔法を攻撃魔法に転換すれば、必然的に魔法に対して拒絶反応が出る。この世界では、反対魔法と言われている代物だった。

例えば「光の道標」は、本来獣の体力を奪う魔法なのだが、こんな体力馬鹿に使用しても差程の効果も期待出来ない。ハルはそう判断し、魔法を攻撃用に転換したのだ。

『転換する事で、通常体力を奪ったり動きを鈍らせたりって、獣にとつちやゝ地味ゝに嫌な魔法が、苦痛を伴う魔法になるんだからなあゝホント、魔法って不思議なモンだよな』

反対魔法とは、救いを生業とするヒーシャに赦される唯一の攻撃なのだ。

しかし基本、ヒーシャに選ばれる人間は、性質が攻撃的ではない。そこで起こる心の葛藤が、術者に大きな負荷をかける。それが反対魔法を使い、己の命を削る要因となる……定かではないが、それ故に、ヒーシャは自らに反対魔法を使用するのを禁じるのだ。

『いや、そもそも使う事すら難しんだよ、本当は。通常の魔法だったら、遠隔操作も可能だろうけど、反対魔法は触れてナンボだからなあ』

通常ヒーシャは獣に直接触れられるような、運動能力を持ち合わせていない筈だ。そんなヒーシャの常識を全て覆し、ハルはタブーを繰り返す。その度に苦痛を負い、レベルが高い獣になれば成る程、代償は高uktついた。ハルは苦々しくうつすら笑った。

『分かっているさ。命を削っても、それが致命傷に成らない事位は……しかし、これが狩りに有効ならば、使わない訳にはいかない』
ダメージを与えるという意味では、大変効果がある攻撃であるが、

実は殺傷能力は無い。ヒーシャは、獣の命を直接的に狩る事は出来ないのだ。アンデッドであれば、反対魔法に転換するまでもなく倒す事も可能だが、それは闇に支配される悲しき獣に、救いの手を差し伸べるヒーシャの救いだと言われている。

身体が張り裂けん程の代償を払いながらも、苦痛を与えるだけに留まる。それなのに、命を削る位の代償を負わされるのだ。正直、ヒーシャとしては割に合わない。

全身に鋭い痛みが走り抜けた。ハルは大きく息を吐く。もうザツツケルオンを見据える事も難しい。自分の体が、鉛の様に重く重力に負けそうになる。冷や汗を掻きながら、ハルは手を付きながら、地面に目を落とす。

『やはりレベルが高すぎたか……。クツ！ この制限……。相も変わらず口惜しい』

ハルは薄れゆく意識の中で、今までも何度となく感じてきた苦悩を思い返す。いずれこの意識も途切れるだろう。倒れるその瞬間まで、ハルは自問自答を繰り返すのだ。

『何か！ 何か方法がないもの……。なの……。か……。』

「たく……。また無茶しやがって」

元がぶつきらばうに呟いた。今やハルは、両腕両膝をついてピクリとも動かない。栗色の長い髪が垂れ下がり、その表情を垣間見る事は出来なかった。いつの間にかタロが戻り、心配そうにハルの周りをグルグル回っている。

『早く宿に連れていかねえとな』

元は、首をゴキゴキと鳴らした。口では酸っぱく説教をするが、正直有り難い魔法には違いない。このクラスになると、攻撃力・防御力が高い場合、自力で負ける可能性がある。旅を進める度に獣は強くなり、ギリギリのラインで何とか勝っている状況だ（一番の原因は、ハルがハイレベルな獣に限定し、契約を結ぶ事なのだが……）

獣が正気を保てない程のダメージは、防御率を著しく低下させ、獣を狩りやすくする。

だからと言って、命を削らなければ出せない技なんて、必要ない。『そんな戦い方、嫌だと言ってんのに、聞きやしねえ。もっと力を合わせれば、俺達だったら何とでもなるんじゃない？』

元は、巨大な剣を一度大きく振り落とす。

ブオン！

空気が裂かれる音と共に、幻影で一筋の光が差した。

今やザツツケルオンの意識は、受けたダメージで完全に錯乱状態に陥っている。元は、剣に全意識を集中し、そして頭上高く飛び上がった。

元は、剣の持つ特性を引き出し、活かす能力に秀でている。例えば今所有している剣は、闇に深く属する特性を持つが、これに自分本来のパワーを絡ませることで、最大限に剣の個性を引き出す。

鋼鉄の皮膚を持つ獣ですら、太刀打ち出来ない怒涛の技。元の大の奥義、

「デス・アラール」

低く唱え、大きく剣を振り落した。

第5章 A n d t o a F i g h t - 8

元は、消え行く獣の骸にジッと目を落とした。ザツツケルオンの身体が全て消滅した時、ゴロリと拳程の宝玉が地面に転がる。宝玉に向かつて、元は暫し手を合わせ続ける。これは狩った獣と犠牲になつた全ての人々に対する元達の儀式であつた。

そして宝玉を拾い上げると、狩りの完了に天を見上げ、

「無事に済んだな」

今回も死ななかつた。エンダとしての役割を全う出来た事に、元は深く息を吸つた。

元達が町に入る頃には、雨は上がり、雲の切れ間から光が差し込み始めていた。雨が止むと、空気が澄んで特有の甘だるい感じになるのは、どこの世界も同じだ。しかし今の元に、そんな情緒に浸る心の余裕など無い。

町の外れの繋ぎ場にギヴソンを預けると、その足で宿屋に駆け込む。元に担がれているハルは、ぐったりして意識が無い。顔に生気がなく、エンダに成る前のハルを思い出させて、元の心をざわつかせた。タロも元の肩の上で、心配そうに覗き込んでいる。

『焦んな……大丈夫だ』

ボタン

建物が軋む程に扉を開けると、受付に駆け込んだ。

『早くハーブを焚かねえと』

しかしそこに店主の姿はなく、代わりに何かを打ち付ける音が響く。カウンターから覗き込むと、奥でガタイのいい親父が、木槌を振りかざしている姿が見えた。

「あ？　ここ宿屋だよな？」

親父は一心不乱に、手元の錆びた剣を伸ばしている。しかし作業に集中しているのか、元の存在に全く気づいていない。元は店の奥に

向かって叫んだ。

「親父！！ 部屋を一つ用意してくれ。んで、ベッドにこのハーブを焚いてくれよ」

そう言いながら、小さい包みをヒラヒラさせた。店の主人は、元の声にも顔を上げる事無く、

「あんちゃん、ちよつと待ってくれよ。今、そころじゃ無えんだ。いくつもの町を潰した獣が、ここに向かっていているらしいのさ。その対策で町は大忙しなんだよ。」

くそっ！ エンダは来やしねえし……何が救いの民だ。俺らじゃ、どうせ勝てっこねえが、おめおめやられる訳にはいかねえ！。てか、旅の人、死にたくなかったら、町から出た方が身の為だぜ！」
そう答え、ガンガンと木槌を振り続けている。作業を止める気配が全くしない。確かに親父の言葉通り、町の人々の騒然とする様は、宿の中に居ても分かる。

「ゴホ……」

意識が無い中、時々苦しく咳き込むハルを横目に、元は焦る気持ち在必死で押え込む。

「あー？ その獣ってザツツケルオンの事だよな？ 奴は俺達が倒したからさ、

だから、早く部屋を用意してくれよ！」

元の言葉で、ようやく店の親父が手を止め、ポトリと木槌を落とした。元を見据えたまま、ガバツと立ち上がると、カウンターに駆け寄り足早に言葉を繋ぐ。焦る気持ちが高鳴り過ぎて、足元やら壁やらの道具を全てなぎ倒していた。

「マジかよ！？ あんたエンダか？？ いやいや、今までに何人ものエンダがやられた獣って聞いたぜ？ ガセだったら……」

親父の言葉に、元は心底疲れた顔を浮かべ受付の机を叩いた。

「お？ 何だ！？ クレームなら後にしてくれ」

親父の呆れる声を聞きながら、掌を広げた。その掌から深緑の色を湛えた宝玉が、ゴロリと転がったのだ。その転がる石の動向を、力

ウンターに顔を近づけ目で追っていた親父は、

「これ……は？ 宝玉？ ザツツケルオンの？ ……確かに、おふれに出ていたその色のようだが……」

こんな姿になっても恐ろしいのか、恐る恐る近寄って、宝玉を覗き込んでいる。

「なあ！ 分かったら早く部屋！！ 早く用意してくれよ！」

「あ……ああ」

宿の親父は言われるままに、部屋を用意し（ハーブも焚き）、慌てて宿を飛び出して行った。駆け出して行く親父の足音を聞きながら、「全く、あんなペラペラに伸ばした剣で何が出来るんだい！？」

親父が必死に打ち付けていた剣を思い返し、溜息を吐いた。獣によって命を落とす犠牲の多くは、この世界の民が居住地を離れない事によるものだ。その為エンダは、獣が町に到着する前に、倒さなければならなかった。

『逃げりゃーいいのに。てか、逃げよーよ。……何故戦えない獣相手に』

同じ地に留まらないエンダには、そんな民の行動など理解出来ない。何とか守る事が出来た町の様子を落とす、暫し元は物思いに耽るのだった。

第5章 And to a Fight - 9

元はハルをベッドに寝かせ、ハーブが立ち込める部屋のソファにドサツと腰かけた。

「疲れた〜」

元は、親父が用意したお茶をすすると、ようやく戦いから解き放たれた気になった。宿屋の親父は余程焦っていたらしく、テーブルの所々にお茶が溢れこぼれている。そんな慌てぶりに、フツと笑った。ベッドの縁で、タロがハルの顔を覗き込んでいるが、当分目が醒める気配はない。

「無茶しやがって……」

ハルの無謀な狩りは、今に始まった事ではない。戦いの度に、身を削る攻撃を仕掛け、有効と判断すれば何度でも反対魔法を使った。その度に、こうやって宿に駆け込み、ヒーシャを癒すハーブ「センス」を焚く……今まで何度繰り返しただろう。

「すんなって言うてんのに……何度言っても、魔法で攻撃する事は止めねえし……。どうしたもんか」

ハルの特異な能力が著しく向上したのは、今の戦い方によるもの大きい。(勿論、人知れずトレーニングを繰り返し、努力している事も知っている)

体力、スピード、瞬発力、そして魔法。戦士でもないヒーシャが、獣と直接対峙するなんて聞いた事がない。獣を熟知するハルの戦略は、攻守共に高い成果を上げた。でも、と元は思う。

「こんな事続けていたら、いつか死ぬぞ……。獣の腕を伝って額を直接狙うなんざー……」

元は思いきり肺からフーと息を吐いた。ハーブのセンスによって、自分の疲れた体も癒されていく。ハルの無謀さは褒められたものではないが、あの戦闘センスには、正直いつも驚く。

「お前のそれは、天性のもんか？ 瞬時に一番効果のある戦い方を

識別して、自分が描く狩りに獣を誘導する。それに加えて、攻撃に転換するあの素早さ。

うん、それは確かに認める。こいつだったら、マジでいい戦士になっていただろう……。しかし所詮ヒーシャだ。直接攻撃の能力の低さから、あんな危険な行動に出ざるを得ない。一度反対魔法を使っちゃまうと、後は使い物にならねえ。ひどい時には気絶しちゃまう。

俺が戦いの中で倒れたら、俺らパーティは全滅だぜ？」

そう、独り言のように呟いた時、

「すまない。あの戦い方が一番効果的だと思ったから」

ハルの消え入りそうな、謝罪する声が聞こえてきた。元は一人言を聞かれた気まずさがあったが、お茶をテーブルに戻し、すぐさまベツドに駆け寄った。

「大丈夫か？」

一度目を閉じ、そしてハルが答えた。

「慣れてきたのか、前ほど辛くはない」

ハーブが焚かれた中でも、中々回復しないのだろう。ハルの顔は青白いままだ。そんなハルの顔色を覗き込み、

『ウソ言いやがって……』

そう思いながらも、「そうか」と元は答えた。

「もう少し休みな。目が覚めたら、飯食いに行こうぜ」

元の言葉を聞いて安心したように（元にはそう見えた）、ハルは静かに目を閉じる。眠りに就く寸前に、寝言のように呟いた。

「食事……先に行ってくれ」

そして、また深い眠りに落ちていった。

結局ハルが目を覚めたのは、次の日の正午だった。突然スイッチが入ったかの様に、ムクツと起き出し、シャワー室に籠った。隣の部屋で待機していた元は、ハルが起き出した気配を感じ、ハルがシャワーを浴びている間、汚れた服の洗濯を終えた。ベランダに大

量の洗濯物を干し切った時、ハルが軽い感じのワンピースに着替え、シャワー室から出てきた。

狩りでついた泥を洗い流し、すっきりしたハルに向かって、元は不機嫌そうに文句を告げる。

「なーにが、慣れてきた、だ！ 前より、ずっとひどくなってるんじゃないか。初めは三時間程度だったのに、今回なんざ約一日だ。もう、二度と反対魔法は使うなよ！」

プリプリ怒る元の横をスツと通り過ぎ、タオルで長い髪を乾かしながら独り言の様に答えた。

「……だから、先に食事をして来いと言ったのだ」

ハルは包みの中から、皮で編まれたブーツを取り出し、スリッパから履き変える。体力が戻れば戻ったで、淡々とそんな憎まれ口をきく。元はギリギリと歯ぎしりをする、

「ち、げーよ！！」

腹が減っているから言ってるじゃねえ！ いつか死ぬぞって言うてんだ！」

仁王立ちする元の横を再度さらりと横切り、一度だけ振り向き言った。長い髪がふんわりと揺れ、髪から花の匂いが立った。

「待たせたな。食事に行こう」

何を言っても暖簾に腕押しの間答に、悶絶しながらも、ハルの後ろをブツブツ文句を言いながらついて行く。ドアの近くに駆けていたカーディガンを取ると、

「おいっ！」

と元は呼び止め、バツと投げつけた。ハルは上着を羽織ながら、そっと礼を告げた。

「ありがとう」

元はハルの言葉にそっぽを向きながら、「フン」と、鼻を鳴らした。ハルが目覚めます……こんな当たり前の遣り取りが、当たり前で無くなる……そんな日が来るかもしれない。このまま目が覚めないのではないか、ハルが倒れる度、そんな不安に駆られるのだ。こい

つには「パーティ」の一員として、行動しなければならないという
思考が欠落している、そう元はブツブツと呟く。
『人の気も知らねえで……』

第5章 And to a Fight - 10

町の飲食店は、人々の驚きと啞然とする感情が入り乱れ、俄かに騒然としていた。視線の中心は元とハルの二人で、そんな人々の視線など気にもせず温かい食事を堪能している。口に頬張った肉を、飲み込むのもそこに、元が叫んだ。

「おばちゃん！ 鳥の丸焼き二つ、モリモリサラダ、セルニノのスープ二つに、魚の香草揚げ、魚貝のパエリア二つ、ん〜と、取り敢えず握り飯二〇個……んでネビール二杯。急いでね！ あっ、全て大盛りで！！ 頼むよ〜」

おばちゃんと呼ばれた女将は、元の注文が入る度にビクリと体を揺らす。そして何とかグルリと振り返ると、「は、いよ。ちょ〜と待つて下さいね」引き攣った笑いを元に向けた。元達は、店の全てを食い尽くさん勢いで、食事が運ばれる端から、箸を付けている。今や厨房は元達の注文に大混乱し、罵声が飛び交っていた。

右手におにぎりを持ち、左手にメニューを掲げながら、

「他に何か食べたいものあるか？」

元が口一杯に頬張り、幸せそうな表情を浮かべハルに問うた。時折「あゝ幸せ〜」だの「あゝ旨え〜」だの感嘆の声を上げている。ハルはハルで、美味しいのかそうでないのか分からない表情のまま、食べ物に運び「元に任せる」と小さく答えた。店に居合わせた客らは、次から次へと繰り返される注文に、

「何か見えているだけで、腹一杯だな」

そう言いながら、注文を取下げ始めている。どちらにしても厨房には、他の注文を受ける余裕は無い。豪快さは元だが、ハルも静かに且つ早いスピードで、端から平らげていた。

全ての食べ物がテーブルから無くなった時、元が頬を赤く染め幸せな表情浮かべ言った。

「はあー……食った。久々の食事は、やっぱ最、高だな。ま、急に

腹一杯食べると、身体に悪いから、今日は腹八分目にしておくかあ」
「そうだな」

ナプキンで口を押さえながら、ハルも頷く。異世界の民、エンダ達の言葉に店の者達は、一斉にどよめいた。

「もう米一粒さえも無いよ……」

そう店主の嘆く声が、厨房に低く落ちた。

「通常はちよつとでいいのに、戦いの後は腹が減るよなあ」

「ああ」

「てかさ、この世界の良いところは、飯が美味いつて事だよなあ」

「ああ」

「だよな、これで飯が口に合わなかったら、目も当てられんな！
楽しみつていたら、飯位じゃねえ？」

「そうでもない」

「マジ？　そうそう地域特有の特産品があるのも、旅に醍醐味が増すっていうもんだよな」

「ああ」

「知ってるか？　ここの特産は、名牛だぜ！？　丸焼きが旨いんだつてさ、後で喰おうぜ」

「そうだな」

「でもさ、もつと観光も充実してりゃーイイのにつて思わねえ？」

「そうでもない」

「マジでえ？　たく、何が楽しみで生きてんの？　もつと娯楽とかさ、必要じゃん？　生活の活力つていうかさ。それに情報が本ばかりつていうのもどうかと思うよ。この世界は進化がないよなあ。原理が違うのか、機械化つていうのに限界があるんだよなあ……」

「お前は、もつと本を読んだ方がいい」

「……無理」

ほぼ一方的に元が捲くし立てるのだが、こんな会話が延々と続く。狩りの後はいつもこうだ。お茶を飲みながら、ゆったりとした時間

を共有して過ごす。暖かい日差しが店内に差し込み、少し眩しい。ハルの膝で、タロがうとうとしている。そんなタロを、優しくハルが撫でている……元はこの光景を見るのが好きだった。

こんな空間でお茶を飲んでみると、昨日の戦いが夢みたいに見える。二人で食事を摂る。それは狩りが成功した、死なずに生き延びた。その実感を得る為の大切な儀式だった（と、少なくとも元はそう思っている）。

ハルもこの時間だけは、本を読む手を休めた。元には、それが単純に嬉しくて仕方がない。

その時、二人への関心とは別の場所で、どよめきが走った。周囲の出来事に、一片の興味がない二人は、

「海を越えるタイミングはどうする？」

これからの旅について話しあい、「もう少し後じゃねえ？」なんて話をしている。その注目を集める主が元の隣に立った時、初めて二人は顔を上げた。

「不躰で申し訳ないが、ザツツケルオンを倒されたエンダ殿で、お間違いないか？」

小奇麗にした男が、二人の従者を連れて声を掛けてきた。

「町長！」

店の人間が声をかける。お辞儀をされたようなのだが、恰幅が良すぎて、そうは見えない。どうもお腹でつかえているようだ。

「エンダ殿、この度は、この町をお救い頂き……お礼申し上げます」

「救う？ 何の事だ……瞬間そうポカンとした表情を浮かべた元は、『あー、今回の狩りは、獣に狙われていたこの町を救う為だったわけ』」

すっかり本来の目的を忘れていた元は、先程浮かべた表情を何とか取り繕いながら、

「お礼を言われるまでもない。別の依頼で片づけたまでです」

そっけなく答えた。そもそも自分達は狩りに見合う報酬を受け取っ

ている。命を掛けているとしても、自分達に与えられた使命を全うしているだけだ。

ハルはそんな社交辞令に全く興味がない様子で、店にお茶の催促をしているし、タロはタロで、クハーと欠伸をしながら、ハルの膝で丸くなっていた。

『こいつら本当に自分の事だけだな……』

元もママな方ではない。しかし、自分よりもマイペースな奴らのせいで、多少ママに動かざるを得なかった。

『こんな時、取り計らうのは必ず俺の役目だよ』
心の中で舌打ちした。

「いやいや、エンダ殿がおられなかったら、今日にもこの町に到達し、この町は全滅していた事でしょう。」

エンダ殿の数は限られている。数多く存在する獣の中から、あの獣の契約を交わして頂いていた……それこそが奇跡です。本当に助かりました。何かしらお礼をさせて頂きたいのですが」

「いや、本当に……」

「いえ、是非！！ 町に情報が届くのが遅れて、何の痛みも被っておりません。それでは、我々の気が済まないのです」

町長の申し出に、流石に無下にも出来なくなり、元はスツと立ち上がった。エンダは獣を倒す生き物だと毛嫌いしている人間も居る中、町長の申し出は大変に有り難い。しかし正直面倒なのだ。エンダは、この世界の民との接点を、極力避けていた。

「町長、お気遣いありがとうございます。しかし、我々は使命を果たしただけです。どうぞお気になされぬよう……」

「しかし……」

それでもと食い付く町長に、ハルが珍しく口を挟んできた。

「金是要らん。あの獣の宝玉があるからな。我々は十分過ぎる報酬を得ている」

バサリと切り捨てる言葉に、「そうですか……」と意気消沈をして町長が頂垂れた。しかしハルは、話は終わっていないと言わんばか

りに、言葉を繋げていく。

「話は逸れるが、町長殿は書物など集めておいでか？」

「だから声を掛けたのか……」

ハルの思惑に、元は呆れながらも動向を見守る。ハルが積極的に行動を起こす事は稀で、大概が情報や書物に関するものだった。

「え、書物ですか？ あ、あゝそうですね、歴史やらなんやら先代が集めていた本はあるようですが……私は興味がないもので、書庫に眠っておりますな」

町長の言葉に、ハルの目がギラリと光った（そう、元は思った）。むしろ、獲物を狙う獣バリの鋭さがある。

「ふむ。町長殿のせつかくの申し入れ、無下にするのも……。そうだな、金はいらんが……町長宅で食事を振る舞って頂く位なら、なあ元」

「なあ元……て」

ハルの言葉に、町長は顔をパアと明るくし、元の手を握り締めた。
「その様な事で宜しければ、是非！ そうだ、町の者も集めましょう。存続の危機を救って頂いたのです。今夜はお祝いですな。夜通し祝いましょうぞ！！」

町長の言葉に、周りの人々も歓喜の声を上げた。民の嬉しそうな声を聞くと『……断らなくて良かったかもな』そういう気持ちになる。元の満たされる気持ちとは裏腹に、

「素晴らしいご提案だ！ 町長のお気持ち、有り難くお受け致します。そうだ！ 今からお邪魔しても宜しいですよね！」

ハルがグイグイと話を進め始めた。

流石に準備が出来ていないので、とやんわり断られていたが、
「書庫にありますのでお構いなく。むしろ出入りしないで頂きたい」
攻防戦の末、ハルが結局図々しく押し切った。何一つ相手の都合など聞いちゃいない。

「おいっ！ 少しは遠慮しろよ！」

ハルのあまりの強引さに、元がこっそり耳打ちをする。その言葉に、

「よもや断るつもりじゃないだろうな」と眉間に皺を寄せながら、
「何を言う。相手が是非にと言っているんだ。町長の顔に泥を塗る
つもりか？」

それに、個人宅の書庫には流通していない書物も多い。民の家にな
ど、滅多に入れん。この機会を逃す手はない」

当然の様に持論を正当化し、言い切るハルに、

『いやいや、本音は「それに」の部分だけだよな？　　ってお前、い
つもそうじゃん』

もう一言、言いたい気持ちをグツと押さえた。ハルの旅の目的は、
世界中の本を読む事に違いないと元は思う。今にでも町長を引っ張
って行きそうな勢いのハルに、小言を言う事を諦めた元は、

「俺は一度、宿に戻るぞ」

何とかそれだけ伝えたのだった。

第5章 And to a Fight - 11

話が済むと、ハルは町長達を急かすように店を後にした。町長の大きな体が左右に揺れて、後ろ姿はダルマの様だ。お付きの者達が、あたふたと慌てて後ろを付いて行く。

その後ろ姿を見送りながら、元は深い溜息を吐いた。

「全く……招かれたっていうのに、あんな服で出席するつもり？」

最悪バトルドレスでもいいけど、やっぱりそれなりのかっこするべきつしょ。たく……信じられねえ。……おっと、そうそうタロの蝶ネクタイもいるよね」

ブツブツ言いながら、元は店の女将を呼んだ。

「テイクアウトで、店にある鳥の丸焼き全部ね」

元の言葉に呆れ顔で

「もう水しか売れるものがないよ。ていうか、もう店仕舞いだからそう断られた。そんなに食べたつもりがないのだろう、元はあからさまに「ええ??」そう驚いた顔を浮かべ、

「もう!？」

思わず口から本音が出てしまう。片づけを行っていた従業員達全員にジロリと睨まれ、「あれ？」と、居づらくて早々に店を後にしたのだった。

「うーん、だつてさ、俺達だけ美味いもん食う訳にはいかんだろ」

昨日とは変わって良い天気、町は活気に溢れている。夜の祭りは盛況になるに違いない。その時の人々の笑顔を思うと、自然と鼻歌が出る。昨日ザツツケルオンを狩った事を伝えてからは、遅くまで騒然としていたが、今は随分と落ち着きを取り戻していた。

「良かった、良かった」

そう鼻歌交じりに、中央に歩みを進めると、幸いな事に賑わう市場を見つけた。大道芸人が至る所で芸を披露している。民族調の音楽

は、町の雰囲気を一層賑やかなものにしていた。

「お！」

巨大な牛を一頭、丸焼きにしている屋台が目飛び込む。周囲には肉の焼けた香ばしい匂いが漂い、「腹八分」の元の食欲をいい具合に触発する。

「ウヒヨウ、これが名牛かあ。超、旨そう！」

丸焼きを前に、元はジュルリと唾を飲んだ。

『やっぱり特産品はいい！！ 気分が踊るぜ』

元はそんな事を考えながら、牛の品定めに入った。

「らっしゃい！ あんちゃん、どの大きさに切るかい？」

でかい出刃をクルクルと回しながら、屋台の店主が勢いよく声を掛けてきた。元は指で顎を擦りながら、

「んーちったゝ小さいが……一頭丸ごとくれ。あ、切らずにそのまま。おっと、包まなくて良いから」

「へ？」

あんぐりと口を開けた店主に金を渡すと、元は肉汁が滴る丸焼きを串のまま肩に担いだ。

「なんだい、兄ちゃん。今からパーティかい??」

怪訝そうに問う店主に、元は「大喰が居るんでな」そうニヤリと笑った。

町の外れには、大きな檻が三つ用意されている。ある程度規模が大きな町には大概ある風景で、獣専用の檻だ。町に連れて入る訳にはいけないので、ここで預かってもらうのがこの世界のルールである。ギヴソンレベルの獣であっても壊れない檻は、エンダに重宝された。

町に立ち寄れば、毎回こんな狭くて貧相な檻に入れられる。プライドが高いギヴソンにとって、不名誉極まりない扱いに、いつもの如く暴れたのだろう。檻が少し凹んでいた。しかし壊すまでは至らないようで、荒い鼻息が先程までの興奮を物語っていた。しかし元

の姿を見て落ち着いたのか（どうなのか元には不明だ）、大人しく元をジッと見ている。

「おら、食え」

元はそう言いながら、屋台で買った肉の塊を投げ入れた。ギヴソンは思いがけないご馳走に、ギラギラ涎を流しながら喰らいつく。その様子を見ていた元は、檻の近くにドカツと座り込み、二カツと白い歯を見せた。

「はは、やっぱり逃げなかったな」

少し嬉しそうに呟いた。戦いの度に手綱を離しているのに、いつの間にか戻って来るのだ。決して、すり寄るわけではないが、この獰猛な獣は元の傍を離れようとしなかった。

……信じられないが、今では元を飼い主として認めているように感じ始めていた。

他のエンダからは、寝首を狙われていると言われる事もあったが、そのチャンスはいくらでもあった筈だ。命からがら生き延び、半分気絶している二人を町に運んでくれた事も一度や二度ではない。

物凄い形相で、一心不乱に喰らい付くギヴソンを見ながら、元はボソリと呟いた。

「……あゝあ、お前がもうちょっと可愛かったら、なああ」

元は本当に無意識に、本音が口から漏れた。その瞬間、ピクンとギヴソンが反応し、鋭い眼光が元を貫く。思わず元は、頭を下げた。

「あ、いや……、その……ごめん。えっと、ごめん」

第5章 And to a Fight - 12

ハルは、テーブルの上に本を高く積み上げ、片端から目を通していた。

「……やはり歴史書は全て同じか」

期待していなかった結果だが、ハルは溜息交じりに呟いた。しかし、諦め切れず積み上げた本に手を伸ばす。テーブルの下には、読み終えた本が次々に積み上げられていた。

左に積まれていた本を手を取った時、

「え？」

その本から感じる魔力に、手を止めた。それは今にも消えそうで、思わず自分の魔力で補うようにギュッと抱きしめる。ハルはまだ微かに残る魔力の感触を確かめながら、ゆっくりと捲りながら、一枚一枚丁寧に、そして慎重に目で文字を追った。本は五〇ページ程の厚さしかなく、表紙も厚紙で作ったような代物だ。重要な事由が書かれている書物……そんな印象は到底感じさせない。

しかし内容を読み進めるうちに、ハルの手が止まった。

「……これは一体？ どういうことだ？」

ハルは最後の一枚を読み終わった後も暫く考え込み、書庫には沈黙が静かに流れている。カビ臭い書庫の中に、夕暮れの赤い光が差し込み眩しい位だった。

夜半過ぎから、町の至る所に灯りが灯り、獣の脅威を回避した町は、お祭りムードに酔いしれた。町長の家の大広間では、弦楽器の音楽が奏でられ、人々が軽やかにダンスを舞う。

「ハル！ まだ本を読んでんのか！？ もう宴は始まってんぞ。ほら、持ってきてやったから、これに着換えろよ」

ハルは、元からフンワリとした春色のドレスを手渡された。そう手渡す元も、小奇麗に礼服を着こんでいる。あの男臭い荷物のどこに、

こんな服を仕込んでいるのだろう。押しつけられたドレスに、ハルは眉をひそめ、

「バトルドレスで良からう。礼服の代わりになる」

心底嫌そうに答えた。元は想定内の返答に、

「駄・目・だ！ エンダとして招かれたんだ。これが礼儀ってもんだ！ 特にお前のバトルドレスは、公の場に相応しくない。スパッツにブーツだなんて、絶対にダメだ！！」

頑として受け入れる隙がない。いつもは豪快でガサツな元だが、礼節を重んじる性格で頑固だった。反してハルは、意識の範疇が元のそれと違い、元の思考が理解出来ない。もう一度異論を唱えようと口を開けたハルに対して、

「駄・目・だ！」

頑として聞き入れようとしない元に、深い皺を寄せながらも、ハルは深い溜息を吐いた。

「何だよ、溜息を吐いたって駄目だかな」

ハルの態度に、ブーと頬を膨らませながら、叱られた仔犬の様な表情を向ける。そんな元の態度に、もう一度溜息を吐くと、

「仕方がないな。今回は迷惑を掛けたし、その詫びだ」

ハルは体を反転させて、ドアに向かって歩き始めた。

「お、おい」

「着替えてくる。ついでに、タロの蝶ネクタイも、な」

そう答えると、春色のドレスを一度揺らし、ドアを開けた。

宴は主役の二人を取り囲み、人々が代わる代わる感謝の意を述べてくる。元が器用に応対し、何とかエンダとしての面目を保っていたが、とても宴を楽しむ余裕などない。

ハルは挨拶などにはお構い無しで、端から料理を片付ける事しか考えていない。元の恨めしそうな視線を物ともせず、大きな魚に手を掛けている。

楽しい宴は、終わる気配なく続く。

第5章 And to a Fight - 13

人の波が途切れると、元も参入して二人して丸焼きに喰らい付いた。そう言いながらも、元は普段以上に周囲に気を張っている。

「何だよ、俺にばっか押し付けやがって。ちつたーお前も相手をするよ！」

音楽に掻き消される程の小さな声で、元は恨み節を吐く。

「エンダの面目とやらを保ちたいのだろう？ 私には出来ないのでは」

サラリと答えるハルに、更に元は喰い付いた。恐らく周りの人々には、仲の良いエンダの二人に見えているに違いないが、会話は和気藹々とは言い難い。

「とやら、っていうな。分かるでショ？ 俺達が民と均衡を取らないといけない事位さ」

ハルは、こんがりと焼いた肉を淡々と口に運びながら、元を一瞥し言った。

「民に係るから、無駄な気遣いが必要になるのだ」

「~~~~あのなら……誰のせいだっつーの」

「私は満喫している」

ハルの言葉に、もうこいつに何も言うまい……そう元が更に肩を落とした時、

「楽しんでおられますかな？」

今日の宴を催した、町長が声を掛けてきた。元は口一杯に頬張った肉を、ゴクンと飲み込み、

「え、ええ、このような場を設けて頂き感謝しております。私達は義務を果たしただけですが、皆様のお役に立てて光栄です」

そう会釈をした。先程まで小声で愚痴を言っていた人間とは思えない程、そつなく答える元を横目に見ながら、

『私達の世界では、どんな奴だったのだろうな……』

そんな事を思ったりもする。常日頃からそれなりの場所であれば、その場所に適した礼節を行う事が礼儀だと、口煩くハルに注意を促した。旅の道中からは想像も出来ない姿を見ると、一つの人格で二つの人生を歩む運命の不思議さが身に染みる。

「いやはやゝ最近のエンダ殿は随分と品格のある方々ばかりで、我々も安心してこの世界を託す事が出来るというものです。最近ではエンダ殿に対する偏見も無くなりつつあり、町を統括する私も一つ肩の荷がおりますよ」

町長はホクホクと、満足そうに頷いた。町長の言葉に、元は真剣な眼差しで頷く。サラダのコーナーに行きかけたハルが、グルリと振り返り口を挟んだ。

「町長殿は、一世代前のエンダに会われたことが？」

ハルの手元にある料理の量に、驚愕の表情を浮かべながら、町長はウンと唸る。ハルは町長の話を聞きながら、料理を次々に口に運んだ。

「いえいえ、そのようなエンダ様がおられたと聞いた事があるだけですな。噂話で大変失礼だが、ピーターが無い、ケンタが無いなどと、訳の解らない事を言つては、暴れて手に負えなかったとか……」

事あるごとに、一昔のエンダの話は町や村でよく出る。言動や行動に問題があり、しかしこの世界を救う役割があり……随分とこの世界の人々と衝突を繰り返していたという。お蔭で民とエンダの間に深い溝が出来た事は、エンダの黒歴史となり、両方に厳しい制限が強いられる事となる。その事を思えば、クライアントとは円満な関係が望ましい。元の行為も、それに通じるところからきているのだろう。

「ところでエンダ殿は、この先のご予定をどのようにお考えですか？」

町長が話題を変えた。

「そうですね。二つ目の海を越えたいと考えております。もう少し先の話になりそうですが……」

元の回答に「こほん」と、町長が真剣な眼差しで言った。

「エンダ殿……。宜しければずっとこの町にいて下さいませんか？ 世界に散らばるエンダ殿が、命を掛けて戦っておられるのは百も承知です。が、しかし獰猛な獣は次々と増え続けている。数年前に比べると、人類が直面している脅威は、格段に増えております。しかも、獣の行動は神出鬼没……」。

ザツツケルオン程の脅威に直面したのは、今回が初めてですが、お二人がおられなかったら、確実にこの町は廃墟と化していたでしょう。この町にお二人が留まって頂ければ、何と心強い事か！」

町長の言葉は、もはや懇願に近い。獣に怯えて暮らす生活を虐げられる日々に、人々のストレスは極限に達している。特に今回は助けとなるエンダが、その刃に倒れた獣だった。人々の恐怖は図り知れない。

『……獣の進化が早い。本当に厄介だ』

エンダと獣、互いの進化が日々せめぎ合っている。獣に対する恐怖は、民のそれと一緒にだ。進化に追い付けなければ、昨日の敗者は自分だったかもしれないのだ。

町長の願いに、元は困惑した表情を浮かべながら答えた。

「町長の申し入れ……。大変ありがたく思っております。何とかお力になりたいのですが……。しかし、エンダは一つの場合に留まる事が出来ません。我々は、永遠に旅を続けるしかないのです」

元の言葉に、町長は落胆した表情を浮かべたが、二人の真剣な表情に、フウと息を吐き、

「そうですね。……エンダ殿が町に留まらない事も分かっていながら、ご無理を申し上げました。残念ですが、諦めましょう。大丈夫、もしまた危機が訪れたとしても、なあに、我々は何度でも立ち上がって見せますぞ」

申し訳なさそうに頭を下げる元に、町長は白い歯を見せながら、二カりと笑った。

笑う町長の言葉に暫し考え込んでいたハルが、声を掛けた。

「失礼を承知で聞くが……何故町を捨てない」

無表情（知らない人間から見たら、真剣な表情に見えるかもだが）で、本当に失礼な質問をするハルに、元は肝が冷える。しかし元の静止も聞かず、ハルは静かに問う。

「ちょ！ ハル！」

「これ程の町だ。女、子供も居る。……町を捨てるのも、一つの選択肢ではないのか？ 生きていたら、何度でもやり直せる」

ハルの言葉に、重々しく町長は頷きながら言った。

「エンダ殿のお言葉は至極もつともです。しかし何故でしょうか……育ってきたこの町を、どうしても、どうしても捨てられないのですよ。獣の存在が明らかになった瞬間に、町から離れる様に告知はするのです。私は立場上、皆を守る責任がありますので。しかし皆の選択肢に、町を捨てるという文字が出てこない。獣は恐ろしい……それなのに、ここが大事で、町を離れる事が出来ないのですな」

「そうか……」

そう呟いたきり、ハルは何も言わなかった。

「ははは、エンダ様から見たら、何を固執しているのだと思いでしような」

「人々の歴史が積み重なって町が形成されているのです。……おいそれと捨てられないのでしょうか」

元の言葉に、町長は頷き言葉を繋げる。

「エンダ殿、この地に見えられた際には、是非お立ち寄り下さい。

町中で歓迎致します！」

町長は恭しく頭を下げた。

第6章 Crossing the road 1

「この道は……？」

ハルが元の肩に手を添えた。二人は狩りを終え、町を目指し移動している最中の出来事だった。元はハルのサインに、林の中を疾走するギヴソンの手綱を引くと、ごついゴーグルをグイと引き上げる。

「どした？ 町はまだ先だろ？」

ハルがスツと左横の茂みを指差す先には、三メートル程の茂みが続いている。

「茂みが何だつて？ 何か居たか？」

「道がある」

「道？ ま、けもの道ぐらいは……で、おい！」

ハルが元の肩からスルリと降り立つと、茂みに向って歩き出した。ハルの突拍子ない行動は今に始まった訳ではない。元はやれやれという表情を浮かべながらも、ハルの動向を見守っている。

ハルが茂みに手を掛けると、確かに道らしきものが出てきた。

「ホントだ」

ハルは体を翻し、スタスタと戻ったかと思うと、元の肩に乗り、脇道を指差した。

「行くぞ」

そう一言だけ言葉にすると、既に意識は脇道に向かっているのか、ジツとその先を見つめて動かない。ハルの指示に、元はドツと疲れに襲われた。狩りを終わらせた帰りな上、今回も楽に勝てた訳ではない。痛めつけられて疲れた体を、一刻も早く休めたい元は、不服の声を上げた。

「えゝなんで」

「何でとは何だ？」

「こんな脇道に何の興味があるってんの？」

自分の意向を理解出来ない元に、ハルは静かに言葉を繋ぐ。

「この道は地図に記載されていないにも関わらず、かなりの道幅で且つ舗装されている。道の痛み具合から見ても、人の往来が見て取れるだろう」

言われてみれば、脇道とは言い難い程の立派な道だ。

「……えつと、だから何？ こんな道位どこにでもあるっしょ。ていうか、道を全部把握してるのか？ いやいや、それよりも面倒くせーの。次に行く町で早くユツクリしたいんだよ。ほら、お前がめちゃくちゃ契約するもんだから、体が……」

グチグチ文句を続ける元に向かって、「早く行け」とだけ告げると、視線は脇道の先を見据えて動かない。勿論ハルに苦情を言った所で、聞き入れる様な耳をもつ奴ではない。ハルの性格を熟知する元は、大きな溜息を吐き、ギヴソンの手綱を脇道方向に引いた。

「て言うかさ、何て言うの？ 俺の意見って、全くもって考慮されてなくねえ？」

口を尖らせ、元が拗ねた表情を浮かべているが、ハルのフオーローは一切ない。元は更に口を尖らせた。

「へー結構栄えてんな！」

町は小規模ながら、多くの人々が行き来する活気がある町だった。

「うおー！ テンション上がるわあー。なあなあ、後で武器屋に行つていいか？」

通りには至る所に露店が出ている。新しい町が好きな元は、先程までの不満などどこ吹く風という様に、声を弾ませた。武器屋に行つて、カラーに行つて、旨い特産品を食べてーなどと、今にも駆け出しそうな勢いだ。

「これ程の町が地図に載ってねえってなあ。比較的新しい町なのかもな」

町の賑わいにキャツキャツと浮かれる元の隣で、ハルは町の様子に無言で目を向けている。元が露店の店に向かって、ハルを呼び止めた、その時だった。

「きゃー！」

すぐ目の前の女性が金切り声を上げた。そしてグルリと振り向き様に、

バシッ！

いきなり元の頬を平手で殴り付けたのだ。肌が弾かれる音と、只ならぬ雰囲気、周囲が一気に静まり返り、視線が一斉に向けられた。しかし一番呆然としているのは、叩かれた元、本人だろう。自分に何が起きたか理解出来ずに、頬を押さえボカンとした表情を浮かべている。痛みなどないが、女性に叩かれたショックで、思考が脳に達していない。元を殴った女性は、ブルブルと震えながら、怒号の一声を発した。

「この痴漢！ 今お尻、触ったでしょ！？」

目の前でギツと睨む女性は、仁王立ちで元を見据えている。黒髪がよく映えるはつきりとした顔立ち、目を見張る程美しい。眉で切り揃えられた前髪が、この女性の魅力を引き立たせている。体のラインに沿ったＴシャツに短いデニムのショートパンツ。スッと伸びた素足は、固めの黒革のブーツに良く似合っていた。

『エンダか』

ハルは二人の動向に目を向けた。

第6章 Crossing the road 2

「……は……はあ！？ 痴漢〜！？」

突然、痴漢呼ばわりをされて、ようやく頭に血が巡った。当然の事だが、今まで痴漢と呼ばれた事も、そんな卑劣な行為に走った事も無い。

「ああ！？ 突然殴った上に、言うに事欠いて、痴漢呼ばわりかあ？ 冗談じゃねえ！ 誰がためえの汚い尻なんか触るかよ！」

動揺と憤りで冷静さを失った元は、女性に向かって暴言を吐いた。元には珍しい事で、ハルがチラリと元に目を向ける。元の暴言に、女性の怒りは、一気にMAXとなった。元を見上げてギツと睨みつけ、腕をガシリと掴むと、

「何ですって！？ 痴漢した上に、開き直り？ ホントに最低な男ね！ でかい図体して、エンダの風上にも置けないわ！ ちよつとこつちに来なさいよ！」

「ちょ、だから俺じゃないって！」

相手が女性という事で、元も無碍に出来ずにいる。

「ミディ、本当に彼なのか？」

女性の隣に立っていた男性が、ミディと呼ばれた女性の肩を掴んだ。
「ほっ」

ハルがその男性の姿を見て唸る。端正でクールな顔立ちの中に、どこか少年の面影が残る魅力的な男だった。切れ長の涼やかな目元も、アッシュ色のナチュラルショートも、均整の取れた筋肉質の体も、更に男の魅力を引き立たせている。見た目は二十代前半といったところだ。

『ほっつて何！？』

ヒーローを彷彿とさせる眼前の男も気になるが、己以外に興味が無い筈のハルの反応に、元はピクリと眉を上げる。背中に身丈程ある

剣を背負っているという事は、元と同じ戦士だろう。しかし元にはない、洗練された美しさがある。二人から醸し出されるオーラは、周囲を圧倒していた。

「オプト！ こいつに決まっているでしょう！ 私のすぐ後ろに居たのよ？」

埒が明かない問答に、ハルがチラリと、陽の高さを確かめた。昼過ぎの太陽は、西に少し傾きを見せている。

「……」

いよいよもって周囲が騒然としてきて、大きな人だかりが出来始めた。エンダとして、こんな不名誉な事で目立つなど許されない。元はグルグルと混乱する頭で、如何にこの状態を乗り切るか考えあぐねていた。

「もう！ あんたのせいで、目立って仕方無いじゃない！ いいから、こつちに……」

グイツと引く女性の手を払う事も出来ず、しかし汚名を着せられたまま場を離れる事も出来ない元は、アワアワと動揺して動けない。

その時、ハルがミディの手をスツと取った。そして耳に付くほどの平坦な物言いで、

「この男は痴漢をする様な奴じゃない。お前の勘違いだ」

そう言い放った。やっと出て来た助け船に、元は安堵の溜息をつく。「ハル！」

突然手を取った少女に驚きながらも、

「な、なによ、仲間？ 痴漢の片棒を担ごうっていうの？」

取られた手を払いのけ、ミディはギツとハルを睨む。このような状況下で、冷静なハルの態度に、ミディは何故か息を呑んだ。

「少し落ち着け。腰回りに変化は無いか？」

ハルの言葉に、ミディはハッとした表情を浮かべ背中にも目を向ける。

「あ！ 無い！？」

腰に手を回し、顔面を蒼白とさせている。

「え……無いつて、ミディどうしたの？」

事の成り行きを離れて見守っていたのだろう。仲間と思しき二人が声を掛けて来た。

一人は色素が薄く透き通る肌を持った女性だ。クリリとした大きい瞳が緑の色に輝き、頬と唇に注す桜色の赤みが女性の儚さを際立たせている。フレアのミニのワンピースに、毛皮のショート丈のベスト、膝上まであるハイソックスに、ショートブーツが何とも可愛らしい。

「ミディ！ もしかしくなくても、宝玉無くしたとか？ マジで？ 一ヶ月分の食料だぜ？」

もう一人の男は、吊り眉の垂れ目に無骨なあご髭が良く似合う男だった。白のＴシャツに黒レザーのシャープなジャケット、そしてこれまたシャープなカーゴパンツにこの男のこだわりが見て取れる。

『随分と、華やかなパーティーだな』

元はイザゴザに巻き込まれている最中にも関わらず、目の前のパーティーに釘付けになった。しかしミディが発した一言で、元の怒りは頂点に達する。

「無くしてなんか……。もしかして、あんた達グルで……」

疑惑の視線を投げ付けるミディに、元は額に青筋を立てながら、怒りに拳を震わせた。

「て、てめえ、今度は盗っ人呼ばわりか！？ 俺らは誇り高きエンダだ。生きる為だとしても、その名を汚す位だったら死を選ぶぜ！」
元の怒涛に、あご髭の男が「ヒュー」と口笛を吹いた。

第6章 Crossing the road 3

元の怒涛にミディが体を硬直させる。その姿を見て、怒りに任せて怒鳴り付けた自分自身に、元は深いショックを受けた。茫然と立ちつくす二人に、周囲の沈黙が雑踏に変わる時、ボソリと聞こえた小さい呟きに元は耳を疑った。

「図書館が閉まるな」

この声は……、ぐるとハルに視線を向けると、バックから革袋を取り出す姿があった。

「ハ……」

元の言葉を待つ事なく、ハルはスツと袋の口を広げて見せた。「え、何？」突き出された袋の中を、居合わせたエンダ全員が覗き込む。

大きな声で揉めていたかと思えば、今は袋を覗き込む異様な光景に、町の民達は声を押し殺し通り過ぎて行く。一瞬の沈黙の後、顎髭の男が小さく感嘆の声を上げた。

「すっげえ」

大小合わせて十個近い宝玉が、光を受けて輝いている。深い色彩に、相当の獣であった事は容易に想像が出来て、目の前の二人に言葉を失った。ハルは、中から一つ取り出すと太陽光に宝玉を翳した。宝玉から反射される陽の光は、ハルの白い肌に、薄い紫の光を映し出す。

「お前達四人で一ヶ月分といえば、Bクラス前後だ。ちなみにこの中には、そんな小物は居ない」

元は『これだけ言えば、分かるだろう』……そんなハルの声が聞こえた気がした。聞き様によつては自慢とも取れる言葉だが、ハルの表情には一切の驕りや優越感はない。淡々と事実を述べているだけだ。しかし与える影響度を、ハルはよく分かっている……元は微動だにしないハルの表情に視線を落とすと、ミディが少し不憫になってきた。

「ッ」

ミディが言葉を失う横で、オプトが小さく頷き、元に向かって頭を下げた。

「すみません！ 明らかに当方の勘違いです。恐らく何者かが宝玉を盗んだ時に、ミディの体に触れたのでしょう。もしかしたら落としてしまったのかも知れません。どちらにしても、偶々後ろにいらつしゃったのが、お二人だったにすぎません。不快な思いをさせて申し訳ございませんでした！」

オプトの頭の下げっぷりに、元は毒気を抜かれた。清々しい……元はこういう人間が嫌いではない。

「いや……あゝもういいや。あんたが頭を下げる事じゃないしさ。俺らが犯人じゃないって分かってくれれば」

手を振りながら答える元の肩にガバツと腕を回し、顎髭の男が声を掛けてきた。

「いやゝ男だねっ、気に入った！ 俺、ナツメ、宜しく」

元に向かってニヤリと笑うと、手を差し出した。見た目もチャライが、言葉自体も軽い。

「あんた、百パー戦士だよな。うちのリーダーもそう。やっぱ戦士は筋肉の付き方が他と違うよな！」

ナツメの言葉に、元も「そうか？ って、自分だって前線で戦う系の職業だろ？」そう問い返す。

「まあねゝえ」

一気に溝が埋まる三人に、ミディが声を荒立たせた。

「ちょ、ちよつと！ オプトもナツメも信用するの？ この人達が犯人じゃないって決まった訳じゃ……」

「ミディ！ いい加減にしろ。この人達に、俺達の宝玉を狙う必要性なんて無いよ。それにそんな事をする人達じゃない」

オプトの言葉にミディは頬を赤らめ体を翻すと、「オプトの馬鹿！」そう言い放ち人込みを掻き分け姿が見えなくなった。

「ミディ！」

仲間の女性が直ぐに後を追った。ミディの事は、この女性に任せているのだろ。ナツメがすかさず声を掛ける。

「ララ！ 俺らカラーに居るから」

ララは片手を上げて答えると、色素の薄いゴールドの髪をなびかせ駆けていった。ララの後ろ姿を見送りながら、「……全く」オプトは深い溜息を吐く。何だかこのパーティの特色が見えたようで、元はポリポリと頭を掻いた。

「巻き込んですみません。お詫びをしたいのですが……。あれ？ここに居たもう一人の方は？」

いつの間にか、ハルの姿はどこにもない。言わずと知れた単独行動に、元は眉をピクリと上げた。

『そうだ。これこそ、うちのパーティの特色だ』

「あいつ、こんな事には一切興味がねえ奴なんで」

助けてくれた事には間違いない筈なのだが、何となくスッキリしない元は首をもたげた。

第6章 Crossing the road 4

ミディが居なくなり、ポツンと残された元は、グルリと周りを見渡した。町の民は元達を避ける様に、行き交っている。

「ハア……」

痴漢の汚名は晴らせた様だが、民に与えた不信感を払拭するのには時間が掛るだろう。今後この町を訪れるエンダ達を思うと申し訳ない気持ちになる。

「あの、もし良かったら」

表情を暗くした元が振り返ると、オプトとナツメの姿があった。ナツメがカラーの方向を指差しながら、

「一緒に飲もうぜ！ 仲間が迷惑掛けたしな」

そう声を掛けてきた。是非にと頭を下げるオプトに誘われ、元は二人と一緒にカラーに赴く。社交的な元と、同じく似た様なタイプの二人が打ち解けるのに、時間は然程掛らなかった。三人は、時には熱く時には馬鹿話を繰り返すと、数十分後には往年の付き合いかのような間柄になっていた。ハルと二人の旅を長く続けてきた元にとつては、同世代でしかも同性とくれば、内容一つとっても新鮮だ。

「お宅らのトコは、女の子が可愛くていいな」

元の本気ともつかない呟きに、ナツメが口の中の食べ物を吹き出した。

「ちょ、もう！」

オプトが飛んだ食べ物を持ちながら苦情を口にするが、面白くて堪らんと言わんばかりにナツメが笑う。酒が入ると陽気になる様で、大声で笑い転げている。

「元、あんただんだけいい人なんだよ。チカンの、泥棒達の散々言われたのにさ、可愛いつてどうなの？」

ナツメの言葉に、先程の失態を思い出し、元はポリポリと頭を掻いた。今は笑い飛ばしてくれる二人が有り難い。

「あゝそうなんだけど。ミディの気持ちも分かるし……痴漢に遭うって嫌じゃん？　っていうか、俺の対応も良くなかったしな」

元はそう言っと、グビリとネビールを飲んだ。ふとオプトと目が合うと、野菜スティックを一齧りしながら、ニツコリと笑っている。

オプトの仕草に、恋愛感情が欠落している筈のエンダ達（女性）が色めき立っている。

「オプト！　ここでもモテモテじゃん。見てよ、あの熱い視線！」

オプトの言葉に、元は耳を疑った。オプトは肩をすばめている。

「え……、俺達には……」

「そ、恋愛感情なんてもん、ねえよな。恋やら愛やらって、エンダになった途端、欠如する感情だよ。でもさ、オプトは別さ」

ニヤリと笑うナツメに、元は「ほおお」そんな呟きしか出て来ない。ナツメの言葉と、周りの視線にうんざりだと言わんばかりに、オプトは溜息を吐いた。

「エンダとして使命を果たす事以外に興味はない」

「まあねえ、好きになった処で、何も残せる訳でもねえしな」

微妙に二人の会話は噛み合っていない。オプトが眉間に皺をよせてナツメを見た。ナツメの言葉はエンダの宿命を指している。エンダは人を好きになる事も無ければ、子孫を残せる体でもない。エンダは、狩りをする為だけに存在している、と言われる由縁だった。

色々あったのだろうか……オプトの苦虫を嚙潰した様な表情に、元はそれ以上踏み込んで聞くのを止めた。溜息を吐いた後、オプトが気持ちを切り替える様に、言葉を繋ぐ。

「元のパーティーもいいじゃん。ハルさん？　あの存在感はちよつとないよ。クールだよな」

オプトの弾む声に、見る人が見たらそんな評価になるのかと思うと、元は目から鱗が落ちた。今日だって、発した言葉は二言位じゃ無かったか？

「え？　あれってクールっていう一言で片付けていいものなの？　あれはもう自己中通り過ぎて、世界の中心は自分だから邪魔するな、

って言っているもんだけど？」

元の必死な弁明に、「仲間の自慢は出来ないよな」そういう顔を浮かべている。

「でも元を助けてくれたじゃん。あの合いの手は良かったよ」

「いや」あれは、早く図書館に行きたいからであってさ……」

ゴニョゴニョと歯切れの悪い元に、オプトは優しい眼差しを向けている。その穏やかな表情に、元は暫し魅入った。

『何だろう……。この感じ』

元の視線に気づいたナツメは、ニカツと笑いながら言葉を繋げた。ジョッキの中は既に空で、カウンターに向かって手を上げている。

「気付いた？　うちのリーダーいい男だろ？」

元は思考を読まれていたのかと驚いたが、素直にナツメの言葉に頷く。

「ぶ、ぎゃ」はっはっは！　ホント、素直」

元の頷きに、もう堪らん……そうナツメが吹き出した。

「ナツメ、からかうなよ。俺なんてまだまだだ。あの宝玉、A、S級だろ？　しかもたった二人で、旅を続けているなんて。俺達も強くなってきたと思っていたのに……世界は広い」

目を伏せるオプトの瞳に、長い睫毛の影が落ちる。

「いや、狩りはさ、ランクじゃないよ。苦しめられている大勢の民を如何に多く救うか、だろ？」

「確かにそうだけど、S級の獣が一度現れると、一体どれだけの民が犠牲になるか」

「そうだな。最近はA級以上の獣が激増しているからな。たく、厄介だよ。ま、C級から知恵付けてS級になる獣だっている位だ。小さいのから潰すのも、一つの手だぜ」

目を輝かせ、語り合う戦士二人に、「戦士って、基本純粋な奴が多いよな」ナツメが軽い溜息を吐く。

「でさ」一緒に狩りに出よって話になってさ！」

借りた大量の本に囲まれたハルに、元が意気揚々と話し掛けた。積み上げられた本の束に、元はチラリと目を移したが、オプトの「クールだよ」その言葉を思い出し、視線を反らす。

「そうか……これがクールか……」

賑やかな宿の談話室で本に没頭するハルは、中々顔を上げてくれない。「なあゝて！」そこから更に十数秒が経過した時、読んでいる本に区切りがついたのだらう、ハルは一度顔を上げて、「行きたければ行けばいい。私はこの町で待機している」そう言い放った。

「えゝ一緒に行かねえのかよ」

「必要がない」

ハルのバサリと切り捨てる言葉に、一緒に狩りに出るつもりだった元は、不服の声を上げる。

「ええええゝ、一人かよ」

一人で他のパーティに入るのは、結構な気を使うものだ。俄かで組まれたチームなら、然程問題でもないが、パーティは狩りの形が出来上がっている。連携を巧く取らないと、パーティが全滅する事もある位だ。膨れる元を余所に、本のページを一枚捲り、ハルは視線を落とす。

「どうでもいいが、あのオプトという男、お前と同じタイプだ。中々客観的に己を見る事など無い。お前には、いい機会になるだらう」ハルの言葉に、元はブハッと噴き出した。

「俺とゝ？ 全然じゃん？ どっちかと言うと、俺力技多いし、あいつ技巧派そうじゃん？ 一緒に行くなら、その技盗まねえとな！」ハルはチラリと元を見て、「好きにしろ」そう言う本に目を落とした。その後は何を離し掛けても、ウンともスンとも返事が無い。「いいのか？ ホントに行っちゃうよ？ 当分帰ってこないかもよ？」

ハルと二人で狩りをする事に慣れている元は、大勢で狩りに出るリスクもそしてその逆も重々承知している。ハルの無反応に最後は、

「うゝ……じゃ、一ヶ月ルールな……」

そう言いながら、ドサリと椅子に座って剣の手入れを始めた。どんなに会話が無くても、一人で部屋に戻る気にはなれない。ハルの膝で丸くなるタロや、話し掛けるなオーラ全開のハルの傍が居心地いいのだ。そんな自分に、くははと元は苦笑いを浮かべる。

暖炉の炎がユラリと揺れて、薪がパチリと弾けた。

第6章 Crossing the road 5

次の日、早朝になると五人は町の入り口に集合した。既にオプト達の服装はバトルドレスに変形し、狩りに向かう意気込みがヒシヒシと伝わってくる。

「今日から一ヶ月、元が狩りに付き合ってくれるから、皆宜しくな」
オプトが皆に元を紹介すると、ララがちょこんと頭を下げて、

「元さん、宜しくね。私はララ、ヒーシャよ。守りは任せて！」
人懐こくニツコリと笑う。

「元でいいよ。ララ宜しくな」

ハルには無い愛らしさに（特に望んでもいないが）、元は新鮮な気持ち覚える。暫しの沈黙が流れ、

「ミディ」

オプトがミディに向かって少し強めに声を掛けた。ミディは昨日の感情を引きずっているのか、そっぽを向いたままだ。

「私はまだ納得した訳じゃないから」

棘がある物言いに、元は良心がチクチクと痛む。ハルは感情を引きずるタイプではないので、これはこれで新鮮だ……と元は思う事にした。

「ミディ」

少し呆れた様に声を掛けるオプトに、ばつが悪そうに「マジッカードだけど？」何故か疑問形で答える。元は特に気にした様子を見せず、全体を見渡し、

「元だ。職業は戦士。慣れていないメンバーが入って、戦いにくい事もあると思うけど、宜しくな！」

ニカツと笑う元に、ミディ以外は笑みが零れた。

「元、ハルさんは？ 一緒じゃないのか？」

オプトが首を捻り、声を掛けてきた。

「あゝえつと（必要がないって言ってたなんて言えねえー）体調が優れなくてさ？　今日は大事を取ってるよ」

「え、付き添わなくていいのか？」

「あゝ大丈夫、大丈夫！　あいつ、気を遣われんの嫌がんだ。ユツクリしとけば、治るから」

元はブンブンと手を振る。苦しい言い訳に、嘘が付けない元は、ダラダラと嫌な汗をかく。心配してくれるオプトにも申し訳がない。

「それで獣は、どんなタイプ？」

ララが大きな瞳をパチパチとさせて言った。

「これとこれだ」

オプトの手にはAレベルの獣の契約カード二枚が添えられていた。

「一匹は町から五十キロの地点に居る獣だ。道中狭い道もあるから「グッブル」での移動は考えていない。歩きで行こう。今回は元も

居るし、Aクラスに挑戦だ」

「役に立てばね」

「ミディ」

諫められたミディは、フンとそっぽを向いた。「元、すまないな」申し訳なさそうに頭を下げるオプトに、元は頭を振った。

「俺の事は気にすんな。あんま揉めると、連携が悪くなっちゃうからね」

元の言葉に、真剣な表情で頷くと、「よし、出発しよう！」オプトが号令を掛けた。

「濁竜」

ナツメの蹴りが獣の脳天を直撃した。獣の体が、地面にめり込む。獣のタイプによっては、真つ二つにする事も可能な技だろう。

「ち、切れないか」

技を見る限りでは拳士のようなのだが、ポケットに手を突っ込んだまま脚力のための攻撃にその実力は測り知れない。それにバトルドレ

スさえも、着崩し風になるとは、ナツメのこだわりは相当なのだろう。

「「蒼天乱舞」」

元とオプトが同時に技を仕掛けた。獣を挟んで向き合う二人の攻撃に、獣は雄叫びを上げ絶命した。

「やった」

ララがジャンプをしながらガッツポーズをする。白を基調としたスタンドカラーのジャケットに、フリルの広がったミニのスカートがふわりと揺れる。長い靴下と、ブーツも白だ。何ともララらしいバトルドレスだった。

「へえ、やつぱ、元やるねえ。うちのリーダーと同じタイミングって凄いいじゃん？ ていうか、技まで同じってなんなの？」

「いや……獣の属性で、皮に保護が掛かっている様な奴だと、通常の技だと切れないから」

オプトと全く同意見の元は、ウンウンと頷き、

「でも一緒じゃねえよ。オプトは一秒間に二十近い攻撃を行っている。俺はせいぜい十が限度だ」

元は笑みを浮かべたまま、脳内でギリギリと歯ぎしりを繰り返す。

「くそ、同じ技でここまで完成度が違うと、ちよつと悔しいっていうか……もつと技見極めねえと!!」

心中穏やかではない元と同様にオプトの心中も煮えたぎっていた。

「上位ランクに狙いを定めているだけはある。殺傷力は元が上……」

一太刀の鋭さと深さは比べ物にならない。何だ？ 居合か？」

戦士二人の苦悩を余所に、Aレベルの獣を問題なく倒しパーティは俄かに興奮していた。パーティの家計を預かっているミディも、そつと安堵の息をつくのだった。

第6章 Crossing the road 6

「地を這う地獄の炎よ 救いの無い罪深い魂に 永遠なる終焉を聞け 地獄の門」

黒と赤のバトルドレスに包まれたミディが歌う様に呪文を唱える。ミディのバトルドレスは赤の長いジャケットコートに黒のショートパンツ仕様だ。魔法が獣を包み込み、そして爆音と共に弾けた。いくつもの炎の球体は何十にも重なり合い、獣の周囲に地の底を揺らす重低音が響き渡る。

『……マジッカーの魔法って、迫力あるなあ』

黒魔術に慣れていない元は、ミディから派生した魔法にゴクリと息を飲んだ。ヒーシャの魔法が荘厳な音楽ならば、マジッカーの魔法は打楽器を打ち鳴らす感覚に似ている。

魔法の効果が終息に向かう頃、獣が消し炭の様に黒く小さくその姿を変えた。

「や、った……？」

今では原形を留めていないが、巨大な芋虫の姿で出現した時は、一瞬全員が一步後ずさった。ララは顔を引き攣らせながら、小さくガツポーズを決める。皆が安堵した時、オプトが厳しい叱責を飛ばす。

「まだだ！」

その声と同時だった。小さくなった消し炭がパツクリと真つ二つに割れたのだ。

「え？」

「孵化？ そんなタイプ！？」

皆がザツと戦闘態勢を整えた瞬間、獣は蛾の成虫の姿で空に飛び出した。

「まずい……！」

元が地面を一気に蹴り上げて、空を飛んだ。空中戦は何倍も分が悪

い。元は蛾の腹を狙って剣を振り被り、剣が獣を捉えた時、突如光の粒子が元の視界を奪った。クラリと意識が遠のき、攻撃は羽を掠めた程度だ。羽を傷つけられた獣は、飛行高度を一気に下げる。

「元！」

ナツメの渾身の蹴りが、獣を地面に叩き落とした。しかし元もまた、受け身が取れずに地面に強く叩き付けられる。

「動かないで、毒が回る！」

薄れゆく意識の中で、元はララの呪文を聞いた様な気がする。スウっと消えゆく自我が突然くつきりと鮮明になった時、目に映ったのは、手から光の花弁を溢れ出させたララの姿だった。花弁が元に降り注がれた時、体から毒素が抜けた。

「ゴホッ……サンキュ、ララ」

体に毒が回る感覚というのは、全く慣れない。おぞましい感覚に、元が一つ溜息を吐いた時だった。

「ギガ ヒュート」

ナツメの攻撃で、岩にめり込んだ獣が、岩を砕き空に舞い上がろうと羽根を広げた時、オプトの呟きが、元の耳にハッキリと届く。剣を抜いた、次の瞬間には獣が塵の様に消滅していた。

「……！」

元は膝を付いたまま、オプトの技に暫し動けなかった。

「元、どうぞ」

ララが革袋に入ったお茶を差し出す。皮の内部に特殊加工されている為、お茶は白い湯気を立てている。町に戻る道中での一時の休憩は、エンダ達の心をゆっくりと癒した。

「サンキュ」

元達が一緒に狩りを始めて、数週間が経過していた。今では元もすっかりパーティに溶け込み、強力な戦士を得たパーティは、狩りの精度を格段に上げた。

「やっぱ、戦士が二人居ると、狩りの安定感がパネエよな」

ナツメがホオと煙草を吹かすと、ユラユラと白い煙が立ち上った。
ナツメの言葉に重なる様に、ララが弾む声で答える。

「分かる！ 元が来てから狩りが楽になったもん！ 加えて、オプトの技の切れも格段に上がったみたいだよ」

二人の言葉に、オプトはキラキラと目を輝かせた。

「そうなんだ！！ 元の技の精巧さと言ったら！ スツと獣の体に吸い込まれていく様だよ。獣は切られた事すら、分かっていないんじゃないのかな？」

「嬉しそうだねえ。普通はさ、悔しがるもんじゃねえの？」

オプトの嬉しそうな表情に、ナツメがからかう様に声を掛けた。オプトはナツメの指摘に、ボリボリと頭を掻きながら、少し顔を赤らめる。

「悔しいさ、物凄くね。でも何倍も嬉しいんだ！ 元の技を見てみると、自分を冷静に分析出来る。こんな機会に出会えた事に感謝するね。反面、自分達も結構強くなっていたって思っていたのに、少しショックもあるよ」

オプトの素直な言葉に、元が苦笑いを浮かべた。

「今の差は、経験の差だよ。色んな経験を積みめば、その分選択肢が増える。俺もつかうかしてらんねえな。今回は俺にとってもいい経験になったよ。同じ戦士の技なんて見る機会なんてねえし。めっちゃ勉強になるんだよなあ。特にオプトの技ってさ、自分と根本が近いっていうか、技が比較しやすいっていうか」

その時、元の脳裏にハルの言葉が過った。

【あのオプトという男、お前と同じタイプだ。中々客観的に己を見る事など無い。お前には、いい機会になるだろう】

そうだな……そう元は深く頷くと同時に、ハルの洞察力に震えが来る。

『あの町中でホンの少し時間を共有しただけなのに、一体何が分かるんだ』

「でもさ、勿論Aクラス以上ってハードル高いけど、何となく感じ

掴めてきたばくねえ？ ホント、元のお陰だよな」

ナツメの言葉に、オプト達は自信に満ち溢れた表情を浮かべる。元は「俺じゃねえよ。お前らが凄いいんだって、そう言いながら、苦笑した。」

『自覚が無いって怖いねえ。特にオプトの奴、大地に水が浸み込む様に、狩りの成果を余すことなく自分の力に変えて行きやがる』

例えば元の強さは努力を重ねて、鍛練した賜物だ。しかし彼は違う。一言で言えば、エンダとしての素質だろう。

『こんな奴らが居るんだな……。たく、悔しいったら』

どんなに努力しても届かない絶対的な領域を目の当たりにしてしまったのだ。今は自分の力が上だが、いつか必ず抜かれる日が来る。しかし屈辱よりも、こんなに頼もしい人間がエンダとして戦っている事に、安堵と誇りを覚えるのも事実だった。

元が深い感慨を受けていると、

「元、俺達のパーティに入らないか？ ハルさんも一緒にさ」

「へえ？」

オプトの突然の提案に、元は素っ頓狂な声を上げた。しかしオプトの表情は真剣そのもので、ジツと元を見つめる表情に、元はどう答えていいものか、直ぐに返事が出来ないで居た。ナツメとララは微笑みを湛えて、元の一言を待っている。

「待ってよ、パーティの事なのに、勝手に話を進めないで」

すぐさま、ミディが異論を唱えた。

「ミディ……昨日皆で話し合っただろう？」

「でも……やっぱり私は嫌なの！ 勘違いしないでね！ この男が（この男っていう時点で深い溝を感じるが）煩わしいとか、ウザいとかって理由じゃないから！ 一つのパーティに戦士はともかく、ヒーシャ二人って……無駄でしょ？ 私はララ一人でいい」

「ミディ……」

ララが元とミディに申し訳なさそうな表情を浮かべた。ミディの言

う通り、ヒーシャはパーティに一人は必須だが、大所帯では無い限り複数人を抱える事はしない。やはり狩りで最重要視されるのは、攻撃力なのだ。流れる沈黙に、元が慌てて言葉を挟む。

「あ、いや！ オプトの誘いは、超嬉しいけど、俺ら二人が性に合っているし。あいつ団体行動が出来る奴じゃねえし！ てか、ララのきめ細やかなサポートは、あいつには無理だから」

元々受ける気がない誘いだ、パーティの空気に元はブンブンと両手を振った。

「元」

オプトが残念そうに声を掛ける。元はパーティに馴染んでいるし、狩りに慣れた二人が仲間に加われれば、狩りの成功率を格段に上げる事が出来る。リーダーとしてのオプトの判断は間違っていない。しかしララを仲間として大事に思うミディの言葉も無碍に出来ない事も事実だ。

「ハルはなあ、ヒーシャというよりも、もう参謀って感じでララとかぶりはしねえけど。多分ララが居たたまれなくなるな。……いやいやいやいや、そもそもあいつに他のパーティは絶対無理！！」

シンとなった皆の空気を変える様に、ナツメが明るく声を掛けた。オプトもララも気分を変えて、明るく勤めている。

「んじゃ、元との最後の狩りを決めに一旦町に帰ろうぜ！ 次はどうする？ Aランク？ それともA'行っちゃう？」

「きやゝA'？ 初の試みだよね！」

「でもさゝ元が居る内に、体験しておこうぜ！」

「言ってるゝ！ でも疲れたよゝ数日休ませてゝ」

「そうだな、ずっと狩りの連続だったから。三日位は休もうか」
オプトがニコリと微笑んだ。

「賛成ゝ」

ナツメとララが嬉しそうに片手を上げた。オプトが元を振り返り、申し訳なさそうに声を掛けた。

「元は後一週間だろ？ ハルさんと合流するのは。随分と待たせてしまったな」

「ああ、気にすんな。あいつは好きな様にやってんから。でも最後に皆にハルを紹介したいなあ！ 愛想が無くて、自己中で、無表情で無関心で、性格きつくて、強引な奴だけど、良い奴だからさ！」

真顔でハルを語る元の言葉に、ナツメがブハツと吹き出した。

「元！ それ全然褒めてねえよ」

「え？ 嘘、超褒めてんだよ？ ホントそんな奴だから」

「ギャハハ、俺ハルさんに言っちゃおうかなあ！！」

ナツメの言葉に、元は必至の形相で止めた。あの絶対零度の洗礼を受けるのは、俺だけでいい。

「いや、マジで止めておけ。あいつの無表情を目の前にしたら、誰だって固まるって」

元の言葉に、皆（ミディを除く）が、笑い声を上げた。

第6章 Crossing the road 7

休暇に入って三日目の朝、元はハルの部屋のドアを叩いていた。

「おい、居ねえのかよ？」

部屋からは全く反応が無い。結局この休暇中、ハルに会う事は無く狩りの成果も話せずに居る。

『そりゃー、一カ月間後に宿に居なかったら別々に旅をするって約束事はあるけどさ……。ちえ……。面白い話しが沢山あるのになぁ』

元がブツブツ文句を言いながらカラーの扉を開けると、相変わらず昼間から大勢のエンダでこった返していた。

「先に換金してくるから」

ミデイがカウンターに向かって体を翻す。

元がリストをバツと広げると、皆でどの獣にするか、頭を捻らせた。この瞬間が運命の分かれ道かも知れないのだから、真剣に成らざるを得ない。

「うゝん、A' って本気で強そうだよねゝ」

「ああ、でもこの獣だったら、ミデイとナツメが突破口を開いて、俺と元がトドメを刺す。ララは全体をフォローっていつもの作戦で行ける筈だよ」

「えゝこの獣は外したいな。あまりスピード能力が高いと、場所によつては不利だ。足場が悪いと俺の攻撃は半減するからさ」

「ていうかさあ、ナツメは拳も使えって。足場が悪いのなんて、十分に補えるよ」

元が呆れ顔で言う忠告に、ナツメは真剣な表情を浮かべながら、元を見据えて言葉を繋ぐ。

「駄目、それは俺のポリシーに反するから」

「なんじゃそりゃゝ」

元の言葉に、オプトとララが噴き出す。オプトがくっくつと、さも

可笑しいと言わんばかりに、
「年に二回位は見られるよ」

そう笑いながら補足を入れた。ナツメが拳で戦うのは、よっぽどの
獣と出くわした時だけらしい。

「オプトー言うなって」

ナツメが顔を赤らめながら、言うばやきに、思わず笑みが零れる。
こんなたわいのない時間も、後数日かと思うと不思議な気持ちに陥
る元だった。

「ちょっと！ それ私達の宝玉じゃないの！？」

その時、ミデイの怒涛がカラー全体に響き渡った。一瞬、皆で顔を
見合すと、オプトが立ち上がり、ボソリと呟く。

「あいつ、また……」

追って、三人も席を立った。特にララは心配そうな顔を浮かべ、駆
け足で中央に向かう。ごった返すエンダ達を掻き分け進むと、カウ
ンター前でミデイが、三十後半の男の首元を吊るし上げている姿が
飛び込んできた。

「……え？」

オプトが目の中の光景に、言葉を無くす。

「ミデイ！」

「オプト！ こいつよ、私の宝玉を盗んだのは！ 馬鹿じゃないの
？ ノコノコと現れて！」

「ミデイ、離すんだ……」

「オプト！？」

「この人、エンダじゃない」

「え？」

オプトの言葉に、ミデイは咄嗟に手を離すと、男はドサリと尻餅を
付いて激しく咳込んだ。

「まさか……」

元達はオプトの言葉に男を凝視し、一気に血の気が引いた。その瞬

間、カラーの雑踏が一瞬で消え、ザツと場に居合わせたエンダ達が一步後退さる。

「私……」

ミディの顔から血色が失せ、ブルブルと震え始めた。その間、俄かにカウンターが慌ただしくなると、エンダ達に緊張が走る。

「違う！ 私はそんなつもりじゃ……」

カウンターの従業員に向かって、ミディは声を震わせながら訴えるが、一人が縄を持ち出しカウンターから飛び出してきた。

「だから、違うつ！」

ミディが一步後退った。

「動かないで！」

店の従業員の一人が、震えながら叫ぶと、余計に場の空気を凍らせた。

「み、皆、落ち付け……」

女性の金切り声が響く異様な空気に、カラーの店主があたふたとし始めた。溢れる汗を拭う事も出来ずに、挙動不審になっている。

「待つ！」

オプトが手を差し伸べ、一步前に踏み出した時、

「ほう……これが、お前が盗んだ宝玉は。盗むリスクを負う割に、安いアイテムに手を出したものだな」

静寂に包まれたカラーに、抑揚の無い低い声が響いた。

「……ハル」

いつの間にか、ハルが男の前に膝を付く姿勢で座り込んでいる。元の呼びかけに答えず、ハルは男に淡々と話し掛けた。

「お前達民の中では、呪いを纏うと言われているような代物だ。何故手を出した？」

ハルの能面の様な表情に怯みながら、男は腰が抜けた様に動けない。「その男から離れなさい！」

従業員の手には、ナイフを掴んでいる者まで居て、エンダ達は見守

る事しか出来ずにいた。

「よりによつて、エンダから盗みを行ったんだ。何かしら理由があるのだろう？」

周りの雑踏など、全く意に介さない声は淡々と続く。抑揚の無いハルの声に、従業員達も固まった様に動けない。

「エンダにとつて、この石は己の命そのものだ。それはこの石に価値があるからではない。守るべき民の……お前達の命の重さと等しいからだ。その石の存在こそ、我々がこの世界に命を繋ぐ証。……教えてくれ。何故石を盗んだ？」

ハルの表情は変わらず能面のままだが、その言葉に男は額を床に擦り付けた。

「申し訳ございません！！ お金がどうしても必要だったのです！ 本当に申し訳ございません！」

皆一様に、この後の展開が読めず、ゴクリと息を飲む。それはエンダも、この世界の民も同じだった。

刹那、男の言葉を受けて、ハルは男を見据えたまま店主に声を掛けた。

「店主、この男はエンダの宝玉を盗んだ。しかし反省をしているようだ。このまま許してやってくれないか？」

カウンター越しにカラーの店主が、その大きな腹を揺らしながら、従業員に向かって手を伸ばす。

「あ……ああ、ぬ、盗みはいかん。エンダ様、確かにこの男も反省しているようだし、許してくれるかい？」

そう少し顔を強張らせながら、ミディに向かって問うた。

「勿論さ！ 誰だって間違いはあるよな！ いいよ！ 許す、許す！！」

ナツメがヘラヘラと笑いながら、ミディの肩を抱いた。当のミディは、顔を青く、体を強張らせたままだ。ハルはユツクリと回りを見渡し、

「騒がしたな」

そう言いながら、Aクラスの宝玉をゴトリとカウンターに置くと、未だに茫然と立ちつくすエンダ達に向かって声を掛けた。

「ここは私の奢りだ。楽しんでくれ」

ハルの言葉に、エンダ達の歓声がワツと上がると、カラーに陽気な声が響き渡る。

「お嬢ちゃん、太っ腹だねえ！！　よっしゃ、酒を樽でもってこい！」

「ねえちゃん、こっちにネビールとロブスター香草焼き！　後、アスパラポテトのチーズ焼きと、塩豚のペロンチーノ大盛り！」

「こっちの注文が先だ！　ビーフストロガノフにモリモリサラダと白レバーのパテ！　えーと、えーと……取敢えず何でも持ってきて！！」

様々な注文が飛び交う中、エンダ達の気遣いに目を向けると、元達はハアと深い安堵の溜息を吐いた。

「嬢ちゃん、上手いね、何とかまとめてくれて、助かったよ」

腹を擦り、溜息を吐く親父を一瞥すると、ハルはスツと立ち上がった。

「店主……困るぞ。カラーに町の人間を入れるとは。」

我々は民を意図的に傷付ける事は出来ないが、不慮に傷つける可能性はゼロじゃない。カラーは民と一線を画する唯一の場所だからこそ、エンダはカラーに集まるのだ。その場所に、民が紛れ込むなど、前代未聞だ。こんな状況でお前達に肅清されて、協会に突き出されたら堪らない。協会が関与してきたら、この店もただでは済まない。鋭いハルの視線と畳み込める物言いに、親父はしどろもどろに答える。先程よりも、大量の汗が噴き出していた。

「う！　こっちも気をつけているんだが。参ったねえ、町の人間が入り込むなんて思っちゃいねーからなあ？　でも穏便に済んで良かった、良かった！」

そう言つと、でかい腹を抱えながら親父はそそくさと店の奥に引込んだ。その後姿を、ハルは眉間に皺を寄せたまま目で追っていたが、目線を下に落とすと小さな溜息を吐いた。

第6章 Crossing the road 8

「あの……」

背後からの声に振り向くと、ミデイがララに付き添われて立っていた。目線を下に向けたままの姿で、

「あ、あの、助けてくれて、た、助かったわ」

たどたどしく礼を延べる。しかしハルは興味がなさそうに、間髪入れず厳しい叱責を飛ばした。

「お前の為ではない。飛び火で粛清の対象になるのを避けたただけだ。自分の主張を突き通すのは結構だが、相当の責任が付き添うのも事実。自身が負える範疇を見間違うな。お前を助けんとして、仲間までも対象にしたくなかったらな」

厳しいハルの言葉にも深いショックを受けたが、粛清という言葉に、ミデイがビクリと体を揺らした。そんなミデイを支えながら、

「助かりました！ ハルさん、ありがとうございます」

深々と頭を下げるララに一瞥すると、ジッと見据えたまま動かない。自分に目線を据えたままのハルにララは困惑気味に「あ……の……ハルさん？」そう声を掛ける。そんな三人の様子に目を向け、元はハルの存在にフツと肩の荷を下ろした。ハルを見ると無意識に安心する自分に、元は気づいていない。

「ハル、カラーに居たんだな。ナイスだぜ、いやマジでどうなる事かと。この世界の民に手を出したら、強制的に協会に突き出されちまう。俺達、民に対しては、潜在的に抵抗も出来ないからな」

元は冷や汗を拭きながら、ハルに声を掛けた。

「ミデイ、元の言う通りだよ。ホントに気を付けろよ。協会に連行されたエンダが戻って来たって話は聞かないんだからさ。翌日、カラーの死亡リストが上がったっていう、話まで聞くぜ？」

「……粛清って嫌な言葉だね。ミデイ、本当に良かった。大事にならなくて」

ナツメや、安堵の溜息を吐くララの言葉に、ミディは瞳を伏せる。
『本当に危なかった。……あの女の言う通り、自分だけじゃない、仲間まで対象にされるところだった』
仲間まで巻き込んでしまったら、そう思うと心臓の高鳴りは中々収まってくれない。連行される仲間を助けようとして、パーティ全員が肅清されたなんて話もよく聞く話だ。

「皆が無事で良かったよ。ハルさん、ありがとう」

オプトは心底安堵の表情を浮かべ、礼を述べたが、ララから視線を外したハルは、今度はオプトを凝視している。

「オプト、ここは騒々しい。外に出よう」

ハルが声を発した。二人はほぼ初対面だ。それなのに、その自然感に周りがドキリとした。ハルに導かれる様に、全員がカラーの外に出た。薄暗いカラーに居ると、時間の感覚が薄れるが、既に陽が高くなっている。

オプトを見据えながら、ハルはさも当然と言わんばかりに言葉を繋ぐ。

「助けた礼が欲しい」

「え？」

何故分らない？ という表情を浮かべるハルに、元はポカンと開いた口が塞がらずにいる。他人の為に尽力を尽くすタイプでもないが、見返りを求める奴では絶対にならないからだ。

「礼い？ ハル、何言ってるの？」

呆れた声で口を挟む元に一瞥した後、更に言葉を繋げた。

「お前達が一緒に狩りを初めてほぼ一カ月だ。その間、何故あの男は換金しなかったのか？ ま、換金すると言っても、民にとって手続きは容易ではないがな。不思議だと思わないか？ 一ヶ月もの間の今日という日を何故選んだのか」

ハルの言葉に、オプトはジッと考え込んでいる。

『……お似合いだな』

話の展開が掴めない元は、向かい合う二人に目を移しそんな事を考えていた（どうせハルの思考を理解する事は出来ない。導き出される結論を待つ癖がついている元は、二人の会話に気もそぞろだ）。醸し出される雰囲気、ミディやララの様な派手さはない。しかし、何故か視線が外せなかった。元はふと自分の全身に目を落とす。エ نداになって数年経つが、今まで一度も容姿を気にした事は無かった。

『…………』

「あの男が、計画的に俺達の前に姿を現したと？」
怪訝そうに言葉にするオプトに、

「さあな。偶然と言いきれば偶然なのだろう。しかし私はそんなに都合よく考えられない性分だな。そうは言っても、私は部外者だ。あまり表立って動きたくない」

あんなに表立って、事を沈めたくせに何を………… そう元以外全員が心の中で突っ込むが、誰一人口に出来ずにいる。今にもオプトの腕を掴んで歩き出しそうなハルに向かって、ミディが声を荒立たせた。

「ちよつと、オプトを巻き込まないで！ 行くなら私一人で行くわ！！」

「お前では役不足だ」

「な…………」

冷やかなハルの視線に、ミディは体をカッと熱くした。恩は感じているが、正直そこまで言われる筋合いはないだろう。思わずミディがグツと前に踏み出しそうになった瞬間、ハルの平坦な言葉が続いた。

「お前達、全員でパーティなのだろう？」

『お…………』

この言葉にピクリと全員が反応した。そんな中、元は皆を見渡し『こいつら、仲間意識高いもんな』そう頷く。

『全く、人を都合よく操りやがって…………』

元はハルの行動に深い溜息を吐いたが、ハルの思考の行く先がハッキリするまでは傍観する事に決めた。ハルの言葉に、オプトが頷く。「ハルさん、あの男が何故我々から宝玉を狙ったのか探ればいいんですね？」

「ああ、それでチャラだ」

オプトは一度息を吐き、スツとハルを見据えて言った。

「分かりました。仲間が粛清されるのを守って頂いたんです。どこまで解明出来るか分かりませんが、やってみます……ハルさん、最後まで見届ける為に、勿論一緒に来てくれますよね？」

探る様なオプトの言葉に、

「ああ、仕方がないな。……しかし一つ条件がある。何が起きても私の事に口出しするな」

ハルはそんな漠然とした条件を出した。

「え……と」

元の頭は状況についていけない。それはナツメ達も同じ事だ。

「ん、ま、よく分かんないけど、オプトが言うのなら、いいよでもさ、これからさどうすんの？」

ナツメの言葉にミディも「原因が私なら、仕方ないじゃない」そうブツブツと呟いている。ララは「オプトが決めたならいいよ」笑いながら頷く。

「えっと、これだけの町の規模だぜ？ たった一人を見つけるのは、結構至難じゃないか？」

元は訳が分からないまま、そう問うた。

「あれ？ そう言えば、タロはどうしたの？」

先程までの騒動中、確かにハルの肩にチヨコンと乗っていた筈だ。それなのに、今は姿が見えない。

「タロはあの男を追って行った。じきに戻ってくるだろう」

『追って行った？ いつの間にそんな芸当が出来る様になったんだ！？』

元は頭がクラリとして、よろめいた。どうやらハルとタロの絆は、

相当なものになっているらしい。

外に漏れる程のカラーの賑わいを余所に、夕口を待ち続ける時間が、無言で過ぎていく。

第6章 Crossing the road

そんな中、一人花壇の縁に座るハルを気遣い、ララがスルスルと近づいて行く。ララから人懐こい笑顔で話し掛けられたハルは、顔だけを上げた。二人が並んでいる姿だけ見ると、何と微笑ましい事か……目を向けた元は表情を緩めた。

『ララ、ナイスじゃん。まあた、傍若無人な態度とかとって、ララが傷つきそうで心配っちゃ心配だが、同性との付き合いも大切だからな』

こんな機会を狙って、元は敢えてハルから離れていたのだ。常日頃から、ハルは狩り以外に興味を持つものがあつた方がいいのではと思っていた。

「チャレンジャー……」

ナツメがボソリと呟く隣で、オプトはハルに目を移した。

「ハルさん、ヒーシャですよ？　今癒しの魔法はどこまで会得していますか？」

弾ける様に問うララに、ハルは言葉を発しようとしな。元から見ただハルは、ララにどう接しているのか測りかねているように見える。『ププツ、ララの人懐こさに無下にも出来ずって感じか？　ま、確かに今までに居ないタイプだね。いい、少しは対人スキル鍛えろつての』

元は目線を遠くに飛ばしながら、一言一句を逃さぬ様に耳だけを必死に傾ける。

「ハルさん？」

「あ、ああ、どこまでとはどういう事だ？」

「え？　えっと、会得して居ない魔法って、感覚ですがこう、何て言うのかな、感じたりしないんですか？」

「魔法を感じる？」

怪訝そうな表情を浮かべるハルを見て、ララはハツと言葉を飲み込んだ。

『確か魔法にセンスが無いと、感覚が鈍って魔法を根本的に理解出来ないって聞いた事がある。いけない……悪い事聞いちゃった』

「あ、良いの！ ごめんなさい、変な事言つて。えっと、……あつと、あつ私もヒーシャなの。パーティに二人もヒーシャはいらないって言われるけど、守りは固い方がいいもんね。だからあの……」何を言っても変わらないハルの無表情さや、自己の失言を恥じて、ララは完全に動揺してしまった。自分が何を言っているのか分からなくなり言葉が続かない。当のハルは、更に眉間に皺を寄せて、ララの言葉の意図を考えていた。

『話が掴めん。何故コロコロ話が変わるのだろう。魔法原理の話はどうなったのだ。どちらかと言うと、その話が気になるが……』

花壇には、燦々と太陽の陽が降り注ぎ、咲き乱れる花に反射して眩しい位だ。

その時、ハルがララを見据えて、言葉を発した。澄んだその声は、とても良く通り皆の心に響く。

「ヒーシャだからなどと考えて生きるのは無駄だ。エンダとして与えられた能力は一つだけならば、ただ己の道だけを突き進めば良い。そうすれば、こんな単純な世界の中だ。自ずと役割は確立する」

ララはハルの言葉を瞬時に理解出来なかった。しかしハルの凜とした態度を見て、ただただ反射的に言葉を繋いだ。

「貴方は悩んだりしなかったの？ 力だけが正義の様なこんな世界で、癒ししか出来ない自分に」

ここまで言葉にして、ララはハツとして言葉を止めた。皆の視線が自分に向けられている事に気づいたのだ。そして、言葉にする事で、初めて自分の中の迷いに気付いた。

「ララ……」

ミディが心配そうな顔を向けている。ララの動揺する態度にも、特

に気にする事も無く、ハルは淡々と言葉を繋ぐ。向けられた視線は、どこまでも真つすぐで、思わず反らしたくなる程だった。

「無いな。私が居なければ、元はとっくの昔に死んでいる。それは私だけが成せる事だ」

突然名前を出され、更にハルのお陰で生きていると言われた元は、絶句後、声を上げた。

「それはこっちの台詞だ――!!」

そう絶叫し、更にもう一声文句を言う所を、ハルの声で遮られた。

「タロ」

その時、タロがハルの肩に勢いよく駆け登った。擦り寄るタロに、くすぐったそうに目を細める仕草は、今までのハルの印象を覆すものだったのだろう。ハルの表情を眺めていたナツメがボソリと呟く。
「可愛いな――そうやって、いつも笑っていれば超可愛いのに」

「可愛い――!?」

ナツメの言葉に、元は硬直した。ハルに向かって「可愛い」などと表現する発言を初めて聞いたからだ。長年旅を続けてきた元ですら、今まで一度も「可愛い」と思った事はない。ハルはあくまでハルだ。思わずもう一声が出そうになったが、ハルの超絶覚めた表情に、言葉を飲み込んだ。

「おゝ寒! 未だにハルさんの突き刺す視線で、体が凍っちゃったみたいにくまく動かせねえ」

ナツメはブルリと肩を揺らす。全員がタロから先導されながら、目的地向かい歩みを進めているところだった。町の中は至る所で人々が語り合い、人々の笑顔で溢れている。直ぐ脇を駆け抜ける子供達に、元は満たされる気持ちになった。

「全く……可愛いなんて、戦うエンダに向かって失礼だろ」

「何で? おかしいよ? その発想。だって可愛かったじゃん。オプトもそう思っただろ?」

「そりゃ――!!」言葉を繋げようとしたその時、後方から刺すよ

うな視線を感じ、思わず言葉を止めた。オプトが途中で言葉を止めた事を、別の意味に捉えたのか、ナツメが下から覗き込む。

「ぷぷぷ何？ 硬派なオプトさんはハルさんみたいなのがタイプ？ 可愛いけどさ、止めときな、あーやオプトと言えど、手に負えないよ」

ナツメが嬉しそうにからかってくる。その言葉に、冷やかな視線を返し、オプトはナツメの首を腕で締め上げた。

「だから」

「ギブギブ！！」

はしやぎながら（端から見たらそう見えるだろう）目の前を歩く二人に、ミディは溜息を吐いた。

「全く！ 男ってどうしてあんなに単純なのかしら。って言うか、本当にこの方向で大丈夫なの？ ね、ララ」

半分呆れながら、吐き捨てる様に言う言葉にも反応が帰って来ない。ミディはララの腕に手を添え、

「気にしなくていいよ。このパーティにララが必要なのは、紛れもない事実なんだから」

心配そうに声を掛ける。

「う、うん。大丈夫よ。それは分かっているの」

そう淡く微笑み、元と共に先頭を歩くハルに目を向けた。グングンと進むその歩みに一切の迷いはない。

「あの二人……前だけ見て旅を続けているんだね。二人がどんな風に旅を続けてきたのか分かる気がするな」

ララの呟きに似た言葉に、ミディはどう答えるか迷ったが、結局何も言わなかった。その視線がしっかりとハルを見据えていたからだ。

「お前ねえ、余所のパーティ掻き乱すなよ、めっちゃ、微妙な空気流れてんじゃない」

元が隣を歩くハルに、ボソリと苦言を言った。普段は明るく振舞い一切苦悩など見せないララも、エンダならではの悩みを抱えていた

のである。強制的に職業が決まってしまう中、どの職業になったとしても悩みは尽きない。

「私は何も言つてはおらん。差ほど意味のない言葉を、己の思考で勝手に解釈しているに過ぎん。全く人は往々にして迷う生き物だな」感情なく呟くハルを上から見下ろしながら、元は呆れる様に言つた。
「はあ？ 生きてんだから、悩むって当然じゃねえか。未来が分かっている訳じゃないんだからさ。……特に俺達みてえに、こんな世界に来て、狩りだけやってりゃな、悩みもするさ。何とか自分を納得させて生きてえんだよ」

頷きながら、己自身に言い聞かせる様な言葉に、ハルは元を一瞥した。目が合った瞬間、

「てか、絶対お前の方が俺から助けられているから！」

ハルの言葉を引きずる元は、ハルを指差し、ここぞとばかりに鼻息を荒くするが、

「そうか」

全くどうでもいいと言わんばかりに曖昧に頷いている。

「そうかじゃねえ」

ぶつくさ文句を言い続ける元の隣で、ハルはタロの歩みに目を移す。その時、先頭を歩くタロがピタリと止まった。

タロがゆつくりと振り返り、一度クイツと顔を上げる。

「タロ…… すぐえじゃん」

タロが皆を導いた事実には元は目を見開いた。そのタロはハルの肩に上り、体を摺り寄せている。当然の結果だと言わんばかりだ。

「ここ？」

「随分、町の外れだな」

「小さい家だね」

目の前に現れた、民家に向かって皆が銘々に感想を延べた。裕福そうな町の中央とは打って変わって、みすばらしい一軒家だ。

「で、どうすんのお？」

元の言葉に、ハルは「ああ」そう頷くと扉に手を掛けた。

「あー！」

皆が一樣に驚きの声を上げる中、そのまま家の扉を開けて入って行ってしまったのだ。

「ちょ、ハル！ やばいつて！」

エンダは住人の許可無く民家に入ってはならないと、固く禁じられている。それこそ有無を言わせず、肅清の対象になっても文句は言えないのだ。

「ひ…… ひい!!」

あまりの咄嗟の行動に、皆が動けずに居た時、案の定、住人の叫び声が響き渡った。

「おい！ ハル!!」

慌てて後を追う元の後姿を見守り、皆が一樣に顔を見合わせる。今更何だが、元の気苦労が分かった気がした。

皆が追う様に民家に入ると、そこにはハルの姿は無く、奥の扉が開け放たれている。その奥から、叫びにも似た声が響き渡った。そ

んな悲痛な叫びの後に、またもや感情の無い声が響く。

「ど……どうか！　どうか娘だけは、助けてくれ！」

「我々エンダはお前達に危害は加えない」

元が恐る恐る部屋を覗き込むと、小さい部屋の窓際にベッドで眠る子供の姿が一番に飛び込んできた。眠っているのか意識は無く、血色の無い肌がやけに生々しい。その子供を守る様に、あの男が上から抱え込みながら、ハルに向かって訴えている。躊躇なく歩みを進めるハルの後ろで、ララが心配そうに呟いた。

「病気なの？」

ララの言葉に、男はガクリと膝を着いた。

「アミラタセブンという病です」

「アミラタ……って、主に小さい子供が発症するっていう……難病ですよ」

ゴクリと息を飲むララの緊迫した言葉に、

「治らないの？」

元が心配そうに声を掛けた。元はこの手の話にとっても弱い。大人の半分にも満たない小さい体で、大人以上の苦しみを負う姿を見るのは忍びなかった。

「うっん、特効薬があつてね、アミラタという薬草がすごく効くの」

「あ、その薬草が高価とか？」

「そんな話は聞かないけど……」

困惑するララの言葉に、男が肩を震わせながら、声を絞り出した。

「いいえ、薬草自体は高価なものではないんです。発症してから一カ月以内に服用すれば、そんなに怖い病気ではありません」

何だ、全然危機的状況ではないのだなと、皆が安堵した表情を浮かべる中、ハルが額に手を翳す。

「大量に派生する植物ではあるな。ただし派生場所が限られる事に加えて、生物の命の短さがネックだ。この周辺では、ヤドギの洞窟に派生している筈だが」

ハルの言葉に、男はハラハラと涙を零した。

「そうなんです。ヤドギの洞窟は町から西にあり、この地方の病気を賄える程、派生しているのですが、一ヶ月程前から、獣が住みつく様になってしまったんです」

男は深い絶望感に沈む様に、言葉を繋ぐ。話の展開に、エンダ達は言葉を噤む。カラーのリストで狩りの対象を決めるエンダにとつて、獣の直接的な被害を民の口から聞くなど、ほぼ皆無だったからだ。

「よりにもよつて、出現した獣がS級だったんです。私財を全てを投げ打つて、何とか契約金を捻出しても、S級クラスの獣に見合うお金などありません。恐らくあまりの懸賞金の低さに、エンダ様の目にも止まっていけないでしょう。難病と言えど、発症率は低く、どこも掛けあつてくれません。もう、もう時間が無いんです。明日にでも娘は死んでしまつかもしれない。そう思うと居ても立ってもいられなくなつて」

「目立つエンダの宝玉を盗む事で、何とか狩りにまで引つ張りだせないか……と考えた訳だな」

こんな時のハルの事実だけを語る感情無い物言いに、元はいつも心がズキンと痛む。

『こんな身に詰まる話を聞いても、何も感じねえの？ そんな何も響くものが無いのか？ もつとさ……』

父親の言葉に、エンダ達は言葉が出なかった。実力が見合わない獣は、ランクを見た時点で見る事もしない。ランクが高い獣に大勢の民が命を落としている事は重々承知しているが、現実的に手が出せないのだ。エンダの苦悩の一つである。その上生活の糧でもある懸賞金が低くては、正直割に合わないと思うのも事実だ。

「難しい問題だ。エンダは事の発端まで知る由はない。恐らくリストには、洞窟に巣つくる獣位にしか書かれていない筈だ。リストに書かれるのは、実際に犠牲になった被害だけだからな。仮に現況を知り得たとしても、S級は中々手が出せるものではない。命を掛けられているとそういう事だ」

ハルの言葉に、どこにもぶつけようの無い理不尽さに父親は拳を震わせた。

「分かって……いるつもりです。娘の可愛さに……理不尽な事を言っているのも……。エンダ様も命あつての救いなのですか……ら。でも、でもどうしても諦める事が出来なくて！」

この父親の最大限の理性である言葉が絞り出した。

元がハルに向かって勢いよく体を向けた時、先にオプトがナツメ達に声を掛けた。

「皆……」

オプトの言葉に、

「S級なんて私達には荷が重すぎるわ。分かっているんでしょね？」

オプトの顔をジッと見つめながら、開口一番にミディが声を発した。
「確かになあ……今まで戦った事が無いレベルだよな、ちよっと自信がないネ。それに一ヶ月狩られていないって事は相当強いって事だよ。懸賞金だけが目的のエンダばかりじゃないんだから」

ナツメが腕を頭に組みながら、ウーンと唸っている。

「で……！ でも！！ こんな小さい子供が苦しんでいる。この子だけじゃない、出現して一ヶ月でしょう？ 薬が手に入らずに命を落としている民だっているかもしれないよ」

ララの言葉に、オプトが力強く頷く。そして決意を固めた声で、仲間に向かって言葉を放った。

「俺、ほおっておけないよ。確かに身の丈に合っていない獣だと思う。でも……！ ここで見捨てたら、この世界に來た意味が無い。いつか、Sクラスの獣を倒せるようになった時、絶対今日の事を思い出して後悔すると思う。救える命を救わなくて何がエンダだ！！ って。」

でも、命は大事だ。無理について来てくれって言わない。ただ、俺は行かせてくれ」

オプトのストレートな言葉に、ナツメがドコンとオプトの肩を叩いた。その表情は真剣そのもので、ミデイもララも同じ表情を浮かべている。

「な〜に、一人でカツコつけてんの？ 一人で行かせる仲間だっと思ってんなら、パーティ解消なんだけど」

「ナツメ……」

「全くだよね。リーダー一人で何が出来っというの？ ちょっとS級舐めてない？」

「ミデイ」

「そうだよ！ 私達も強くなっだし、今回は元やハルさんが一緒にしょ？ きつと勝てるよ！」

「ララ」

「て言うか、勝たねえとさ！ こんな小さい体でこの子も頑張っているんだからさ」

元が、オプトに向かってニヤリと笑った。オプトの表情から不安が消え、力強い決意がみなぎっている。

「元……。皆、ありがとう！」

オプトの言葉に頷くエンダ達の姿を、ハルが無表情で眺めている。

「え、え、え？ 獣を倒してくれるん……ですか？」

予想外の展開に、父親が呆けたような表情を浮かべた。この一ヶ月どれ程カラーに掛け合っても、直接エンダに交渉しても無駄だったのだ。目の前のエンダ達の宝玉を盗んだのも、半分は自暴自棄になっていた。彼らの姿を見た瞬間、ただただ体が動いた。

「死力を尽くします」

オプトの真剣な表情に、繋がった希望から男は涙をハラハラと流す。

「……ただし」

盛り上がるテンションに、水を指すが如く冷やかなハルの声が響いた。

「絶対ではない。町や国が動かないと言う事は、民の犠牲者は少な

いのだろう。にも係らず、Sクラスという事は、あの男が言う通り（ナツメをチラリと見ながら）、何組かのエンダが命を落としている可能性が高い。我々が戻らなかった場合の覚悟も必要だ」

ハルの言葉は、契約を果たせなかったエンダの死を意味する。父親はゴクリと息を飲んだ。エンダは金が全てなのか！　そう恨んだ事もあった。しかし既にエンダが犠牲になっている可能性を知った今、陥れる様な真似をした自分を恥じた。

【エンダにとって、この石は己の命そのものだ。それはこの石に価値があるからではない。守るべき民の……お前達の命の重さと等しいからだ。その石の存在こそ、我々がこの世界に命を繋ぐ証】
目の前の小さき少女の言葉を思い出す。

「どうか……ご無事で」

父親は、エンダの無事と最後の望みを掛けて、深々と頭を下げた。

再度訪れたカラーは、流石に始めの勢いこそは無くなっているが、未だ煩い位盛り上がっている。オプトは騒ぎたてるエンダ達を掻きわけ、Sクラスのリストをテーブルに広げた。閲覧者も少ないのか、リストは手垢に汚れず綺麗なままだ。

「これか……」

「名はブアンティーン、今まで数組のエンダが犠牲になっている。洞窟の深部に潜んでいるのか、情報は少ない」

リストの情報に皆が溜息を吐いた。出現時に、洞窟の内部に居た数名の民が犠牲になり、叫び声を聞いた民により報告を上げられた獣らしかった。よって姿を見た者はおらず、どの規模の獣かすら分からない。S級クラスな上に、情報が少ないとくれば、確かに敬遠されても仕方がない獣だ。流石に不安が先行して、皆は言葉が出ない。「この洞窟はそんなに複雑な構造ではない。しかしこいつはこの洞窟に留まっている。洞窟を出る事が出来ない状況に居ると考えられるな。そうだな、例えば深部に位置し体が大きすぎて狭い通路を通れないのか、陽の光に弱いアンデットタイプか。これが洞窟内部だ」ハルがバサリと洞窟の地図を広げた。ハルの言う通り、深いが複雑ではなく深部まで地図があれば迷う事も無さそうだ。

「アンデットタイプであれば、私やハルさんの聖なる魔法が有効に働くけど……体が大きいタイプだと、洞窟内で戦うのは不利ね」

「うーん、足場が悪い上に、狭い洞窟だと攻撃が限定されてしまうわ。暴れて洞窟が崩れたら、全員生き埋めよ」

「どこに居るか分かんないんだよな？ この地図だと通路の広さまでは分からないし、俺の足技……使えるのか？」

皆の不安を払拭する様に、オプトが提案をする。オプト達には洞窟で狩りをした経験が無かったのだ。

「洞窟内部に詳しい町の民に話を聞いた方がよさそうだな。ここか

ら洞窟までは……」

ハルが額に指を置きながら、スツと答える。

「歩きで十五時間だ」

「そうか……今回の移動には、獣を使った方がいいな。俺達はグツブルが居るけど、元達は？」

（グツブルとは、この世界の草食動物で、長距離の移動に適した強い足腰を持った獣だ。非常に大人しい獣で、多くのエンダが移動手段として利用している。姿かたちは、ダチョウに似ているが、大きな頭部と大きな瞳が特徴的で、可愛い風貌から女性エンダが最も好む獣である）

「俺達も足はあるよ、だとすると遅くても二時間で着くな」

元の言葉に、ハルが間髪入れずに言葉を挟んだ。

「ギヴソンに合わせてどうする。グツブルの脚なら、五時間といったところだろう」

ギヴソンの名を聞いて、皆が様に頭を捻った。エンダの移動に利用される獣は限定されるが、そんな草食動物の名前は聞いた事が無い。

「五時間か……陽が当たらない場所は、獣に闇の力を与えるから、出来れば明け方には洞窟に入りたい。よし、二時間で俺とナツメが民に聞き込みしてくるから、皆は出発の準備を整えて。準備が整ったら出発しよう」

「それでは遅い。一時間だ。一時間後に檻の前に集合だ」

「でも誰に聞けば良いかも分からないし」

「あの男が言うには、武器屋の親父が、薬草を採取する仕事もやっていらしい。武器屋に限定して話を聞き込めばいいだろう」
「どんどん仕切り始めるハルに、元が苦言を耳打ちする。」

「ハル！ オプトがリーダーなんだからさ、ちよつとは気を使えよ」
元が発した言葉に、突き刺すような視線だけを向けて、ハルは眉間に深い皺を寄せた。その表情に、ハルの言葉待つ事無く、

「……………分かった！ すまん、今のは俺が間違っていた！ そう

だな、なるべく早く着かないと、明日の狩りに響くしな。ただでさえ、夜の移動は危険だもんな！」

早々に狩りのスイッチが入ったハルに、元は頭を下げて訂正をした。今のハルは、狩りに対して全身で集中している。多角面から分析をするハルの判断に間違いはない。元の謝罪の言葉に「確かに」そうオプトは頷くと、ミディとララに指示を出す。

「そうだな、ハルさんの言う通りだ。ミディ、ララ、一時間で準備を頼む。それと元、俺に気遣いはいらないよ。元達のスキルの方が高いんだ。間違った判断した時は、遠慮せず言ってくれ」

そう言くと、契約を完了させ外に飛び出していく。

「オプト！ 待てよ」

「私も行こう」

ナツメとハルが後を追った。そんなハルの後姿を見送りながら、

「本当に我が道突き進む女王様なのねえ」

ミディの言葉に、元はボリボリと頭を掻く。二人だとハルに振り回されている位の感覚だが、大勢の中でのハルの行動は、強引としか言いようがない。

『もつとちゃんと説明すれば、皆理解出来ると思うんだけどな』

「女王っていうか、戦士っていうか」

元は今回の狩りに、一抹の不安が過る。ハルが他のパーティとどう係るのが不安になってきたのだ。狩りが無事に済む事だけを、祈らずに居られない元だった。

一時間後、皆は檻の前に集まっていた。ミディ達と合流したオプト達は、グルリと周囲を見渡す。ミディとララは、二匹のグッブルにウエスタンを括り付け三人の帰りを待っていた。

「あれ、元は」

「それが奥に引っ込んだきり」

「奥に？ 元？」

声を掛けるオプトに答える様に、元が檻からひょっこりと顔を出す。

「お、すまん。待たせたな」

元が太い手綱を引きながら、姿を現した。と同時に、黒々とした巨体がノソリと現れたのだ。毛が無い真っ黒な体に、燦々と紅く光る瞳が異様な輝きを放っている。見た目から獰猛な獣である事は一目瞭然で、

「ヒッ」

ミディとララが互いに抱き合う中、オプトとナツメが一瞬にして戦闘モードとなった。グッブルが畏れから、高い雄叫びを上げ、その場で飛び跳ねる。場が一瞬にして異様な緊張感に包まれた時、元があっけらかんと口を開いた。

「悪い、こいつが中々口輪を付けさせてくれなくてさあ。全く、一カ月間放っておかれたからって、拗ねやがって」

「元……その獣」

「あゝこいつがギヴソンだよ。俺達こいつで移動するから」

皆の困惑な空気など、全く感じていない。ハルはハルで、元と同じ空気を醸し出しながら、

「必ず五時間で到着しろ」

その声を掛け、元の腕に飛び乗った。オプト達は一度顔を見渡し、
「あの額って、宝玉だよね……？」そう呟く。額に宝玉を持つ獣を従えているなど、前代未聞だ。エンダとしてどうするべきか、皆が動揺し考えあぐねている。

「どうした？ 出発しねえのか？」

ギヴソンと旅を続けて長い為、困惑する皆の気持ちに気づいていない。全く意に返さない元の言葉に、「よし、出発しよう」そうオプトが皆に声を掛けた。宝玉を額に持つ獣ではあるが、主従関係がはっきりしているし、元達の事だ、何かしら理由があるのだろう。皆は暗黙の了解の如く、ギヴソンに対して不問にする事に決めた。

しかし移動は順調とは言い難かった。グッブルがギヴソンへの恐怖で中々真っ直ぐ進んでくれないのだ。先に行けば、前に進む事を

躊躇するし、後ろに回れば追われる感覚になるのか、四方に逃げよ
うとする。当のギヴソンは全く興味を示さず、元の指示通りに走り
を続けていた。最近は滴る涎もなくなり、可愛いものだが、草食動
物からしてみれば恐ろしい肉食動物に違いない。仕方なく、元達は
先に洞窟に向かう事にした。

「カッコイイ」

颯爽と駆け抜けるギヴソンの後ろ姿に、グップルの手綱を操りなが
ら、オプトが感嘆の声を上げた。全身の筋肉を躍動させて進むその
姿は、ド迫力、その一言に尽きる。

「いつかあんな獣で移動出来たらな」

興奮気味なオプトに、後ろに座るララがビシリと言い放つ。

「可愛くないからダメ」

「えっ！？ 移動に可愛さなんて……」

「だったら、カッコよさも必要ありません。グップルで十分です！

！」

これから先の旅で、グップル以外の移動手段を否定されたオプトは、
ガツクリと肩を落とした。

第6章 Crossing the road 12

オプト達がヤドギの洞窟の近くに辿り着いた頃には、夜もすっかりと暮れ、無音がどこまでも続く暗闇の世界と化していた。その中で、パチパチと揺れる薪の火花は、暗闇をほのかに照らす。

「着いた……」

遠く離れた場所から、この焚火を目指し走り続けてきたオプト達は、安堵の声を上げる。遙か彼方からこの焚火は、赤々と燃える姿を映し出していた。恐らく何かしらの仕掛けが施されているのだろう。フラフラと焚火の前にオプト達が現れた時、元は火の番をしながら薪を炎に放りこんでいた。そんな元の隣で、ハルは寝袋の中で熟睡中で、起きる様子も見せない。ギヴソンという獣も、離れた場所に待機させているのか、微々たる気配すら感じる事は出来なかった。

「おゝ時間通りじゃん、流石オプト！」

「尻が痛え……」

声を掛ける元の言葉に被せる様に、ナツメが辛そうにお尻を擦る。その行為に、ミデイが心底嫌そうな表情を浮かべながら、グッブルから寝袋を下ろした。休まない五時間の移動に、皆の疲労は一目瞭然だ。グッブルはその脚力の強さから、長距離移動に向いているとはいえ、飛び跳ねる様に走るものだから想像以上に疲れる移動となった。

「いや、時間通り着かないと明日の狩りに響くし、ハルさんから怒られそうで……」

オプトの本気とも冗談とも取れる言葉に、元はニヤリと笑う。大きな木の幹の下で薪をくべながら、

「お前ら、もう寝ろ。明日は早いぞ」

そう声を掛けた。

「元も寝なきや。俺が交代しよう」

「いや大丈夫だ。ハルが一带に結界を張っているからな。多少の獣

だったら回避出来る。安心して寝ていいぞ。俺も、もう寝る」

そう言うと、寝袋に入ってももの一分でいびきを掻き始めた。野宿は交代で火の番をするのが基本であり、火を絶やすと獣に襲われる確立が高くなる。元の行動に、オプトが心配そうにララに問うた。

「ララ、魔法感じるか？」

ララが頭を振った。睡眠という無意識下で魔法を持続させるのは無理だ。魔法を掛けているとすれば、恐らく継続的に持続するものが対象の筈だ。考えられるのはこの焚火しかないのだが、微力の魔力すら感じ取る事は出来ない。全員が顔を見合したが、

「……元の言葉を信じよう」

長旅の疲れもあって、オプトの言葉に皆が頷くと、全員があつという間に眠りに墜ちた。

朝露に濡れた植物によつて、清浄された空気が体の中に大量に入つてきて、オプトの意識がフツと目覚める。目の前には、この場所に到着した時と同じ姿勢で、元が焚火の前に座っていた。

「あれ？ 元、もしかしたら寝てないの？」

ぼんやりする意識の中、オプトが呟く。その声に気付いた元は、昨日と変わらない笑顔を向け、元気よく声を掛けてきた。朝食の準備をしているのだろう。火に掛けた鍋を掻き回している。

「お、起きたか？ おはようさん！ 俺？ 寝たぜ。言っただじゃん、大丈夫だつて」

「どんな魔法なの？」

半身を起こしてララが話に入ってきた。焚火に目を向けるが、昨日と火の様子は変わらない。

「お、ララおはよう」

「あ、元、おはよう」

挨拶を忘れる位、ハルの魔法が気になっている自分に、ララは小さく息を吸ってペコリと頭を下げた。

「ね、元、魔法の波動を感じないの。どんな魔法なの？」

ララの気迫に押される様に、元はボリボリと頭を掻いた。

「うゝん、知らん！！ ハルに聞いてくれ！ 多分、焚火に何かしているんだろうけど。でもホントに確かな魔法だぜ！」

『とは言っても、そもそもハルの獣を察知する能力のお陰で、獣に夜襲を掛けられる可能性はゼロな訳だが』

「凄いね……」

そう言葉にしながら、ララは焚火に目を向けると、ジッと炎に見入った。

『場を清める魔法だけじゃない。炎を継続的に発火させ続ける魔法、魔法を安定させる魔法……考え付くだけでも、これだけの魔法が必要な筈なのよ？ これを一晩？ どんな仕組みなの？』

魔法のセンスが無いのだろうと考えていたが、自分の思い違いなのかもしれないと思うと、ララはゴクリと息を飲んだ。

「そうだな、魔法に関しては凄い奴さ」

ハルの事が誇らしいのだろう。元はニコニコと微笑んでいる。そんな元の様子に、二人も自然と笑みが零れた。そんな元を、ミディはソツと意識を殺して見つめていた。

「ん？ そのハルさんは？」

オプトが寝袋を畳ながら、周囲に目を配っても、ハルの姿はどこにもない。

「俺が起きた頃には、もう居なかったな。恐らく洞窟でも下見に行っただろう？」

何でも無いことの様に話す元の言葉に、オプトが絶句した。

「な、一人で？ 危ないじゃないか！」

心配で声を上げるオプトに、元は布袋からパンとチーズを取り出しながら、言葉を繋ぐ。

「だゝい丈夫だって！ 現時点では、あいつでも無茶しねえよ」

元の言葉に、オプトは「でも……」そう言葉を無くした。ヒーシャである女性が、狩りの前に獣が居るであろう場所に一人で向かうなど、考えられない事だ。と言うよりも、独断的な行動に面喰う。

「お、ほら、帰ってきた」

元の言葉通り、ハルが白み始めた朝陽を背に、こちらに向かって歩いて来る。長い栗色の髪が、透けて黄金色に輝く様に優しく揺れる。凜としたその表情は何を考えているのか、全く掴み取る事は出来ない。元は元で、慣れているのか、サラリとハルに声を掛けた。

「おう、ハル、飯の準備出来てんぞ。食いながら作戦といこうぜ」

「ああ」

「ハルさん！」

オプトの声に、ナツメが飛び起きた。

「うお?? 何々? 朝??」

「こんな場所で、一人で出歩くななんて危険です」

オプトの真剣な眼差しに、ハルは視線を移すと、飄々とした態度で答えた。

「狩りの前に念を押した筈だ。私の心配は無用だと」

「でも! 貴方はヒーシャなんですから……!」

「万事が万事そんな思考か? ヒーシャや女だからなどと、固定概念で判断するのは、狩りで一番危険な事だ。ちなみに私を守ろうなどと考えるな。私を視野に入れた動きは、却って足枷になる」

ハルの言葉に、オプトは言葉を嚥む。こんなにハッキリと、自分の考えを否定されたのは初めてだったからだ。しかもパーティを第一に考えた発言を否定されようとは、思ってもいなかった。

「ちよ、ちよっと!! オプトは貴方の事を気遣って言っているのよ!? その言い方は無いんじゃないの!？」

ミディが上半身を起こし、咄嗟に口を挟んだ。そんな至極当然の発言にも、

「親切は痛み入る。しかし狩りに関しては、無駄な気配りだ。約束は守れ。私の事は気にするな」

ハルの冷めた物言いに、終止符を打つが如く、元が仲介に入る。このまま討論を続けていたら、パーティが分裂する危険性が出てくる。

「はいはいはいもうそこまで。皆！ ハルを狩りのパーティーって思うの禁止な。こいつの言い方は悪いけど、ハルに関しては、狩りの最中の気遣いはいらない。ただでさえ、俄かパーティーなんだ一緒に狩りをした事がないハルに関しては空気位に思っていていいから」

「たく、俺には一瞬で会話を終わらせるくせに……こいつなりに氣を使っただな。でも話せば話す程、誤解されるタイプか。ホント分かり辛え」

本来であれば、元はオプト寄りの思考だ。パーティー全員の生還を一番に考えれば、ハルの行動は、自己中心且つ無謀としか言いようがない。

「こいつが数人のパーティーに居たら、全体の均等が取れなくなる可能性が高けえな。でもなあ……ハルを知れば、ハルの言葉には説得力もあると思うが。いや……正しくはねえんだけどさ」

それでもギツと元はハルを睨んだ。

「たく、お前の言い分も分かるけど、狩りの前だけは止めてくれ。もつと他の言い方があるだろう？」

元の言葉には、ウンともスンとも反応しないばかりか、顔を向ける事もしない。

「こいつは」

気まずい空気は、食事の間中絶える事は無かった。ミディはともかく、オプトまでも押し黙ったままだ。ナツメとララは、何とか空気を換えようと努力しているが、重苦しい空気は変わらない。俄かに勃発したパーティーの険悪な雰囲気、元は天を仰いだ。

第6章 Crossing the road 12（後書き）

本年中は、エンダに目を止めて頂き、誠にありがとうございました。皆様のお声を励みにさせて頂き、何とか6章まで掲載する事が出来て、感謝しております。

来年も日々まい進していきますので、どうぞ宜しくお願い致します。皆様にとって、来年が良い一年でありますようお願いしています。

「武器屋の親父が言うには……」

『自分がこの状況を作り出した自覚がないのな。っていうか、この空気をぜってえ気にも留めていない』

元がチラリとハルに目線を向けて、サインとした空気を読め！ もっと人との均衡を大事にしろ！ 等と心の中で叫んでみても、ハルに届く筈もない。ハルはスーブを口に運びながら、武器屋で聞いた話をボソボソと呟き始めた。

「たく、よりによってあの洞窟に住み着くとはなあ。子供達の病気も心配だが、如何せん洞窟から出て来ないってんで、町を動かす事も出来ねえ。あのヤドギの洞窟はもうダメだ」

親父が剣の手入れをしながら、大きな溜息を吐いた。「ちえ、いい収入源だったのによあ」そんな言葉を呟いている。摘んでアミラタは二週間足らずで枯れてしまう。ヤドギの洞窟で、この地域全てを賄っているのだ。発症率が低くても、結構な稼ぎになるのだと、親父は（聞いてもいないが）鼻息を荒くした。話が武器屋の稼ぎの悪さにまで及ぼうとしたので、オプトが焦って疑問を投げ掛けた。

「何故獣は洞窟から出て来ないんだ？」

オプトの言葉に、親父は大きく首を横に振った。ゴキゴキと首を捻りながら、怪訝そうに言葉を繋ぐ。

「うゝん。それは俺らも不思議で仕方ねえんだなあ。ヤドギの洞窟はさあ、何て事無いシンプルな洞窟なんだよ。アミラタは一番奥に生えてんだが、そこまで一直線だ。脇道なんてあらしねえ」

親父が二本目の剣に手を掛けている。

「他には？」

「いやゝ？ ホントに何て事ないからな……、ま、蝙蝠がチラホラ居る位かな」

これ以上、有意義な情報を得られそうもない……そう判断したハルは、最後に親父に声を掛けた。

「洞窟の内部を詳しく教えてくれ。広さから長さまで、出来る限り詳細に」

ハルがパンにチーズを乗せて、箸で刺し焚火に近付けている。

「武器屋の親父の言葉通り、特段特徴のある洞窟ではない。距離にして一キロ、高さは約五メートル強。確かに地下三階までは降りるが、脇道もない一直線だ。アミラタが生えている場所は、少し広く成っているらしいが……。何処に潜んでいるのか、今は検討がつかない」

ハルの言葉に、パーティはシインと静まりかえった。ハルと元は絶えず口をもぐもぐさせているが、他の四人はさつきから食事が進んでいない。

「えつと？　じゃ、何なの？」

「まあ、恐らく……。いや、憶測に過ぎん。洞窟に入って確かめるのが良いだろう」

「もう洞窟に居ないとか？」

「それは無い。獣の気配は洞窟全体に感じている」

ハルの「気配を感じる」の言葉に、怪訝そうに皆がハルに目を向けた。正体不明の獣に漠然とした不安が、皆に襲い掛かる。

「やめるか？」

元が頭をボリボリと掻きながら、ごく軽い感じで皆に声を掛けた。こんな場所まで来て、止めるも無いのだが、その声は至って明るく、そしていつもの元の一声で、スツと皆の心が平常心になった。

「止めない！」

オプト達が力強く答えると、ザツと立ち上がった。その様子を横目に、ハルは箸に刺したパンをパクリと頬張る。チーズがトロリと溶けて香ばしい香りが立ち上った。

「飯が未だだ。元が作った分は、全部食べる」

「……はい」

淡々としたハルの言葉に、オプト達は上げた腰をストンと落とした。

洞窟内部はランタンが焚かれ（恐らく数ヶ月もつのだろう）、薄ボンヤリとした灯りで照らされている。少し進むと、入口の明かりは途切れたが、ランタンのお蔭で、移動を続けるのに支障はない。オプト、ナツメ、ミディ、ララ、元、ハルの順で歩みを進め、全員が意識を研ぎ澄まし、如何なる状況にも対応出来る様に備えた。しかし時折、洞窟内部に響く風音がぶつかり合うだけで、静かな世界そのものだ。

「ひゃっ」

ララが小さい声を上げた。

「どうした、ララ！」

振り返るオプトに、ララが小さく手を振りながら、「あ、ゴメン。

大丈夫、上から水滴が……」首を押さえながら、頭上を見上げた時、

「！」

天井一杯に何かがびっしりと蠢いていた。

「ヒッ」

その異様な光景に、皆が叫び声を上げそうになった時、

「！！」

全身が金縛りにあつた様に、硬直し動かない。声も出ない状況に、オプト達は全身から汗が噴き出し、大きく心臓が跳ねた。こんな状況で攻撃を受けたら、パーティは全滅だ。

『やばい！ ブアンティーノか！？ これは毒！？』

必死に置かれた状況を把握しようと、皆が躍起になっている時、ハルの低い声が響く。

「落ち着いて聞け。こいつらは、危害を加えない」

その一言を伝い終わると、フツと体の自由が利く様になった。皆が恐る恐る天井を見上げると、そこには小さい蝙蝠がギッシリと蠢いている。

「ハル、俺は慌ててないって」

皆と同様に魔法を掛けられた事が不服なのだろう。元が、小さく恨み節を聞かせる。しかし元の目線からは、ハルのつむじしか見えな
い。

『どうせ表情一つ変えていねえな、こいつ』

「ちよつと！ 仲間に魔法を掛けないで、よ！」

ミディがこれまた呟くように振り返りハルに文句を言つと、その「仲間」という言葉に、皆がフツと和む様に微笑んだ。

「な、なによ」

ハルの言葉通り、蝙蝠は神経を尖らせては居るが、襲つて来る気配はない。その一連の判断と行動に、オプトは目を配ると、クルツと前を見据え「行こう」そう声を掛けた。

第6章 Crossing the road 14

「何も起きないじゃない」

「ホントにな」

ぼそりと呟くミディにナツメが声を潜め答えている。ララはララで、頭上の蝙蝠に全神経を張り巡らせていて、会話どころではない。

『もうすぐアルミタが派生している深部地点だ。本当に出てこないのか？』

オプトは洞窟の角を曲がりながら、後方に位置する二人に目を向けた。元は両手を後頭部で組んで、口元に笑みを浮かべている。しかし組む右手は剣に添えているし、笑っているのは口元だけだ。ハルに至っては無表情のまま、何の思考も読見取る事は出来ない。しかし一瞬だけ目線を後ろに向けた気がして、狩りが終わっていない緊張感がヒシヒシと伝わってくる。

「未だ安心するのは早いぞ！ 気を引き締めて行こう」

オプトが自らへの叱責も込めて、声を潜めながら、しかし力強く言葉にした。ナツメとミディ、そしてララがハツとした表情を浮かべている。そんなオプト達の様子を見据えると、元はニンマリと笑った。

地下に潜る程、当然に閉塞感が増していく。緊張からか息苦しく感じ、オプトはタートルの首元を指で広げた。

「お？？ あれじゃねえ？」

元の言葉通り、通路の先が薄くぼんやりと光っている。オプトが剣をスルリと抜き、獣の奇襲に備えると、ゴクリと息を飲み、最終地点に足を踏み入れた。その場所は、武器屋の親父の言葉通り、空間が広がりミントに似た香りが充滿している。

「わぁ……綺麗……」

ララが感嘆の声を上げて、ぴょんと小さく跳ねた。アルミタは自ら

が緑色に発光しており、壁一面に広がる様子は、幻想的な光景を作り出す。アルミタの発色のせいかな、実際の奥行きよりも広く感じられて、更に光の美しさを引き立たせている。

「獣が現れないんだつたら、薬草だけでも摘んで行こうぜ」

ナツメが、拍子抜けだと言わんばかりに呟いた。

「サンセー」

狩りのプレッシャーから解放されたミディとララが嬉しそうな声を上げた。ブアンティーノの行方は気になるが、洞窟内での狩りが回避された事は喜ばしい事だ。浮かれるパーティーとは対照的に、元は目だけを左右に動かし、神経を研ぎませている。そしてハルはゆっくりと体を一回転させて、スツと息を吸った。

「来る!!!」

元が低く呟いたその時、自分達を通ってきた通路から、激しいまでの羽音が聞こえてきた。元が剣をスツと抜く動作に、皆がザツと息を飲む。羽音が広場の入口まで迫った時、まっ黒い影が入口を塞いだ。

「なっ!!!」

それは何百という蝙蝠だった。洞窟に巣くっている蝙蝠が、一斉に広場に流れ込んだのだ。

「なんだ!?! なんだ!?!」

ナツメが叫ぶ。その黒の影が引いた時、洞窟内部に一瞬の静けさが広がった。蝙蝠達は息を潜め、ジツと壁にへばり付いていて動かない。

「……何も起きないじゃない」

ミディの不安そうな声に答える様に、ララが言葉を繋ぐ。緊張から声が上がっている。

「……何かに驚いただけじゃない?」

「何かって何に?」

沈黙に耐えられず、皆が不安の声を上げた時、

「オルガ 届け、光の道標」

ハルの言葉が低く響いた。

「え……」

ハルの言葉に、魔力を使うミディとララは驚愕の表情を浮かべている。特にララの衝撃は激しく、ポカンと口を開けたままだ。

「清めの呪文！？ 何で、何で……詠唱がそんなに短い……の」

二人の困惑など意識の先にも触れていないハルは、腰に指していた短剣を抜き出し、刃を静かにスツと撫でた。指先が触れた先から、刃が黄金に輝き眩いばかりに光輝く。皆が眩さに目を細めた時、ハルが真上の天井に向けて、短剣を投げ付けた。反動でハルの髪がスローモーションの様にゆっくりと大きく揺れた。短剣は、スピードを増し「カツン」と音を立てて天井に突き刺さる。

その瞬間、洞窟内を激しく揺らすような地響きが全員を襲った。

側面の壁が、バラバラと音を立てて崩れ落ちてくる。

「何！？」

立っていられない程の揺れだ。

ギアアアアアアアア

地響きと同時に響き渡る叫びに、事情が掴めないパーティは視線だけを動かした。

「まさか！！ ブアンティーノって……！」

オプトの叫びに、元がニヤリと笑う。

「オプト、気付くの遅えよ。そのまさかさ、何故だか分からねえけど、洞窟と一体化しちゃっているみたいだな」

あっけらかんと受け入れがたい言葉を発する元に、オプト達は言葉を無くした。しかし元の言葉に、皆が天井を見据えると、確かに洞窟の天井部分が大きく波打っている。

「これが獣だつて……！」

初めて直面した獣の形態に、脳が中々現実を受け入れてくれない。しかし平常心を保つ元とハルの二人がパーティに居る事で、不思議と精神は落ち着いてくる。オプトは大きく息を吸うと、

「皆、行くぞ!!」

そう号令をかけた。オプトの号令を聞くと、気持ちが狩りモードにスツと入るのは習性だろうか。

「うおおおおお!!」

先陣を切り、オプトが天井に向かって大地を蹴り上げる。轟く天井にその大剣を突き刺しかけた時、

「があ!!」

オプトの体を、鋭利な岩が突き抜けた。

「オプト!!」

「グッ」

岩を横腹に残しながらも、オプトは剣を持ち替え、ザシユ!!

岩を切り裂き、横腹に突き刺さった岩を引き抜いた。着地こそは上手くいったが、痛みからその場に片足を着く。しかし視線はジツと上を見据えたままだ。ララが直ぐさま回復の呪文を唱える。

「来るぞ」

ハルの弦きが終わらない内に、天井から無数の鋭利な岩が飛び出した。

「ウゲ」

ナツメはズボンのポケットに手をつ込んだいつものスタイルで、無数の岩を蹴り落とす。いつもの狩りのパターンに持って行けず、気持ちが焦って仕方がない。体系を整えなければ、ミディとララを危険に晒す事になる。

「ウツ」

数が数だ。避け切れなかった攻撃が、肩や腕を直撃した。鋭利な岩は、その身をえぐり鮮血が流れ落ちる。

『やべえ! 致命傷となる部位は死守出来たが、第二弾が来たら確実に遣られる!』

ナツメの額に汗が浮かぶ。

「詠唱が間に合わない!!」

ミディの悲痛な叫びが、洞窟に木霊した。通常であれば、後方に位置し魔法で攻撃をするのがマジッカーの戦い方だ。こんな頭上から戦士達もろとも攻撃を受けるなど、思っても居ない。無数の刃がそのミディの瞳に映った時、

「ミディ!!」

オプトの叫びに答える様に、大きな影が横切った。

「だりゃ〜!!」

「元!」

咄嗟にミディが元の名を呼ぶ。その動きは豪快かつ繊細で、大きく下から剣を構えたかと思うと、剣が円を描く様に動いた……その瞬間、強固である筈の岩が、全て音も無く切り落とされた。突如現れた元の大きな背中に、ミディは見据え動く事が出来ない。

無数の岩は、呪文を発動中のララにも振り落とされた。しかしララは癒しの魔法の詠唱が終わり、今オプトに癒しを降り注ぐ最中だ。術の途中で魔法を放棄した場合、魔法は暴走を始め術師に襲い掛かってしまう。魔法陣に包まれているララに向かって、「ララ!!」ミディの緊迫した声が響いた。ララ自身、身に降りかかる危機を嫌という程感じている。

『もうヤダ、こんなの!! 怖い! 逃げたい!!』

ララは迫りくる無数の刃の気配を感じながら、心の中で声にならない叫びを叫んでいた。

『こんな風に窮地に陥る度に逃げ出したくて、でも結局自分以外の皆が優秀で、狩りで勝ててしまうから、いつの間にかS級ランクを狙うパーティの一員なんかになって。自分には、そんな力なんてないのに……』

ララは幾度となく眠れない夜を過ごしてきた。ランクが高い獣を狙う度に、狩りから逃げ出したくなる衝動を必死で押さえてきたのだ。

ララはエンダでありながら、狩りに恐怖を抱く己の弱さを痛感し、ジワリと涙が出てきた。

『同じヒーシヤなのに、真つすぐと前を見据えるハルさんが羨ましくて、眩しくて……』

ララはハルの後姿を思い出す。魔法がオプトに届いた刹那、ブアンティーノの攻撃が正にララを貫かんと降り注いだ。

「ふむ、いい魔力だ」

死を意識した時、直ぐ真後ろからハルの声がした。

『え、後ろ？』

振り向く間もなく、頭上に光の盾が大きく出現し、ブアンティーノの攻撃を全て阻んだ。目の前のオプトにも同じ現象が起きている。突然光り輝き出現した光の盾に、ナツメが言葉を無くす。

『ええ？ それもつと早く、皆に出してよ』

そう肩の傷に薬草を刷り込みながら、心の奥底で悲壮な突っ込みを入れるのだった。

「ただ、無駄が多い」

「ひゃ」

突然ハルの指先が、ララの背中をなぞった。ララが一度肩を上下させ、困惑しながら視線を背中に傾ける。

「は……ハルさん？」

ハルの指先は、スーと背中の中でピタリと止まった。

「ここだ。お前の魔力がここに一番集中している。魔法を発動させたら、ここから魔力を放出する様に意識しろ」

「え？」

「こいつは闇の属性が強い。ふむ「清き涙」がいい」

「え、え？」

混乱するララではあったが、ハルの言葉には魔法が施されているかの様に、言葉通り無意識に詠唱を唱えた。

「マオホソブ ウドゥ フォウ ミラ ドロウ……」

『あ……』

ハルがリズムを唱える様に、背中をトントンと叩く。気になって仕方がないと遠い意識で思った時、指で押されている場所がカツと熱くなった。それは水が一気に滝から放出される寸前の力量の如く、ララの体に魔力が蓄積されている証拠だ。

『な、何？ え……怖い！』

未だ嘗て味わった事がない感覚に足がガクガクと震える。魔力に吞まれ、このまま身が消し炭になりそうだ。

「集中しろ」

「ッ 届け 清き涙！」

ハルの言葉が耳に届いた瞬間、魔力が一気に放出された。目の前に光のラインが出現し、

『体がふわふわする』

ララがそう意識した時、体が漆黒の闇に飲み込まれた。

第6章 Crossing the road 14（後書き）

（ヒーシャの魔法解説）

- ・ 光の道標は、基本的に獣の体力を奪う魔法で、深く闇に属する獣であればある程、効果は増大する
- ・ 清き涙は清めの魔法で、闇に深く属する獣や場所を浄化する効果がある。深く闇に属する獣であればある程、反対魔法でなくてもダメージを与える事が可能となる

「……ラ……大丈夫……!？」

『遠くでミディの声が聞こえる……』

ララは重たい瞼を強引にこじ開けると、そこには薄ぼんやりとした世界が広がっていた。

「ララ!!」

涙で頬を濡らすミディの姿が見えた。ミディの声に掻き消される様に、ゆっくりと優しい声を発したのはオプトだった。

「良かった、目が覚めたな」

『……皆』

オプトの腕に抱き止められながらも、ララの意識にある人物はただ一人だ。

「魔力の放出が一秒遅れた。その分、身体に負荷が掛かったらしい」ボソリと呟く声の方向に目だけを辛うじて向けると、ララを見下ろすハルの姿があった。相変わらず冷やかな目線だが、『違う』ララは視線を反らせずにそう思う。

『狩りが始まるまでは、何て冷たい目線だろうと思っていた。でも今は……』

「ハル」。お前とララは違うんだからさ、無茶させんなよ」

「そうよ！無理させて消えちゃたらどうするの!? 人の身体で魔法を試さないで!」

ミディが涙を溢れさせながら、声を荒立たせた。

『違うの! ハルさんは、私の為に!』

声に鳴らないもどかしさに、視線だけは必死にハルに向ける。ララと視線が合ったハルは二人の声を一切無視し、オプトに視線を向けた。

「ララ、お前はもう少し休め。オプト、ララを連れて先に帰るぞ。民に獣を倒した事を早く伝えたい」

「あ、ああ、分かった。宜しく頼むよ。あ、薬草も少し持って行ってくれ」

「オプト！ ララは私達が！」

ミディの願いをオプトは制止した。

「いや、ギヴソンの足が遥かに速い。ハルさん達に任せよう。ララを早く休ませたい」

オプトの言葉に、ミディは納得が行かない表情を浮かべながらも、グツと言葉を飲み込む。グツブルの移動に今のララが耐えられる筈も無かったからだ。元がララを抱え上げて、ハルに声を掛けた。

「どうする？ 今のララじゃギヴソンって結構きつくねえ？」

「ふむ」

元の言葉に、ツカツカとララに近づき、手を顔の上にそっと添えた。その瞬間、ララの意識はそこで途絶えた。

夢と現実の狭間を漂いながら、ぼんやりと魔法を繰り出した瞬間を思い返していた。

『……魔力が体に蓄積されたあの時……私、ハッキリと分かったよ……ハルさんは……ハルさん！？』

そこで意識が目覚めたララは、弾ける様に飛び上がった。ベッドの隣で、リングを剥くナイフを思わず落としそうになりながら、ミディが声を掛ける。

「ララ！ 良かった！！ なかなか目を覚まさないから心配したよ！ 痛いところはない？ お水飲む？」

ずっと付き添ってくれていたのだらう、ミディがホッとした表情を浮かべている。しかし、今のララに感謝の言葉を伝える余裕などない。

「ハルさんは……」

ララの小さな声に、「え？」ミディは怪訝そうに問うた。

「ハルさんは？」

再度真剣な表情で問うララに、「あの女？ 知らないわ。オプト達

が話があるって言うて……」

「ハルさん！」

ララは、ベッドから飛び起きると、靴もそこに履きかえ、部屋を飛び出した。

「ララ！？ どうしちゃったのよ」

ドンドンドン！

「オプト！ ナツメ！ 居るの！？」

打ち付ける扉の奥からは、何の音も聞こえてこない。ララは体を翻し、階段を下りる。

『何故、こんなに焦っているんだろう……ハルさんに会って何を話すつもり？』

ララは、逸る気持ちに理由を見つける事が出来ないまま、談話室のドアを開けた。しかし、どこにも皆の姿は無い。ララが眉間に皺を寄せて、身体を翻した瞬間、

「おっと」

ボスン

後ろに居た人の気配に気づかず、思いっきり胸に飛び込んでいた。

「あれ？ ララ。目、覚めたんだ」

飛び込んだ先はオプトの胸の中だった。相手がララだった事にも、ビックリしたのだろう。驚きの表情を浮かべ、見下ろしている。

「お！ ララ。調子はどう？」

ナツメが後ろから覗き込んだ。二人の言葉に返事する事も忘れ、ララはオプトとナツメの腕を掴み問うた。

「ハルさんは！？」

ララの鬼気迫る声に状況が掴めないまま、

「出発したぜ。今送ってったところ」

軽い感じで答えるナツメの言葉に、ララがヘナヘナと膝を着いた。これに驚いたのは、ララの回復を喜んでいた二人だ。

「どうした！？」

「体調が万全じゃないのか？」

焦った声色で、腕を差し伸べて来る。

「ごめんね。取り乱して」

ララがベリーの紅茶を飲みながら、一息をついた。ララは透き通る頬を真っ赤に染めながら頭を下げた。ララが取り乱す姿を初めて見た三人は、一様に心配そうな表情を浮かべている。

「……びっくりしたよ。どうしたの？ 何があったの？」

ミディは、ララがハルに執着している様子を面白く思っでなく、不機嫌な表情を露わにしている。

「ホントだよ。狩りの最中で倒れたかと思うと、目が覚めたらハルさんを全力で探しているんだからさ。チャームの魔法でも掛けられちゃった？」

ナツメがごく軽い感じで声を掛ける様子に、ミディは冷めた鋭い視線を飛ばす。ララはナツメの言葉に、フツと微笑んだ。漂うベリーの香りで気持ちが落ち着くと、途端に沢山の疑問点が浮かんできた。

「あ！ そういえば、獣は！？」

「ララ、ホントに何も覚えていないのか？」

オプトの問いに、不思議そうな表情を浮かべるララの顔を覗き込みながら、ナツメが話を始めた。

「ねえ、ホントにびっくりだったよね」

魔力を持たない元やオプトですら、ララから派生した魔力の波動に皮膚が震えた。

「へえ、ハルの魔法に似ているな……」

元がボソリと呟く。

『今までララの魔法を感じる事はなかった。って事は、一本線が通ったって感じか？』

ララから迸る魔力の波動が波と成って、洞窟の壁を揺らす。荘厳な音楽と共に洞窟一杯に魔法陣が広がった時、光の効果で輝くララが

片手を上げた。

ドクン！

その時洞窟と同化した獣が、割れんばかりの叫び声を一瞬上げて大きく波打つ。その刹那、洞窟の天井がダラリと垂れた。異様な光景に、何が起こったのか理解出来ず、オプト達は体が動かせずに居る。「気絶した」

静寂が広がる中、ハルが静かに呟いた。

「へ？ 気絶！？」

元がポカンとした表情を浮かべると、ハルが感情なく呟きを続ける。「ま、S級とは名ばかりの小物だった訳だ。奇襲攻撃で多数のエンダが犠牲になった事が、ランクを引き上げた要因だろう」

S級レベルの獣が、ヒーシャの魔法で気絶するなんて聞いた事も無い。可能性はゼロではないだろうが、S級では考えられない話だ。

「えつと、じゃ……」

オプトは何とか気持ちを奮い立たせ、剣を一振り振り落とした。洞窟が崩れ落ちやしないかと心配だったが、ゴロリと宝玉が地面に落ちた様子を見て、皆は安堵の溜息を吐く。

「終わったな」

オプトは宝玉を拾い上げると、狩りの無事にスツと息を吸った。

「何で洞窟に入った時点で襲われなかったんだろう」

剣を収めたオプトに、ナツメが怪訝そうに頭を捻る。この獣の恐ろしい所は、奇襲による攻撃だけとはいえ、あの狭い通路だ。犠牲になったエンダ達同様、あの岩の刃に倒れていたかもしれないかった。

「元とハルさんが居なかったら、マジ自分達も危なかった」

ナツメの言葉に、元がポリポリと頭を掻いた。言おうかどうか迷っている様子を見せながらも、

「あゝ恐らくハルだな。朝、下見に行った際に、眠りの魔法でも掛けてたんだろ？」

ハルらしいと言わんばかりの言葉に、全員ガツクリと体から力が抜けた。先を見越した洞察力も、そのパーティを完全無視した行動も、

もつと言えはあんなにビクビクして、洞窟を移動した自分達って……そんな感情が頭を過る。何からどう突っ込むべきか悩むパーティに、ハルがボソリと声を掛けた。

「ララが気を失っている。支えてくれ」

その言葉に全員がギョツと一斉に振り返る。そう言えば、あのはしやくぐ声を聞いていない事に気付く。ハルの言葉通り、ララが大地を踏み締めたまま、気を失っていた。

「って言う訳だ。ハルさんに聞いても、ララが倒れた理由を、【魔力をコントロール出来ていないだけだ】としか言わないし、ララは三日、目を覚まさないし、本当に心配したよ」

余程心配していたのだろう。オプトの眼の下にはくつきりとクマが出来ていた。ナツメとミディも同じ顔をしている。

『皆……！』

皆に掛けた気苦労を申し訳なく思いながらも、ララは嬉しくて有り難くて胸が熱くなった。

「ホントだよ、ハルさんに聞いてもさあ、無表情で【じきに目を覚ます】って調子だしな」

「じゃあ……薬草、アミラタは？」

「それは大丈夫よ。薬草は間に合ったわ」

ミディの言葉に、ララは安堵の溜息を吐いた。子供が助かった……その奇跡に感謝する。

【救える命を救わなくて何がエンダだ】

そう言うオプトの言葉が脳裏を過ると、次に子を思う父親の喜ぶ顔が目に見えた。カップに口を付けながら、微笑むララにミディがグイっとその身を乗り出してきた。

「で！？ 何があつたの！？」

乗り出すミディに少したじろぎながら、ララは申し訳なさそうな表情を浮かべた。ララの言葉に、全員が真剣な表情を浮かべている。「ハルさんの言う通りよ。自分が発動した魔力をコントロール出来なくなつたの。狩りの最中に、ハルさんから魔力の引き出し方を教えてもらったんだけど、私の精神力では力不足だったのね。だから気を失ってしまつて」

ララの言葉に、ナツメが驚きの声を上げた。

「あの狩りの最中に？ コツみたいなやつ？ へえ……すげえな。」

ミディも教えて貰えよ」

ミディは眉間に皺を寄せて、ジロリとナツメを見た。ナツメはおどける様に肩を上げて見せながら、内心、今日別れたハルの言葉を思い返す。

『さてさて、どう話を持っていくか。ミディが素直にハルさんの言葉を聞く訳無いし。たく、最後の最後で難しい事を……』

ミディには言えないが、実はハルから、

「ミディにもララからコツを聞く様に仕向ける。私が伝えても、素直に聞くタイプではないだろう」

そう言われていたのだ。ミディの反応を横目で確認し、オプトがニツコリと微笑み言葉を繋ぐ。

「まあ、それはミディの好きなようにすればいいさ。ララ、ハルさんが「ララの魔法はセンスがいい」と褒めていたよ。そう言えばミディの事は……。いや、何でもない」

「私の事は……？」

ミディが目を見開き、オプトにグルリと首を返した。ソファアに体を沈め、ジツとオプトに視線を向けると微動だにしない。

「ハルが……何て言っていたの？」

「あ……いや、いいよ」

「オプト!？」

「うん？」

オプトの歯切れの悪い言葉に、ミディが無表情で頷いている。ナツメはゴクリと息を飲んだ。

「ええっと、何て言っていたかな？ 確か、【このままだと、近い将来ミディが一番お前達の足を引っ張る事態になるだろう。その時は、早く見切りを付けて他のマジッカーを探した方がいい】なんて言っていた様な……？」

オプトは首を捻りながら、「なあ？」と、ナツメに同意を求めている。ナツメもオプトに目を向けて、うんうんと頷いた。

ミディは自分自身の能力に多少の自信を持っている。他のマジッカー達と比較しても、使える魔法は群を抜いていた。その自分が、パーティの足手纏いになると言われたのだ。勿論、心中穏やかではない。

「へえええ？ 私が一番の足手纏いって……？」

「勿論、俺達はそんな事思っていないけど、ハルさんが言うには、【ララは己の秘めたる力に気付かず、コンプレックスで魔力に力が伝わっていないかった。コツさえ掴めれば、これから飛躍的に成長する。しかしミディは違う。確かに魔力は強いが、力にムラがある。恐らく深く魔法原理を意識しなくても、何となく使いこなせてきたのだろう。そんな奴は感覚だけで、強引に突き進む。そんな事では、近い将来成長が止まる】って言ってなかった？」

ナツメの言葉にオプトもコクコクと頷く。二人の強引な展開に、ララが目を見詰めて二人を交互に見ている。その時、大きく息を吸って、ミディがスクツと立ち上がった。その行動に、全員がミディを覗き込んだ。

「ミディ……？」

「私……いつかまた、あの二人と会う様な気がするわ。会ったら、あの女に「足手纏い」って言葉、撤回させるわ、絶対!」　　ララ、体調が戻ったら、そのコツってやつ、教えて!」

そう言うと、ツカツカと広間を後にした。「ミ……」後を追いかけてようと、腰を浮かせたララを、オプトが静かに制止する。

「オプト！ ナツメ！ 言いすぎよ！」

ララの非難に、オプトが苦笑いを浮かべ、ナツメが両手を上げた。

「俺達には、魔法が何たるかなんて分からないからさ、ハルさんの言葉には説得力があつたし」

「そーそー、あの鉄仮面で【ミディの為を思うなら】って言われてみ？ あいつ素直に聞くタイプじゃないし。ま、ちよっと強引だったかな」

二人の言葉に、ララも口を噤む。今回の狩りでハルの高い魔法を体現した訳ではない。しかしハルのスキルは、言わずと知れたものだ。「あ、俺、最後の最後まで名前呼ばれなかった。どういう事？？」

そう言えば、こんな事も言ってたよな。【そこそこの獣を相手にするのなら、今まで通りやればいい。しかし命を掛けなければ倒せない獣が出現した時、身を引きたくなかったら、引かせたくなかったら考えて行動するんだな】ってさ」

ナツメがハルの言い方を真似る。オプトが苦笑いを浮かべながら、「俺さ……本気でハルさんと元に仲間になって欲しいって願ってた。実際出発する前にも、声を掛けたんだ。ハルさんがリーダーだったら、もつとこのパーティを、よい方向に導いてくれるだろう。それ程客観的で冷静だ。今回の狩りで自分の甘さが身に染みたよ」

オプトの言葉に、二人は言葉を無くす。ハルをリーダーに言うよりも、オプトがそんな事をずつと考えて居た事に驚いたのだ。ナツメが顎髭を擦りながら、オプトをジッと見据えて問うた。

「で？」

「断られた」

「ハルさんは、どう断ったの？」

「お前達レベルの人間とつるむ気はないってさ」

その言葉に、ナツメがブウーと噴き出し、頭を掻きながら笑った。「たく、ハルさんらしいよな」

悔しいが納得もしてしまう。今回の旅は、全てハルの掌で踊らされていた様なものだ。初めから終わりまで、キツネにつままれるようだった。

「そんな人に大丈夫って言われたんだ。ララ、自信持っていいていいぜ」
オプトが、白い歯を見せて笑う言葉に、ララはポカンとした表情を浮かべている。そんなララを見ながら、ナツメが元を真似ながら言う。

「元も言ってたぜ。【ハルにしては珍しく他人に係ってんな。こいつ、自分以外は本々当に興味が無い奴だから、言葉はきついけど、期待してんだと思うよ……多分】ってさ」

ナツメの言葉に皆がプツと噴き出した。クッションを抱え込みながら、ララがボソリと呟いた。

「また会えるかな」

「俺はまた会えそうな気がするよ」

「今度こそ、ハルさんに、「ナツメ」って呼ばせて見せる!!」

「もう少しゆっくりしてから」そう言うララを残し、オプト達は広間を後にした。

「て言うかさあ、オプトく良かったのか？ 一緒に旅に出たかったんだろ？」

「まあね」

ナツメの言葉に、オプトは一度肩をすぼめた。

「俺にはあんな狩りは、到底出来ない。申し訳ないよ……」

視線を落とすオプトの頭を軽く叩くと、ナツメは腕を頭に組んだ。

「おいおいリーダーがそんな弱気じゃ困るよ？ 元も言っていたじゃん、全ては経験だって。そうやって選択肢を沢山増やしているくんだってさ。俺達はもともと強くなるよ。俺が言いたいのはさ……」

ナツメの言葉に、オプトが耳を傾けている。

「いや……いっか」

そう言うと、ナツメはオプトの肩を組み、ガハハと笑った。オプトは、優しい仲間の言葉に微笑みながら、ハルの最後の言葉を思い返す。

【オプト……我々はエンダである前に、一つの人格を持った人間だ。それを忘れるな】

その表情は真剣で、真つすぐ見据えるその視線にオプトは何も言えなかった。

『どんな意味が込められて居たのだろう……今度会ったら聞いてみよう』

オプトは、そんな事を考えていた。

皆が居なくなつた広間で、ララはクッションを抱え込みながら物思いに耽る。

『私のコンプレックスを読み当てて、そこから解放してくれた。…

…そうか、私、お礼を言いたかつたんだ……』

結局何一つ、ハルの事は分からずじまいで、とても惜しいような気持ちになる。同じヒーシャとして、もつと話してみたかった。

『「ララは己の秘めたる力に気付かず、コンプレックスで魔力に力が伝わっていなかった。コツさえ掴めれば、これから飛躍的に成長する」』

ハルの言葉を思い出し、ララはクッションの中に顔を埋めた。嬉しさで顔が紅くなり、胸が熱くなる。

『今度会える時が来たら、もつと成長した自分を見てもらいたい。』

その時は、もつと語り合う事が出来るのかな……』

そう思うと、ララはクッションをグツと抱きしめた。

元達は果てしない草原を、ギヴソンで駆け抜けていた。

「一ヶ月ってあつという間だったなあ。こんな広い世界だもんな

……もう会えないよな」

元の独り言に、ハルは特に反応もせず前を見据えている。

「この一カ月、バカやって、笑って……ホント、楽しかったなあ」
元は考える事に集中をすると、脳と口が直結するタイプだ。付き合
いが長いタロは、クワワアと大欠伸をしている。

「あんな馬鹿やって、沢山話したのってエンダに成った時以来だな」
当初元達が目指していた町まで、まだ数十キロある。地平線の彼方
に目を走らせる元は、手綱を操りながら目を細めた。

「そうそう、あの蛾の成虫が……」

元の思考が思い出話まで広がりを見せた為、ハルが一度目を落とし
ボソリと言葉にした。

「あいつらと一緒に旅をしたいのなら、今からお前だけ戻ればいい」
ハルの言葉は嫌みでも牽制でもなく、あくまで言葉の通りの意味だ
が、元はビクリと身体を揺らした。加えて自身に、独り言の自覚が
ないのだろう。ワタワタと焦りながら、一際大きな声を上げた。

「はあ？ 何言ってるんのお前。お、俺よりも、お前の方が、あいつ
らと一緒に旅した方が良かったんじゃないのか？ あいつらと一緒に
だったら強くなんぜ」

元の言葉に、『気づいていたか』そんな事を思いながら、ハルはポ
ツリと答える。

「強くなるかは分からないが、あのエンダ達が常軌を逸している点
は同感だ。事を成す人間というのは、奴らの様な人間を言うのだろ
う……格が違いすぎる」

ハルの言葉に、元はオプトの誘いをバツサリと断ったシーンを思い
返す。

『お前達レベルの人間とつるむ気が無いって、そう言う意味か』

「まあ、力が及ばないのは悔しいが、奴らとは違う方向で生きて行
けばいい」

ハルの口から「悔しい」などと人間臭い言葉が出た事実、元は耳
を疑った。誰よりも状況を把握し、高みから見下ろしているハルこ
そ、エンダの中では常軌を逸した人間だと元は思っている。

「及ばないって、全然違うじゃん。おめえが、あいつらの何に負け

てるって言うんだよ」

「確かに今はそうかもしれない。しかし、いずれ簡単に抜かれる」

ハルが独り言の様に呟く言葉に、元は口を噤む。

『俺もオプトに同じ事を感じていた。同じ戦士として、オプトの戦闘のセンスは、もうチート要素って言うか。いつか絶対に抜かれるっていう、嫌な確信をヒシヒシと感じるんだ』

一狩りを重ねるごとに、オプトの一太刀は鋭さを増し、その成長は目を見張るものがある。狩りの最中で、オプトの技に見惚れた事は一度や二度どころではない。

「ララや、あと何気にオプトにまで、指導してたくせに」

「あんな奴らは、それこそ極限まで強く成ってもらわなければ。個々のエンダの成長は、この世界にとって重要課題だ。その一石になるのも一興だろう」

表情が変わらないハルの心中は読めないが、元は自身に言い聞かせるように、また決意の様に言葉を繋げる。

「でも俺、ただで抜かれる気ねえから」

鼻息を荒くして、元は言葉にした。ハルはハルで、ボソリと言葉を返す。

「無論だ。我々が生き延びていれば、恐らくまた会う機会もあるだろう。その時まで精進あるまでだ」

その言葉に、元は力強く頷く。オプト達との出会いによって、元達は更に気を引き締める良い機会となった。元は頬に当たる風を感じながら、決意も新たにすする。

『俺には才能なんてねえ。努力に勝る才能はねえなんて、そんな青臭い事は言わねえ。あいつらは才能に努力を重ねて来るんだからなでも、自分に恥じないように、後悔しないように生きて行くんだ。俺らは』

「てかさ」聞きたかったんだけど、何であの狩りを受けようって策略したの？ めっちゃ強引だった……って、今に始まった事じゃ無いけど」

今にの部分を、さり気なく入れて呟く。その問いに、ハルは事何気に言った。

「民と直接係わる機会など滅多にない。あんなイベントには、乗らないと損だろう？」

「イベントって」

ハルの言葉に頭を捻りながら、元は溜息を吐く。ハルの真意は、言葉だけでは分からない。聞いても理解出来ないと判断した元は、あえて突っ込んで聞くのをやめた。

渴いた風が、鼻先をくすぐる。ここ一帯も氣候が良い場所らしい。元は、独り言かのような小さい声で、ハルに問うた。

「俺ら、狩りだけじゃ、ねえんだな。友達とか仲間とか……悩んだり、喧嘩したり笑ったり、さ」

ハルは元の言葉に、一瞬の間を置きながら、「生きているのだから、当たり前だろう」そんなハルらしくない言葉を返す。元はどこかで聞いた事があるな……そう思いながらも、

「だよな」

そう呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274x/>

エンダ

2012年1月12日10時48分発行